

国語史の中世論攷

著者	坂詰 力治
学位授与大学	東洋大学
取得学位	博士
学位の分野	文学
報告番号	乙第115号
学位授与年月日	1999-09-13
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00000870/

(付記) 本稿の用例は、鈴木弘道著『校註無名草子』に拠った。

第二篇 中世後期の語彙・語法

第一章 室町時代における「こそ」の係り結び

文法史上、古代語と近代語とを分かつ注目すべき事象の一つとして、係り結びの法則の崩壊をあげることができる。すでに平安時代においても係り結びの乱れは生じ始めていたが、それが大きく衰退していくのは、いわれているように室町時代の口語においてである。この時代の口語では、活用語の終止形と連体形との合一化に伴う連体形終止の一般化によって、係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」の連体形の結びに示差性を失い、係り結びが文法的に意味をもたなくなつたのである。そして、「こそ」については、已然形との呼応関係から係り結びを保ち続けるが、それも「ぞ」「なむ」「や」「か」の係り結びの消滅に連関して、室町時代の末期には口語からは姿を消し、崩壊するといわれる。しかし、「こそ」の係り結びは、室町時代末期においても、現象的には呼応関係が乱れることはあるものの、規範的にはなお「こそ——已然形」の呼応が保たれているとされている。

そこで、本章では、室町時代における「こそ」の係り結びの実態を調査し、係助詞「こそ」の結びがどういふところから乱れ、崩壊していったかを考察しようと思う。

調査の対象とした資料は、次の五点である。

文語資料

①車屋本謡曲（日本古典全書『謡曲集』上・中・下）

②大山寺本曾我物語（荒木良雄校註『大山寺本曾我物語』（白帝社））
③虎明本狂言（池田広司・北原保雄著『大蔵虎明本狂言集の研究』本文篇上・中・下、〈表現社〉）
④論語抄（京都大学付属図書館）（坂詰力治編『論語抄の国語学的研究 影印篇』（武蔵野書院））
⑤天草版平家物語（亀井高孝・阪田雪子翻字『ハビヤン抄 平家物語』（吉川弘文館））
調査対象を右の五点にしたのは、これらがいずれも室町時代の各ジャンルを代表する資料であって、本論の目的を果たすのに事足りると判断したからである。

一 文語資料における「こそ」の係り結び

まず、文語資料において「こそ」がどのように用いられているかをみると、

I 係り結びが完結しているもの

II 係り結びが乱れ、あるいは流れているもの

の二つに整理することができる。なお、結びが省略されている（と読みとれる）もの、終助詞化しているものは対象から外した。

〈表1〉

		①	②
I	A	139	100
	B	39	26
	C	18	21
	D	190	202
小計		386	349
II		57	43
合計		443	392

（注）
IのA B C Dの記号は、「こそ」の結びが動詞=A、形容詞=B、形容動詞=C、助動詞=Dであることを表す。

右のIとIIの「こそ」の用法が、文語資料の①②にどのようにあらわれているかを数値によって示すと、〈表1〉のようになる。

〈表1〉から、文語資料における「こそ」の係り結びの割合は、①の車屋本謡曲が八七・一三％、②の大山寺本曾我物語が八九・〇三％で、いずれも九割弱の高い比率を示していることがわかる。

Iの結びの実態を示す。（数字は用例数）

I-A（結びの動詞）

①の場合

候ふ（補助動詞ヲ含ム）88 あり21 給ふ（補助動詞ヲ含ム）4 承る2 見ゆ1（以下、各一例） 落ちゆく 沈む 絶ゆ
くだる（下） 立ち騒ぐ さはる（障） つづく うつる（移） いとふ かすむ（霞） 物思ふ おはします あ
やしむ（下二段） 思ふ 申す 契る 聞く 問ふ 通る 勇む 出づ おもほゆ 覚ゆ —— 以上、二八語、
一三九例

②の場合

候ふ（補助動詞ヲ含ム）65 聞く3 申す3 覚ゆ3 言ふ2 よる（由）2 あり2 奉る（補助動詞）2 まし
ます（補助動詞ヲ含ム）2 給ふ（補助動詞）2 なる（成）2 承る2 す（為）1（以下、各一例） いたす
見る 思ふ 持つ かかる（掛） 入る（四段） 出す 出づ 抱く —— 以上、二三語、一〇〇例

①の場合

かなし（悲）9 めでたし7 物憂し5 はかなし3 うれし3 ありがたし2 うし（憂）2 おそろし2
久し2 惜し1（以下、各一例） 深し やさし なし —— 以上、一三語、三九例

②の場合

口惜し4 悲し3 面白し2 嬉し2 善し2 恐ろし1〈以下、各一例〉 心狭し^{せば} 多し 惜し 忙し あさ
まし つらし むつかし いたはし なし 拙し 悔し うたてし — 以上、一八語、二六例

I-C (結びの形容動詞)

①の場合

哀れなり3 はるかなり3 ふしぎなり2 あだなり2 愚かなり2 たえ(妙)なり2 さやかなり1〈以下、
各一例〉 奇特なり すなほなり ことわりなり — 以上、一〇語、一八例

②の場合

無慙なり10 哀れなり5 不便なり2 愚かなり1〈以下、各一例〉 不思議なり 花やかなり 奇怪なり —
— 以上、七語、二一例

I-D (結びの助動詞)

①の場合

けり59 なり(断定)47 べし23 む(ん)17 らむ(ん)17 たり(完了)11 き4 ず4 まほし3 す(使
役)1〈以下、各一例〉 りらし けむ(ん)つ — 以上、一四語、一九〇例

②の場合

けり105 なり(断定)16 む(ん)15 つ15 たり(完了)12 らむ(ん)9 き9 ず8 む(ん)ず4 る2
べし2 けむ(ん)2 ぬ1〈以下、各一例〉 なり(推量)たし — 以上、一五語、二〇二例

①車屋本謡曲、②大山寺本曾我物語の二文語資料における「こそ」の結びとしての已然形に立つ語の実態は、以
上のとおりである。

それでは、Ⅱの「こそ」の結びとして已然形をとらず、他の活用語で結んでいる、いわゆる係り結びの「乱れ」
ているものⅠP、あるいは、係助詞「こそ」の勢いを受けて、結びとなるはずの活用語で文終止せず、接続助詞を
つけて、さらに下へ続ける形をとる、いわゆる係り結びの「流れ」ているものⅠQには、どんなものがあるか、次
に示すことにする。

ⅡP (係り結びの乱れ)

①の場合

(ア)是なるこそ女院の御庵室にて有りげに候。(大原御幸)

(イ)只今こそあの岨^{そば}づたひを女院の御帰りにてさふらふ。(同右)

(ウ)さてこそ讃州、志渡寺と号し、毎年八講、朝暮の勤行、仏法繁昌の、霊地となるも、この考養と、うけたまは
る。(海士)

(エ)さがのの方の秋の空、さこそ、心もすみわたる、片折戸をしるべにて、名月に鞭をあげて、駒を早め急がん。
(小督)

(オ)さればこそ猶執心のえんぶの涙とは、今は此世になき人の詞也。(松風村雨)

(カ)夏は涼しき萍^{うもぐさ}の、是こそ今の歌なりとて、既(に)よまんとさしあぐれば……(双紙洗)

(キ)扱こそ、千手の誓には、枯れたる木にも花さくと、今の世までも申すなり。(花月)

(ク)さればこそ猶みれんなる美女也けり。(満仲)

(ケ)それは母にて候者の申すことにてこそ候らん。(元服曾我)

(コ)親考行もかくばかり、さこそは草のかげに、我等を守り給ふらん。(同右)

(サ)今こそは、色に出でなんにしきぎの……(錦木)

(シ)あれ見よかはづが子どもこそ、かたきをのがれんと。の出家、正しく求法の為ならずと……(小袖曾我)
 (ス)我名をなにとゆふ浪の、引くや夜塩もあさくらや、木の丸殿にあらばこそ、名乗をしてもゆかまし。(屋島)
 (セ)とはばこそ、独(り)わぶ共答へまし。(敦盛)
 (ソ)今の小町は、たへなる花の色このみ、歌のさまさへをうなにて、ただ弱くともむとこそ、家々の、書伝にもしるし置き給へり。(鸚鵡小町)

の一五例が、①における「こそ」の係り結びの乱れである。ただし、動詞が結びに立って乱れた(ア)～(エ)の四例のうち、(ウ)に見える係助詞「こそ」の勢いは、文末の「うけたまはる」までは及ばず、「こそ……と号し」でまとまっているようにも思われ、そうであるとすれば、「乱れ」ではなく、結びの「流れ」ということになり疑問が残る。また、(エ)における「こそ」の結び「すみわたる」も、そこで文が切れず、下の「名月」に連体語として続くことと解せるとすれば、(ウ)と同様、結びの「流れ」ということになる。結局、①における完全な係り結びの乱れは、動詞では、「候ふ」一語二例、助動詞では、「なり(也)」「(断定)三例、「けり」一例、「らん」二例、「ん」二例、「まし」二例、「り」一例、の五語二一例で、形容詞、形容動詞の結びには乱れは見られない。

②の場合

(ア)さればこそ新田が謀叛実なり。(巻八、二〇三頁)
 (イ)さてこそ曾我時宗は、朝比奈の三郎にはみぎは優りの大力とは、国の人々まで知られけり。(巻六、一五四頁)
 (ウ)昨夜十郎に追駈けられて、垣を破りて逃げたりし新開荒次郎実光進み出で、申しけるは「……中略……」とこそ申しける。(巻九、二五一頁)
 (エ)八十有余にして大往生の素懷を遂げけるとこそ伝へし。(巻五、一四三頁)
 (オ)さてこそ慈恩寺は藤の名所には入りたりし。(巻七、一七〇頁)

(カ)すでに御方こそ四番まで負け給ひぬと申しければ、……(巻一、三頁)
 (キ)老少不定の習、彼も病ひつき死することあらば、空しく止まりなんこそ悲しかるべし。(巻四、一〇八頁)
 (ク)十郎は虎が膝に臥しながら、顔をつくく／＼と見て、助成を睦じげに見むも今こそ限なるべきと、(巻六、一五六頁)
 頁)

(ケ)われこの年月祈り申せし願(ひ)の叶ふにこそあるらん。(巻四、九八頁)

(コ)是もたゞ我等を世にあらせんと思ひてこそ云ひつらむ。(同右、一一一頁)

(サ)さこそ覚すらむ。(巻九、二二二頁)

(シ)さこそ思召し候らん。(同右)

(ス)母が事をこそ思ふらん。(同右、二五三頁)

(セ)一つ庵にあらばこそ、別に庵室引結び、衣をも濯ぎて奉らむ。(巻六、一五八頁)

(ソ)さこそ悲しくましましけむと推し量られて哀れなり。(巻二、四八頁)

の一五例が、②における「こそ」の係り結びの乱れである。ここでは、動詞、形容詞、形容動詞といった用言の結びに乱れは一例も見られず、すべて助動詞である。すなわち、「なり」「(断定)一例、「けり」二例、「き」二例、「ぬ」一例、「べし」二例、「らむ(ん)」五例、「ん」一例、「けむ」一例の八語一五例ということになる。

一般に、「こそ」の係り結びは、室町時代においては、文語はもちろん、口語においてもなお規範的かなり保持されていると説かれる。しかし、①②の資料についての実態調査からすれば、その規範は「こそ」——用言の已然形という呼応の形において極めて厳密に保たれているものの、「こそ」——助動詞の已然形という呼応の形においては、文語であつてもすでに崩れていると言えるのである。⁽²⁾

II-Q (係り結びの流れ)

①の場合

(ア)是こそみとせまで錦木たてたりしものの古墳なれば、とり置くにしきぎの数共につかに築きこめて是をにしきづかと申し候。(錦木)

(イ)よし余所にてこそみよしの、花をも雲とみなせども、近くきぬれば雲と見し、桜は花に頭はるる物を、(二人閑)

(ウ)名こそ上なき富士なりとも、あつぱれ浅間はまさうずる物をと仰せられしかば、(富士太鼓)

(エ)さればこそはじめより、やうある人と見えつるが、扱はきのふの舟人は、舟人にあらず、漁夫にも、あらぬ、

(兼平)

(オ)ふしぎやなああの石塔は、和泉式部の御墓とこそ聞きつるに、そも栖とは不審なり。(誓願寺)

(カ)皆人のかたみには、主にそふよとなつかしきをこそ、其名残ともみる物を、是はさしもに思ひ子を、失ひ給ひし人なれば、(藤戸)

(キ)さればこそ内や床しきを引きかへ、内ぞゆかしきとよむ時は、小町が読みたる返歌也。(鸚鵡小町)

(ク)此手をば、かうこそさししぞとて、左右にさつ／＼の袖をたれ、(木賊)

(ケ)いやさればこそ我おちにきと人に語るなど、(女郎花)

(コ)道のべに清水ながるるやなぎ陰、／＼、しばしとてこそ立ちどまり、すずみとる言のはの、(遊行柳)

(サ)是こそ蓮の糸を染めて、かけてほされし桜木の、花も心の有る故に、(当麻)

(シ)海辺も浪しづかにて、楽しみの秋の色、名こそ龍田の、山かぜも静なりけり。(龍田)

のように、多様な形式をとってあらわれるのが、①における係り結びの「流れ」である。(ア)(イ)は、いずれも「こそ」——已然形の形をとりながら、さらに下に接続助詞「は」「ども」を続けたものである。「こそ」——已然形の

係りの結びで言い切ったものが、「昨日こそ早苗とりし。か、いつの間に稲葉そよぎて秋風の吹く」(古今集・秋上)のように、文脈上、そこで完結せず、逆接の気持で後続していく用法は、係助詞「こそ」の強調を強く示す結果として、古代語では広く行われたものであった。しかし、「こそ」——已然形という形式で逆接の意味を表す用法に対する意識が薄らぎ、逆接の意味を直接表す語そのものを結びの下に続けることによって、その表現の理解を容易にする形式が、平安時代以降、徐々にとられるようになっていくことは、よく知られている事象である。⁽³⁾右の(イ)の例がここに言うところに該当するものであるが、結びの下に「ども」がついた例は、①では四例見られる。(ア)は結びの已然形の下に「ば」がついた例で①では三例見られる。

「こそ」——已然形の結びに、逆接の「ど」「ども」をつけて表現する形式は、それが定着するに随って「こそ」——逆接の意を表す助詞という表現形式に発展し、「こそ」の結びを受ける逆接助詞は、已然形以外の活用形に接続する種々の助詞の使用を生み出していくのである。(ウ)(カ)に示した例がそれであるが、①では、(ウ)の結びの終止形に「とも」のついた例は二例、(エ)の結びの連体形に「が」がついた例は五例、(オ)の結びの連体形に「に」のついた例は一七例、(カ)の結びの連体形に「ものを」のついた例は二例、それぞれ見られる。

(キ)は、「こそ」の結びとなる活用語に体言がついたために、その活用語が連体形となっている例である。(ク)は、結びとなる活用語が下に終助詞「ぞ」がついたために、同じく連体形になっている例である。「こそ」が終助詞「よ」と呼応する用法は、早くは平安時代後期に散見しはじめるが、室町時代では盛んに用いられ、①の車屋本謡曲においても、

花の陰に、やすらふと見えし儘に、我こそ、梅のあるじよと、ゆふぐれなるのはなの陰に、(軒端梅)
ふしぎや神の引合せかやこそ父の家次よ。(歌占)

のように、一六例見られる。この場合、「よ」に上接する語は体言であることが普通であるが、①では、

あれこそ澳の鷗候よ。(墨田川)

先先まぢかき比叡山、あれこそ日本の天台山候よ。(善界)

のように、丁寧の動詞「候」と結びついて用いられた例が一一例も見られる。(ク)の例は、その用法が拡大し、「ぞ」にも及んだものと解せられる。

なお、①には、「こそ」——「よ」の本来の形式である「こそ」——体言で結んだ、

此うへは、何とつつまん我こそは、別れし御子松若と、いふにもすすむ涙かな。(木賊)

のような例も見られる。

(ケ)は、「こそ」が禁止の終助詞「な」と呼応した例である。

(コ)は、結びの語が中止法として、あるいは接続助詞「て」を伴って下へ続いていくために、連用形となっている例である。

(シ)は、「こそ」の結びとなる活用語が掛け詞となっているために、結びにあたる活用語が具体的に現れてこない例で、①の七五調を基調とする韻文に用いられ、他にも一例見られる。

以上が、①の車屋本謡曲における係り結びの「流れ」の実態である。

②の場合

(ア)一人聞きつくる程こそ遅かりければ。鎧、甲、弓、太刀、刀、馬よ、鞍よと、ひしめき周章つる程に、(巻九、二三七頁)

(イ)この殿ばら兄弟は、身こそ貧なれども、心は貧にあらばこそ、疎忽に入りて、(巻六、一四九頁)

(ウ)今生こそ父の縁少くとも、来世にては必ず一つ蓮に生れあふべしとて(巻三、七九頁)

(エ)……と申す大力を、奥野の狩の帰りに、片手を放ちて相撲を取り、二番勝ちてこそ名を顕し給ひしが、されど

もそれを最後にて、(巻四、九八頁)

(オ)げにや論語の言葉にも、極めて衰ふる時は必ず又盛なる事ありとこそ申すに、などや方々のさのみに憂き事の
変らざるらん。(巻四、一一三頁)

(カ)人こそ多くある中に、斯様の仰(せ)を蒙る事、(巻八、二〇二頁)

(キ)宮王をこそ法師になして、父の孝養をもせさせんと思ひしに、(巻四、一〇七頁)

のように、②の大山寺本曾我物語における係り結びの「流れ」の現象は、七とおりの形式をとっている。基本的には①の車屋本謡曲に見られる場合と差は認められず、若干①の方が多様な形式をとっているという程度である。この時代の文語資料にはほぼ共通している現象と思われる。因に、②における(ア)・(キ)の他の例は(イ)が三例、(ウ)が五例、(オ)が一四例、(カ)が二例である。

なお、「こそ」——終助詞「よ」、あるいは「こそ」——体言といった係り結びの形式が、

あれこそ秩父の重忠よ。(巻四、九七頁)

あれこそ梶原平三景時とて、(同右)

のように、多用されていることは言うまでもない。

いずれにしろ、以上の①②の文語資料に見られたような係り結びの「流れ」の多様な現象が、「こそ」——已然形という係り結びの法則を崩壊し、やがて消滅させる遠因になったことは否定できないであろう。

二 口語資料における「こそ」の係り結び

ここでは、口語資料、すなわち、③の虎明本狂言、④の論語抄、⑤の天草版平家物語において、「こそ」がどのように用いられているかをみる。先の文語資料の場合に倣って、

I 係り結びが完結しているもの
II 係り結びが乱れ、あるいは流れているもの

の二つに分けて、それらが③④⑤の三資料において、どのようにあらわれているかを数値で示したのが、〈表2〉である。

〈表2〉から、口語資料における「こそ」の係り結びの割合は、③が八〇・四二%、④が六六・六七%、⑤が五八・二八%である。この三資料にあらわれた「こそ」の係り結びの割合は、三資料がいずれも室町時代の代表的な口語資料ではあるものの、資料の性格によって、比較的言語性を強くもったもの③、反対に極めて口語性の強いもの⑤、両者の中間的なもの④、というように分けられるものであって、それがそのまま係り結びの数値に反映したものと思われる。換言すれば、言語性の強い③の虎明本狂言が一番係り結び率が高く、反対に口語性の強い⑤の天草版平家物語が一番係り結び率が低いということであり、その中間が④の論語抄ということになる。こうした結果は、「こそ」の係り結びの文法が、口語の世界で崩れ去っていくという、崩壊の過程を考えるのに極めて示唆的である。

〈表2〉

		③	④	⑤
I	A	58	24	78
	B	28	3	14
	C	4	0	1
	D	135	25	104
小計		225	52	197
II		55	26	141
合計		280	78	338

(注)

ABCDの記号の表す意味は、
〈表1〉の(注)に同じ。

Iの結びの実態を示す。

I-A (結びの動詞)

③の場合

あり26 ござる7 候ふ(補助動詞ヲ含ム)5 給ふ(補助動詞)2 申す2 す(為)2 のむ(飲)1 (以下、各一例)とる(取) きく(聞) たつ(立) やぶる かく(懸) おどす(威) おしやる(仰有) しる(知) なる(成) 進ず でく(出来) やる(遣) くださる(下二段) — 以上、二〇語、五八例

④の場合

アリ12 候フ(補助動詞ヲ含ム)3 イフ(言)2 ナル(成)1 (以下、各一例) 問フ ス(為) 思フ 見ル 知ル カユ(替) — 以上、一〇語、二四例

⑤の場合

ござ(あ)る(御座)(補助動詞ヲ含ム)40 あり15 まらする(参)(補助動詞ヲ含ム)3 思ふ2 言ふ2 承る 2 見る2 申す1 (以下、各一例) す(為) 存ず 討つ よる(依) つかまつる おぼゆ 失ふ 下る 聞く 奉る(補助動詞) 馳せ歩く — 以上、一九語、七八例

I-B (結びの形容詞)

③の場合

めでたし8 をかし3 なし3 うれし2 おほし2 よし2 たかし1 (以下、各一例) つばし(壺)ほ そし うし つらし 物うし おもしろし やすし — 以上、一四語、二八例

④の場合

ヨシ2 多シ1 — 以上、二語、三例

⑤の場合

悲し5 なし2 おもしろし2 心憂し1〈以下、各一例〉 ござなし 心にくし おそろし 忘れがたし —
—以上、八語、一四例

I—C (結びの形容動詞)

③の場合

もつともなり2 さいはひなり1 ふしぎなり1 —以上、三語、四例

④の場合——用例なし

⑤の場合

あはれなり1 —以上、一語、一例

I—D (結びの助動詞)

③の場合

たり(完了)60 けり37 なり(断定)24 うずる8 しむ1〈以下、各一例〉 らむ します(尊敬)たし
まほし ます(丁寧) —以上、一一語、一三五例

④の場合

ウズル8 ベシ6 タリ(完了)5 ナリ(断定)2 ズ1〈以下、各一例〉 ラム タシ ツ —以上、八語、二五例

⑤の場合

うずる41 たり(完了)37 なり(断定)8 まじ3 たし3 ず3 けり2 らる(尊敬)2 なんだ(打消過去)2 き1〈以下、各一例〉 る めり —以上、一二語、一〇四例

以上が、③④⑤の口語資料における「こそ」の已然形で完結する、結びの已然形に立つ語の実態である。三資料には大きな相違は認められないが、④の論語抄のみに状(情)態表現を担う形容詞、形容動詞が「こそ」——已然形の形式で用いられることがほとんどない点は、文学性の稀薄な資料の性格を反映しているものとして注意される。また、先の文語資料における「こそ」——已然形の場合と比較しても、助動詞に文語と口語といった位相差が明確に出てはいるが、異なり語数の上ではほぼ同様な様相を呈している。

それでは、文語資料に倣って、Ⅱの「こそ」の「乱れ」——P、あるいは、「こそ」の「流れ」——Qの現象が、口語の三資料においてはどのように起きているか、その実態を示す。

Ⅱ—P (係り結びの乱れ)

③の場合

(ア)誠に是こそ天のあたへにてござる、いそひでまいらふ、(上、かくすいむこ)

(イ)よしなきこひをするがなる、ふしてみれどもおられはこそ、くるしやひとりねの、(中、文荷)

(ウ)もんどく天王に、二人の王子おはします、御名をは、これたかこれ仁とこそ申ける、(下、よこ座)

のように、③の虎明本狂言において、「こそ」の結びに已然形以外の活用形をとった例は、

(ア)の動詞が、

ござる2 候ふ まどろむ —の三語、五例、

(イ)の形容詞が、

あらまほし7 くるし —の二語、八例、

(ウ)の助動詞が、

たり(完了)5 (たり1、た4) らう4 ぢや3 けり3 う まい —の六語、一七例

である。

右の(ア)の動詞のうち、「ござる」は二例乱れているが、「ござる」は「I-A」で示したように、已然形で結んだ例も五例あり、補助動詞として頻用される語に乱れが生じている。(イ)の形容詞は、「あらまほし」一語、七例が乱れているが、已然形で結んだ例がなく、しかも、「脇狂言之類」「大名狂言類」「聾類山伏類」「女狂言之類」「出家座頭類」「集狂言類」「万集類」にそれぞれ添えられた、ほとんど同文の序文の終りの部分で、「そしる人こそあらまほし」とすべて用いられている。これは「あらまほし」という語の語形変化に対する誤認から生じたものである。ウ)の助動詞については、「けり」「たり」が「I-D」に示したように、已然形で結んだ「けり」三七例、「たり」六〇例に対して、わずかに「けり」三例、「たり」五例(内、四例は口語の「た」の乱れを示しているにすぎない。そして、他の「らう」「ぢや」「まい」「う」という助動詞は、いずれも一般的には室町時代以降、口語の世界に登場してきたもので、その上、已然形の活用を持っていないものである。したがって、「こそ」がこれ口語の助動詞と呼応する場合には、どれも文語の世界でのもの語形を失ってしまっているもので、例えば、

なふうれしがって、おしやる事をききやれ、さぞわかうなりたうこそおじやるらふ。(上、やくすい)
扱々かたしけなひ、是こそまことに命のおやじや。(上、ぶあく)

のように、終止形(あるいは連体形)で終止しなければならない。「こそ」——已然形の係り結びが、語形を変えない助動詞を多く結びにとるようになることは、その崩壊の要因として十分考えられる。

④の場合

(ア)タトヘバアソコニコソヒラウシタ者ガアルト聞タラバ(三三八ウ)

(イ)サレバコソサシデタ物デハ無ト云ソ(同右三六ウ)

(ウ)牛馬一疋ト云ハ牛ヲバ一頭トコソ云ヘリ(同右二四オ)

④の論語抄において、「こそ」の結びに已然形以外の活用形をとった例は、右の他すべて(ウ)の助動詞で、その異なり語と使用数は、

ラウ 6 タリ 2 (タル、タ) 也 2 チヤ —— の四語、一一例

である。このうち、「I-D」に示した助動詞にも見えるものは、「タリ」と「ナリ(也)」の二語であって、「II-P」だけにしか見えない語は、「リ」を除くと、已然形の活用をもたない「ラウ」と「チヤ」の二語となり、③の場合とほぼ同じ結果を示している。

⑤の場合

(ア)御恩こそ生々世々にも報じつくしがたう存ずる。(三二)

(イ)おのれを供にして急いで上れと、書いたことこそうらめしい。(九〇)

(ウ)三位の中將殿こそ当時は屋島にござらぬと、申せば(三三二)

のように、⑤の天草版平家物語において、「こそ」の結びに已然形以外の活用形をとった例は、

(ア)の動詞が、

ござる 3 あり 2 存ず 申す —— の四語、七例、

(イ)の形容詞が、

うらめし 憂し —— の二語、二例

(ウ)の助動詞が、

らう 30 た 13 う 5 ぢや 4 ず 4 る(受身) 2 らる 2 うずり —— の九語、六二例

である。(ア)の動詞はすべて「I-A」にも見えるもので、「存ず」「申す」は各一例しかないが、「ござ(あ)る」は四〇例、「あり」は一五例の多きにわたって已然形をとっている。(イ)の形容詞は、「うらめし」「憂し」二語とも

「I-B」には見えないが、「心憂し」一例が已然形の結びをとっている。動詞も形容詞も已然形以外の活用形で結んだ語例は極めて少ないと言えよう。(ウ)の助動詞については、「I-D」にも見えるものは、「うず」(四二対一例)⁽⁴⁾、「たり」(三七対「た」一三例)、「ず」(三対四例)、「る」(一対二例)、「らる」(二対二例)で、特に「うず」については、

北条さござればこそ平家は一門広かつたれば、子孫多からうず。(三八七)

の一例のみが、終止形(あるいは連体形)の結びをとり、他は四一例のすべてが已然形で結んでいる。このことは、口語資料といえども、已然形の活用形を有する助動詞であれば、法則に従うという規範意識があったことを示すものと思われる。一方、「I-D」には見えず、「II-P」にしか見えない「らう」「ぢや」が、

少将の心のうちさこそはたよりなかるらうと、あはれに見えた。(三八)

このたび素懷をとげうずることこそ、何より嬉しいことぢや。(二〇六)

のように、「らう」三〇例、「ぢや」四例も見える。已然形の語形をもたない「らう」「ぢや」のような語が多く結びに立っていることは、「こそ」の係り結びの意識がどんなにはたらいても、やがて「こそ」——已然形の規範意識が弱まる結果をもたらしただであらうことは容易に想像される。⁽⁵⁾

II-Q (係り結びの流れ)

③の場合

(ア) そんじやうそれこそ、さる引に無心をいふて、いひきけなんだとあれば、面目をうしなふ、(上、うつばざる)

(イ) 我にこそつらさは君かみすれとも人にすみつくかほのけしきよ(上、すみぬり)

(ウ) 今こそさやうにおほしめす共、やがてお大名にならせらる、御ずいさうがござるほどに、(中、どんぐむさう)
(エ) 公事をきひてくれひとおしやればこそきひたに、そのことくにとりみだひて、(中、おこしやう)

(オ) 都に人おほひといへども、某こそかくれもなひ仏師でおりやるは、こは物(中、仏師)

(カ) そんじやうそれこそ、こぶうりにゆきあふて、無心をいふて、いひきけなんだといはれては、こうなんがくちおしひ、(上、こぶうり)

のように、③における係り結びの「流れ」は多様な形式をとっている。(ア)イが「こそ」——已然形に接続助詞「ば」「ども」を続けたものである。(ウ)は結びの終止形(「おほしめす」)の下に逆接の「とも」を続けたもので、この例は八例見える。(エ)の例は、連体形に逆接の「に」をつけたもので、この例は五例見える。結びの連体形に「に」以外の逆接の接続助詞をつけた例は、「が」が二例、「ほどに」が二例、「ものを」が三例、「ところに」が一例見え、室町時代に盛行する多彩な接続助詞が用いられている。(オ)は結びとなる語が準体語となり、それに係助詞「は」がついたもの、(カ)は「こそ」の勢いが「いはれては」までなのかあるいは「くちおしひ」のところまで及ぶのか判断がまよう。

④の場合

(ア) 喪ニモ上下深淺ガ有テ中ヲ得テコソヨケレ共ヤスイヨリハイタウダハマシタソ(四四一オ)

(イ) 人コソ母牛ガマタラナ程ニ憤モイヤナトハ云トモ山川ノ神ガ棄ヤト也(四二〇オ)

(ウ) 注ノ義ナラハムサボリコトモナク願イコトモナイトコソ点スヘキニ厚薄ハスマヌソ(四五九ウ)

(エ) 其ノ謂レハ何ノ病ヲイヤス薬ヤラシツテコソ拝シテ受ケテ未達ト云テナメヌ処ガ礼ノ中ヲ得タル道也(四二六ウ)

④における「こそ」の結びの「流れ」は、右の四形式をとってあらわれる。④には、(ア)の結びの已然形に「ドモ」を下接して続く形式が二例、(イ)の結びの終止形に逆接「トモ」を下接して続く形式が三例、(ウ)の結びの連体形に逆接「ニ」を下接して続く形式が六例、そして、(エ)の後続の体言に引かれて結びが連体形になる形式が一例見られる。

⑤の場合

(ア)われこそ道がせばうなつて、のがれがたい身なれば、今はかうなるとも、(三二二)
 (イ)姫がことこそ心苦しけれども、それも生き身なれば、歎きながらも過さうず、(九一)

(ウ)信濃一国の者こそ従ひつくと、深いことはあるまいぞと、(二五七)

(エ)京童は高平太とこそ申ししたが、保証のころ大將軍を承つて、(二六)

(オ)ことはまだ十七にこそなる人が、これほど穢土を厭うて、(二〇七)

(カ)世をのがれうぞならば、かうこそあらまほしう思はれ、(三二二)

のような諸形式をとったものが、⑤における「こそ」の結びの「流れ」としてあらわれる。⑤には、(ア)の形式が三例、(イ)の形式が一〇例、(ウ)の形式が八例、(エ)の形式が、結びに逆接「が」を続けたもの一三例、「に」をつけたもの三四例、「ものを」をつけたもの一例、(オ)の形式が二例、(カ)の形式が一例、それぞれ見られる。

以上が、口語資料としての③虎明本狂言、④論語抄、⑤天草版平家物語の三資料にあらわれた「こそ」の係り結びの「流れ」の実態である。三資料いずれにも、文語資料で確認したものと同様の結びの流れの形式が見られる。また、平安時代後期以降、徐々に使われ始め、室町時代には文語・口語の区別なく広く用いられた、「こそ——体言よ」の新しい係り結びの形式も、三資料に使用数の差(すなわち、③五例、④一五例、⑤八例)こそ認められるものの、

某こそぢごくのあるじ、焰魔王さまよ。(③中、あさいな)

コレこそ政スル道ヨ也。(④四三四ウ)

かたみこそなかなか今はあだなることよと言うて、(⑤六四)

のように用いられ、⑤には、さらに「さればこそけき清盛が使ひはこのことであつたよ」のような「こそ——連体

形よ」が二例見られる。これも文語資料に認められる例であつた。

「ぞ」「なむ」「や」「か」の係助詞を受けて、連体形で結ぶ係り結びの形式が失われた室町時代にあつて、その結びの語形から、なお呼応関係を保持し続けた「こそ」と已然形との係り結びも、やがて遅れて消滅する。本章では、室町時代の文語・口語の五資料を使って、各々に見られる「こそ」の係り結びの実態を、Ⅰ係り結びが完結しているもの、Ⅱ係り結びが乱れ、あるいは流れているもの、の二点から調査し検討することによって、係助詞「こそ」の結びがどんなところから乱れていったかを考察してきた。その結果、五資料を見る限り、いずれも「こそ」を受けて已然形で完結する係り結びの文法は、文語資料の方がより強く保たれ、口語資料の方が弱くなっている。しかし、文語・口語を問わず、相対的に「こそ」の係り結びに対する規範はかなりよく保たれている。

已然形以外の活用形で結んだ「流れ」の語をみると、用言の例は文語・口語とも少なく、あつても、「あり」「候ふ」などといった補助動詞や形式動詞として用いられる動詞に偏っている。そして、乱れの多くは助動詞に見られ、それも文語では、「けり」「らん」「なり」など、いわゆる過去・推量・断定の意を担う助動詞に偏っている傾向が見られる。口語資料での乱れは文語よりは激しく、ここでの乱れの大部分は、「た(り)」「らう」「ぢや」などといった口語の助動詞で結んだものとなっている。

係り結びの「流れ」は、係り結びの文法に則して正確に行われていた平安時代には、わずかにしかその例があらわれてこなかった。しかし、中世に入ってくると、筋道のおった明示的表現が助長され、係り結びに対する意識の変化や誤認によって、「こそ」の結びとなる活用語が、後統語句に引かれて、已然形ばかりでなく他の活用形をとるようになり、多様な形式をとってあらわれる。この係り結びの流れは、中世では和歌や散文で広く用いられ、本章で取り扱った室町時代の五資料にあつても、文語・口語の各資料にほぼ同様の形式で多数見られる、というこ

とが明らかになった。

これらのことから、結局、「こそ」の係り結びは、已然形の語形を失った口語の助動詞（「た」「う」「らう」「ぢや」など）を結びにとることが多くなり、それによって「こそ」と已然形との呼応関係が弱まったために乱れ、また一方では、筋道のおった明示的表現の助長と係り結びに対する意識の変化などによってもたらされた係り結びの「流れ」が影響して、「こそ」の係り結びの文法は崩壊していったものと考えられるのである。

〔注〕

（1）日本古典全書『謡曲集下』二二三頁頭注（三五）には「吉本（筆者注、吉川家旧蔵本）『なれ』とある。

（2）福島邦道氏は『「こそ」とその乱れ』（実践国文学第三十四号）において、文語資料としてのキリシタン版『サントスの御作業の内抜書』『ヒィデスの導師』『ぎや・ど・ぺかどる』『スピリツアル修行』の四書に見える「こそ」の係り結びの乱れについて調査、検討された。そこでは、執筆意図の違いから、結びに立つ語の一々を問題にしておられないが、結論として「キリシタン版でも、口語資料である『天草版平家物語』や『天草版イソポ物語』では、『こそ』の係り結びの乱れがそんなに多くないのに対し、文語資料で、しかも、ここにとりあげたのはいずれも大部なものであるが、それらに乱れを見るということは、いささか撞着するところはあるが、大きく文語史の流れをかえりみると、キリシタン版の本流においては、『こそ』の係り結びは、乱れつつあったということになろう」と言及しておられる。本章で取り扱わなかったキリシタン版の文語資料における「こそ」の係り結びの乱れの実態がうかがえ、有益である。

なお、福島氏が掲出された用例を見ても、結びの乱れは助動詞に偏しているようである。

（3）「こそ——已然形」にさらに逆接助詞を後続させる表現がとられるようになった原因については、諸先学によってすでに究明されているところであるが、山口明穂氏がその著『国語の論理』（一九八九・三、東大出版会）の「四章 条件表現の問題」でふれられた「已然形の用法の変化——条件関係の明示」は示唆に富む。

（4）上の数字が「こそ——已然形」をとるもの、下の数字が已然形以外の結びをとるものである。

（5）柳田征司氏は、係助詞「こそ」の結びがどのようなところから乱れていったかについて、先学の諸説を紹介し、「しかし、それらにもまして、『こそ』の已然形結びを弱めていった原因としては、助動詞にその語形を変えたものが少なくない。

かったことがあげられる」（『室町時代の国語』第二章 文法史上の室町時代 一五九頁）と説明しておられ、説得力がある。

（追記）本章に引用した本文には、煩を避けて、私意にテキストの表記を改めたところがある。

第二章 室町時代における助詞「バシ」

日本語の歴史の上で、中世は文語（書きことば）と口語（話しことば）との乖離が進み、言文二途の方向を辿ることばの転換の時期である。この時期において、文語は文章語としてほぼ固定し、口語は生きたことばとして常に流動し、近代語への推移を徐々にとげていく。そして両者は、文法事象としての係結びの法則の保持と崩壊、活用語における二段活用の継承と一段化という対応を示すだけでなく、さらに音韻・語彙の領域においても相違する面を見せている。

こうした文語と口語とが互いに別々の道を辿っていく中世は、一般に前期（院政・鎌倉時代）と後期（室町時代）とに二分され、前期は未だ言文二途の乖離が緩く、古代語的要素を色濃く留め、後期は言文二途の乖離が一層進むと共に、近代語的要素を強く持つてくる時代として捉えられていることは既に周知のところである。

ところで、こうした日本語史上の中世において、新しく生まれた「バシ」という助詞がある。この助詞は、今日一般的には、鎌倉時代に新生した語と認識されているが、その語源については諸説が出されていて、未だ定説を見ない。近時、小林芳規氏は、鎌倉時代語研究の手掛りとして、この新生の助詞「バシ」について、⁽¹⁾鎌倉時代の各文献における使用例と位相の検討、⁽²⁾生成時期と語源の再考を詳細に試みられた。

その結果、⁽¹⁾に関しては、「『バシ』が鎌倉時代の文献の総てに現れるのではなく、『バシ』の現れる文献に

は偏りが見られる」ことを明らかにし、「バシ」の現れる文献は片仮名文であって、しかも片仮名文の総てに現れるのではなく、会話文か思惟文の中に用いられ、現れる場面が「日常の口頭語が強く反映する場面」であるとされた。そして、鎌倉時代の口頭語が片仮名文に現れる理由を、「訓点による漢文訓読文や平仮名による物語・和歌・日記・紀行が、前代の表記を伝承すると共に、その用語や語法までも旧規範に大きく拘束されたのに対して、片仮名による新しい表記は、用語や語法においても、従来の規範に縛られない当時の言語実態の別の側面を現出させることになる」というところに求められた。

(2) に関しては、山田孝雄氏の「バシ」の語源説、すなわち「『ヲバ』の意の『バ』の下に『シ』の附属せるもの」と、安田章氏の「ハシモからモを分離したハシが、シの用法が固定し、鎌倉時代以降口語を基調とする文献から姿を消すのに従って、一語化し、新形ハシの不安定さがハの濁音化を促したと解したい」とする語源説をもとに、両説の疑問点を明らかにし、「バシ」の生成に「ハ」と「シ」が与っていることは動かないとして、これらの助詞の用法を歴史的に検討し、結局、鎌倉時代の「バシ」を奈良時代の万葉集に見られる「ハシ」という複合語と結びつけて同一語と結論づけられた。そして、「バシ」と類例の二人称の代名詞「オレ」について併せて検討して、俗語的性格の「オレ」は、上代の語が平安時代にも生きて和文の周辺部で行われ、それが片仮名文という新しい表記で表現され旧規範に縛られない言語作品に現れて、鎌倉時代の文献に登場するに至ったと考えられる。同様に助詞「バシ」も、上代の語が平安時代にも生き続け、口頭語の俗語として和文の周辺部で行われ、それが片仮名文の古い規範に縛られない鎌倉時代の文献の会話文に現出するに至ったと考えることは出来ないものか。

と、「バシ」の生成を考えられたのである。

そこで、本章では、鎌倉時代語としての「バシ」についての小林氏の論考を支えとして、室町時代において「バ

シ」がどのように用いられ、推移しているかを考察しようと思う。

調査の対象とした主な資料は、次の口語資料①～⑦、文語資料⑧～⑪の二点である。

- ① 虎明本狂言⁽⁷⁾ (池田広司・北原保雄著『大蔵虎明本狂言集の研究』本文篇上・中・下、表現社)
- ② 漢書抄 (京都大学附属図書館清家文庫蔵本) (大塚光信編『續抄物資料集成第四卷』清文堂)
- ③ 史記抄 (内閣文庫本古活字版) (『抄物資料集成第一卷』(巻一・巻十九は京都大学附属図書館清家文庫蔵本で補う) 清文堂)
- ④ 論語抄 (京都大学附属図書館清家文庫蔵本) (坂詰力治編『論語抄の国語学的研究 影印篇』武蔵野書院)
- ⑤ 毛詩抄⁽⁸⁾ (東京教育大学〈現、筑波大学〉附属図書館蔵本古活字版) (中田祝夫編抄物大系『毛詩抄(上)』勉誠社)
- ⑥ 天草版イソホ物語 (京都大学文学部国語国文学研究室編『文禄二年 耶蘇会板 伊曾保物語』)
- ⑦ 天草版平家物語⁽⁹⁾ (亀井高孝・阪田雪子翻字『ハビヤン抄 平家物語』吉川弘文館)
- ⑧ 車屋本謡曲 (日本古典全書『謡曲集』上・中・下、朝日新聞社)
- ⑨ 大山寺本曾我物語 (汲古書院影印本)
- ⑩ サントスの御作業の内抜書 (福島邦道著『サントスの御作業 翻字・研究篇』勉誠社)
- ⑪ ドチリナ・キリシタン (橋本進吉著『キリシタン教義の研究』(橋本進吉博士著作集第十一冊) 岩波書店)

一 各文献における「バシ」の使用状況

まず、各文献に見える「バシ」の使用状況を「バシ」を含む句の表現の種類によって整理し示すと、〈表1〉のごとくである。

この〈表1〉から、次の二つのことがわかる。

第一は、文献の性質による「バシ」の使用状況の相違ということである。室町時代の「バシ」の使用状況を、口

表1

文献名 「バシ」を含む句の種類	口 語 資 料							文 語 資 料			
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
疑問の句中	7	7	56	6	4	1	0	3	0	0	0
推量の句中	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
禁止の句中	3	1	8	4	7	0	2	4	4	0	0
命令の句中	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
仮定の句中	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0
否定の句中	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
特定の制約法	0	0	4*	0	2	0	0	0	0	0	0
計	10	8	72	10	13	1	2	7	4	0	0

注 *には「バシ」の下接語句が省略されている一例を含む。

語資料と文語資料とに分けて検討した場合、口語資料では①の虎明本狂言と、②の漢書抄、③の史記抄、④の論語抄、⑤の毛詩抄といった抄物文献とに「バシ」の使用が目立っている。とりわけ、③の抄物の史記抄は、他の②④⑤の文献より分量が多いものの、「バシ」の現れ方が顕著である。そして、同じ口語資料であっても、⑥の天草版イソホ物語、⑦の天草版平家物語といったキリシタン文献には、その表現が会話形式をとっていても、「バシ」の使用が⑥は一例、⑦は二例というように極めて少ないことである。

一方、文語資料では、⑧の車屋本謡曲に七例、⑨の大山寺本曾我物語に四例というように、僅かではあるが「バシ」が用いられている。しかし、⑩のサントスの御作業の内抜書、⑪のドチリナ・キリシタンといった文語文によって書かれたキリシタンの教義書には、「バシ」は全く用いられていないということである。

こうした室町時代における「バシ」の文献ごとの現れ方の相違は、前代での「バシ」の位相、すなわち片仮名文で「日常の口頭語が強く反映する場面」としての会話

文に主として用いられるということに起因しているものと考えられる。したがって、抄物文献に「バシ」が多く現れるのは、抄物が片仮名による講義の筆記録であるからであり、謡曲や戦記物語の曾我物語など、文語資料ではあっても、そこでの会話文に「バシ」が現れることがあるのは、会話文には、「日常の口頭語が強く反映する場面」が多く見られるからであると考えることができる。因に、擬古文の御伽草子⁽¹⁰⁾には「バシ」が四例(会話文が三例、思惟文が一例)用いられている。

なお、キリシタン文献において、文語体で書かれた教義書は言うまでもなく、口語体のイソホ物語や平家物語にあつてさえ「バシ」の使用が極端に少ないのは、ロドリゲスが『日本大文典』で、この「バシ」は「或動詞の前に置かれ、時には疑問語を伴ひ時には伴はない。又ある場合には多分といふ意を表し、他の場合には単に品位を加へるだけである⁽¹¹⁾」と説明しているように、宣教師たちには「バシ」の使用される場面は限定されているものと認識されていたからであろう。

第二は、「バシ」を含む句の表現の用法が疑問や禁止の表現にはほぼ限定されているということである。

「バシ」は、その語句を特に取り立てて強調し、疑問・推量・禁止・命令・仮定などの表現の句中に用いられると一般に説明されている。⁽¹²⁾「バシ」についてのこうした説明は、湯沢幸吉郎氏の『室町時代言語の研究』の「バシ」の項の説明に基づくものと思われる。⁽¹³⁾ただ、同書で取りあげられた「バシ」の用例一七例(すべて抄物文献からのもの)を検討すると、推量の表現の句中に用いられたと思われる例は、「人バシアヤマチセリヤト問テ馬ノコトヲハトワズ」(論語、郷黨)の一例だけで(ただし、この例とても疑問推量か疑問と解されるものである)、他は疑問の句中のもの九例、禁止の句中のもの五例、仮定条件の句中のもの二例と確実に解されるものである。このことを考慮すると、室町時代には「バシ」はかなり特定の表現を伴う句中に用いられるようになっていたものと推察される。

鎌倉時代前期の文暦二年(一二三五)に明恵上人の弟子長円が生前の上人の言葉を書き留めた却廢忘記には、「バ

シ」は推量（打消推量）・禁止・仮定条件・否定などの語句を伴う用法の他に、これら特定の語句を伴わない用法もあることが指摘されており、⁽¹⁴⁾ いろいろな「バシ」の用法があったことが知られる。ところが、本章で取り扱った室町時代の諸文献のうち、「バシ」が使用されている①～⑨文献では、〈表1〉から窺えるように、③の史記抄、⑤の毛詩抄の抄物文献を除き、他の①②④⑥⑦⑧⑨文献では、いずれも疑問や禁止という表現の句中にしか用いられていないのである。しかも抄物文献の③と⑤であっても、③の史記抄には、「バシ」の用例七二例中、疑問（五六例）と禁止（八例）の表現の句中に用いられるものが大半を占め、残りの八例は、

○希范カ脉書ハシ其義テアルヤラウソ（一三24オ）

のように、推量（疑問推量）の表現の句中に用いられたもの一例、

○志ヲハシ得ラレタラハ天下ハ皆爲虜（四8オ）

○子胥ハシ父兄ト同様ニ死タラハナンノナス事モアルマイソ（一〇42オ）

のように、仮定条件を表す句中に用いられたもの二例、

○周公ノ聖人テハシナウテ尋常ノ人ナラバマコトニ天下ヲ取テ我カ其マ、天子ニモナラレウソ（二59オ）

のように、否定の表現の句中に用いられたもの一例、

○此ハ灰ノ中ニ火ヤナントハシアツテ焼亡ヲカヤラウスラウチヤホトニソ（一〇65オ）

○韓蔽トハタスキハシカクルヤウニスルソ（一一102ウ）

○驕子ハアイニクスル子ヲハシアツカウ様ニセラル、ソ（一四84ウ）

のように、特定の制約のない平叙の句中に用いられたもの三例と、

○五綵ノ牛ト云心テハシ（一一54ウ）

のように、「バシ」の下にくる語句が省略されたもの一例である。相対的には③においても、特定の表現の句中に

「バシ」が使用される傾向を示している。そして⑤においても、「バシ」の用例一三例中、

○マツ爰ノ様ニ注シタハ謂レハシアル也（一25オ）

○桑盛ハシトキノモリ物モ在ソ（一49オ）

のように、特定の制約のない平叙の句中に用いられた二例の他は、③の文献と同様、疑問（四例）と禁止（七例）の表現の句中に用いられている。

こうしたことから、室町時代の「バシ」の用法は、前代の幅広い用法から疑問や禁止を伴う語句の用法へと限定されていると言えるのである。そして、③と⑤の抄物文献に前代の幅広い用法が現れているのは、抄物が片仮名による講義の筆記録であって、先に示した鎌倉時代前期の片仮名文の却癈忘記などと繋がる文献の性格を有しているからと解されるのである。とは言え、前代に見られた「バシ」の幅広い用法は抄物文献だけに引き継がれているわけではない。たとえば、文語資料である太平記⁽¹⁵⁾には、その会話文に「バシ」が疑問や禁止の語句を伴った用法と共に、僅かではあるが、次のように仮定条件を表す句中や推量（疑問推量）の表現の句中に用いられることもあるのである。

○此時モシ將軍ノ大勢、後ヨリ追懸テバシ寄タリシカバ、京勢ハ一人モナク亡ブベカリシヲ…。（卷十四、官軍引退箱根事）

○脇屋右衛門佐殿ノ合戦評定ノ為ニ、柚山ノ城ヨリ金崎へ、カリソメニ御越候ヲ、^{カタガタ}旁存知候ハデバシ、加様二道ヲ被^レ塞候ヤラン。（卷十七、瓜生判官心替事）

○此城ハ如何様兵糧ニ迫リテ馬ヲバシ食候ヤラン。（卷十八、金崎城落事）

以上、室町時代の諸文献における「バシ」の使用状況から、室町時代にあっても、「バシ」は口語資料と文語資料との別を問わず、「日常の口頭語が強く反映する場面」での会話文（時には思惟文）に用いられることを確認し、

〈表2〉

文献名 「バシ」の上接語		①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪
体言		7	2	18	5	5	0	1	6	4	0	0
助詞	ラ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	カテ	0	2	4	1	1	0	0	0	0	0	0
助詞	ト	0	1	16	1	0	1	0	0	0	0	0
	テ	1	1	6	0	1	0	0	0	0	0	0
助詞	ナ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	ニ	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0
助詞	ホ	0	1	2	0	0	0	1	0	0	0	0
	マ	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0
助詞	デ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
	ニ	2	1	13	2	5	0	0	0	0	0	0
用言の連用形		0	0	0	1	1	0	0	0	0	0	0
計		10	8	72	10	13	1	2	7	4	0	0

併せてその「バシ」が、どのような表現の句中に使用されるかを検討した。その結果、室町時代の「バシ」の用法は、鎌倉時代の幅広い用法を継承しながらも、疑問や禁止の語句を伴う用法へと限定されていることを見たのである。

二 接続から見た各文献における「バシ」の様相

「バシ」の語源や生成時期に関する考察は、先学によって種々なされている。⁽¹⁶⁾ここではそれらを改めて問題にしようとするのではなく、本章で取り扱った室町時代の各文献に「バシ」がどのような語と接続し用いられているかを検討し、鎌倉時代の「バシ」の接続の用法との間に相違が存するか否かを見ようとするものである。

「バシ」は当初、目的格の体言にのみ付いて用いられたが、鎌倉・室町時代以降はしだいにそれ以外の語にも付き、用法が広がったと言われている。⁽¹⁷⁾室町時代の「バシ」は、〈表2〉から窺えるように、体言に接続した用例をもつものが、「バシ」が現れる①～⑨文献のうち、⑥の天草版イソホ物語を除いた他の八文献に及んでいる。その用例数も各文献とも多く、格助詞「ヨ」に接続したものと並んでほぼ中心的な用法となっている。そして、ここでも注目されるのは、③の史記抄を中心として、②の漢書抄、④の論語抄、⑤の毛詩抄の一連の抄物文献に現れる種々の助詞との接続用法である。特に③の史記抄には、接続助詞「デ」「ホドニ」などに付いた例や、格助詞「ヘ」、副助詞「ナンド」などに付いた例があり、鎌倉時代の文献には見られない幅広い接続用法が多く認められる。このように、「バシ」の接続用法についても、抄物文献には、前代の片仮名文献に見られたと同様の「従来の規範に縛られない」その時代の用法が現出しやすかったものと考えられる。

以下、各文献ごとに「バシ」の接続用法を検討する。
① 虎明本狂言の場合

○さだめてなまうをがたくさんにいらふとおもふて、
うをばしうりに来てあるか（上、ゑびす毘沙門）

○ゆめばしさまし給ふな（中、わかな）

のように、体言に接続した例は七例あるが、いずれも目的格の体言に付いたものである。また、

○けふよりはうちへこふとばしおもはしますな、なふ
はらたちや（中、はなご）

のように、格助詞「と」に接続した一例の他に、次のような格助詞「を」についた「をばし」の例が二例見える。

○火ばなをちらし合戦したる所をばしたべて有か（上、
ぶんざう）

○もしところをばしまいつたか（同、おか太夫）

狂言の詞章は、室町時代の口頭語を用い、対話を中心とした形式で書かれたものであるが、そこでの口頭語は必ずしも当時の一般的なもののばかりとは決めつけられず、舞台用語として、意識的に洗練されたものであると言われている。⁽¹⁸⁾従って、①における「バシ」の用法は前代からすでに見られるものを引き継いでいるものであると言える。

②漢書抄の場合

体言に接続した例は二例あるが、一例は

○カマヘテ手バシサスナト今時ハ云ホトニ：(三20オ)

のように、目的格の体言に付いたものである。他の一例は

○人ハ死スルライヤカルニ我ハヨロコフハ我カ心得ハシチカウ欵(五11ウ)

のように、主格の体言に付いたものである。その他、②には、接続助詞の「テ」に付いた例が二例、格助詞「デ」

「ト」「ニ」「ヲ」に付いた例がそれぞれ一例見える。

○或者二人同ヤウニ云テハシアル欵ソ(一6ウ)

○直ニ視ルカアマリアテノシサニ、アカケヲサイテハシ見タカ(三38オ)

○日本ニ蘆毛ト云馬カアルカ、苜騅ノコトテハシアルカ(同、35オ)

○斫額ノ心テ讀マウナラハ——(中略)——トハシヨマウカ(同、38オ)

○就國タホトニ、後ニ夏侯頗力婦ニハシナツタ欵ソ(一26オ)

○王吉ハ我ト黄金ヲハシ作ルカト云ソ(同、74オ)

③史記抄の場合

体言に接続した例は一七例あるが、そのうち一〇例は、

○我カ意ニワルイ事ハシアルカト自責ルソ(二67オ)

○アワレ王翦ハシ此テ其ホトノフルマイモナサニ從タ桓齮ヲ將ニナサレタ欵(四9ウ)

などと主格の体言に付き、他の七例は、

○害字ハ寫本ナルホトニ字ハシ損シタカソ(九74ウ)

○カマイテ骨折コトハシスナト云タソ(一三48ウ)

のように、目的格の体言に付いた用法を示している。助詞に接続したものは、

○百済国カラキタル多々羅氏ヲ大内ト云ハ始任此官タホトニ其カラハシ名字ニナツタ欵ソ(七50ウ)

と、格助詞「カラ」についたものが一例、

○沛公ニアヤカレノ心テハシアル欵(六73ウ)

○吟ハ前足テハシアラウス欵(一七38オ)

のように、中世以降用いられる格助詞「デ」についた例が一六例、

○金ヲ黄鉄トハシ云欵(二71オ)

○至不得トハシヨマウ欵(二七48オ)

のように、格助詞「ト」に付いたものが六例、「トテ」に付いたものが次のように一例ある。

○其ヲ人ニ知ラセシトテハシカウシタ欵(一四62オ)

さらに、格助詞に接続した例は、

○三歳ニハシナツタ欵ソ(一三48ウ)

○漢戾太子ノ居ラレタ処ヲ博望苑ト云ソソコニハシ封セラレタカソ(一四11オ)

○秦カラ漢ヘハシ帰シタ欵(六73オ)

などのように、「ニ」に付いたもの二例、「ヘ」に付いたもの一例、

○コチノ祖師ニ首山念ト云ハ此山ヲハシ号シタ欵ソ(八18ウ)

○アワレ寒水石ヲハシ頭ニ付ル欵(一三43オ)

のように、「ヲ」に付いたもの一三例が見える。

接続助詞に接続した例は、

○韓王信ハ是ホトノ事ヲハヨモ云ワシト思テハシ淮陰侯カ辞テソアルラウトテ：(六38ウ)
○縦サマニ柱ノ様ニトヨリテハシアル歟(一七46オ)

のように、「テ」に付いたもの四例、他に、

○共王モ三女ヲ一人テマリ不献ホトニハシニクシトテ滅シタカソ(二78オ)
○殺生石カアルホトニハシ青丘ト云ワル、歟ソ(二445ウ)

のように、「ホドニ」に付いたもの五例がある。

なお、③には「バシ」が副助詞「ナンド」に接続した例が、次のように四例見られるが、室町時代において「バシ」が接続の用法を広げていることを示すものとして注目される。

○此ハ灰ノ中ニ火ヤナントハシアツテ：(二〇65オ)

○大食シタリナントハシスナト云心テソアルラウナレトモ：(七51ウ)

○久待セタリナントハシスナト云ソ(二485ウ)

○結構ナモノヲ多キタリナントハシスナソ(二620ウ)

また、次の例なども、副助詞「マデ」に格助詞「デ」が接した「マデデ」に「バシ」が付いたものであるが、こうした例が現れるのも、「バシ」の接続の用法の広がりを示すものと言える。

○孔子聞之曰ト云テカラトコマテカ孔子ノ語テアルヤラウソ日ト月トマテ、ハシアルカ(一七36ウ)

④ 論語抄の場合

体言に接続した例は五例あるが、その用法は、

○礼記ガ誤リモセマイガ別ニ^{ヨシ}扱バシアルカ(二3ウ)

○カマイテ魯国テ緩怠ナ振舞バシスナト云心ソ(五15オ)

のように、それぞれ主格の体言に付いたもの三例と、目的格の体言に付いたもの二例である。助詞に接続した例は、次のように格助詞の「デ」一例、「ヲ」二例と、接続助詞の「テ」一例の三語四例である。

○孔子ハ聖人デバシ御座候カ(三4ウ)

○曾子ガ三省ノオヲバシ云タカゾ(二55オ)

○礼記ヲバシ習ウタカ(四4オ)

○一日モソチヨリ早ク生レテ年老ヂヤト云テハッカツテバシイラレナ物ヲ問ヘゾ(三39ウ)
なお、④には、動詞の連用形に付いた次のような用法が一例見える。

○荷簣ガ分デハ聖人ヲハ知ラヌ程ニ安ク心得バシイタカ難トシラヌソ(四27オ)

「バシ」の接続用法の広がりが多岐に及んでいることを窺わせる例である。

⑤ 毛詩抄の場合

格助詞「デ」と「ト」の使用上の有無の違いがあるだけで、他は④の論語抄と全く同じ接続の様相を呈している。すなわち、体言に接続した五例のうち、

○此末句テ見レハ夫ニスサメラレタ事ハシアルカ(二40オ)

のように、主格の体言に付いたもの二例、

○カマイテ物ハシ思ハレナト云心テコソ候ラウ(五22オ)

のように、目的格の体言に付いたもの三例である。また、助詞に接続した例は、

○ミセストハシヨマウ歟ソ(五27ウ)

のように、連用格助詞「ト」に付いた一例、

○我居ノカキヲハシコヘテクレナ(四20ウ)
のように、「ヲ」に付いたもの五例と、

○前二モ天ニスサマレテハシ作タカト云タ程ニ…(三34ウ)
のように、接続助詞「テ」に付いた一例がある。

さらに、形容詞の連用形に付いた例も一例、

○孝行ノ子カ父ニワルウハシアタルナト云事ヲ作タソ(九33オ)
と見える。

⑥天草版イソホ物語の場合

格助詞「デ」に接続した次の一例のみである。

○元より走らせらるるに早いことも世に並びが無いと見及うでござれども、何とした子細でばしござるぞ(493)

⑦天草版平家物語の場合

「バシ」の用例二例のうち、

○屋島への案内者につれてゆけ。目ばし放すな。(329)

のように、目的格の体言に付いたものが一例、

○お心にばし違ふと言ひやり、(55)

のように、格助詞「ニ」に付いたものが一例である。

⑧車屋本謡曲の場合

「バシ」の用例七例のうち、

○思ひもよらぬ申し事にて候へども、ふじが行方をばししろしめされて候か。(中、富士太鼓)

の格助詞「ヲ」に付いた一例の他は、六例すべて体言に接続した例である。その用法は、

○めんばくもなき御使とはもし御遁世ばし有りけるか。(上、清経)

○遁世とは父ばししかりたるか。(中、柏崎)

のように、主格の体言に付いたものが二例、他は目的格の体言に付いた

○夢ばし覚まし給ふなよ(上、難波梅)

と同一表現をしたものが四例である。

⑨大山寺本曾我物語の場合

「バシ」の用例の四例すべてが、次のように目的格の体言に付いた用法である。

○心うきめはし見せ給ふな(四20オ)

○人のあひつけたらん鹿はしむ給ふなよ(七15ウ)

○うしろはしみすなとひはなをちらした、いけり(九22オ)

○屋形を出し時おんなにてはしさすなとすけなりの給いし物をと…(同、24ウ)

以上、各文献ごとに「バシ」がどのような語に接続しているかを、具体例を掲げながら見てきた。すでに〈表2〉に示した「バシ」の接続の実態から、室町時代における「バシ」は、基本的には、体言に接続するもの、助詞に接続するもの、用言の連用形に接続するものの三つであると言える。体言に接続する「バシ」の用法には、主語としてのものと目的語としてのものの二つがあるが、その用法の現れ方には、文献による相違があることがわかった。

すなわち、「バシ」の本来の目的格の体言に付く用法は、いわゆる文学的内容をもった文献としての①虎明本狂言、⑧の車屋本謡曲、⑨の大山寺本曾我物語に偏しており、これらに対して、②③⑤の抄物文献には、目的格の体言に付く用法の他に、主格の体言に付いた用法が多く見られるということである。そして、助詞に接続する例について

も、「バシ」の用例数の多寡はあるものの、やはり文学的内容をもった文献には、格助詞「ヲ」に付いた例が若干認められはするが、種々の助詞（時には複合助詞）に付いたものはほとんど抄物文献に偏しているということである。ただし、鎌倉時代の明恵上人の弟子たちが著した諸文献⁽¹⁹⁾や平家物語（延慶本、⁽²⁰⁾長門本⁽²¹⁾）などの「バシ」に見られる、助詞「ニ」「ヲ」「ノ」などに上接する用法は、室町時代の諸文献からは得られなかった。このように、室町時代における「バシ」を接続用法から見た場合、その現れ方の特徴は、抄物文献に顕著に認められるということである。

国語史上の中世前期の鎌倉時代に新生したと言われる助詞「バシ」が、鎌倉時代を経て、室町時代にはどのような用いられたかを、

(1) 各文献における「バシ」の使用状況

(2) 接続から見た各文献における「バシ」の様相

という二つの観点から考察した。そこから明らかにされたことは、次の諸点である。

1 室町時代の「バシ」は、その使用状況において、各文献ごとに相違があり、その「バシ」は口語資料と文語資料との別を問わず、「日常の口頭語が強く反映する場面」での会話文（時には思惟文）に用いられるということ。

2 各文献に見られる「バシ」を、「バシ」を含む句の表現の種類によって整理すると、いわゆる文学的内容をもった文献では、「疑問」や「禁止」の用法に限定されているのに対し、抄物文献では、その用法が鎌倉時代の片仮名文献に見られるような幅広い用法を見えているということ。

3 接続から見た「バシ」は、本来の目的格として体言に付く用法が、文学的内容をもった文献にも中心的に見

られるのに対し、特に抄物文献にあつては、目的格としての用法の他に、主語としての用法や種々の助詞に接続する用法が認められるということ。

4 そして、室町時代において、抄物文献に「バシ」が本来の用法と共に、前代の片仮名文献に見られたと同様の幅広い用法を顕著に見せているのは、抄物が片仮名による講義の筆記録であるからであろうということ。

調査対象とした文献が、質・量ともに必ずしも十分ではないが、助詞「バシ」の室町時代の用法の概要は明らかにされたものと思う。

[注]

(1) 「バシ」の語源に関する諸説については、堀内武雄氏が「特殊な助詞の研究——ばし・がに・づつ・がな——」（『国文学解釈と教材の研究』第十二巻第二号）の「語誌」の説明の中で紹介しておられるので、それを参照したい。また、小林芳規氏は「鎌倉時代語研究の課題」（『鎌倉時代語研究』第十輯 昭和六十二年五月）の中で山田孝雄氏（『平家物語の語法』一五七二頁）と安田章氏（『岩波講座日本語7 文法Ⅱ』の「助詞（2）」のうち「副助詞」の「バシ」〈三三七頁〉）の説を取りあげておられる。

(2) 前掲注（1）の小林氏の論文。

(3) 前掲注（1）の小林氏の論文二〇頁。

(4) 『平家物語の語法』一五七二頁。

(5) 『岩波講座日本語7 文法Ⅱ』三三七頁。

(6) 前掲注（1）の小林氏の論文三〇頁。

(7) 北原保雄他編『大蔵虎明本 狂言集総索引』（全八巻）も利用。

(8) 全二〇巻のうち、一〇巻までの調査による。

(9) 近藤政美・伊藤一重・池村奈代共編『天草版平家物語総索引』も利用。

(10) 岩波日本古典文学大系本による。榊原邦彦・藤掛和美・塚原清共編『御伽草子総索引』も利用。

なお、『例解古語辞典』（佐伯梅友・森野宗明・小松英雄共編著、三省堂）の「バシ」の項の「副助詞『バシ』の要説B」

で、御伽草子の『猿源氏草子』に見える和泉式部の和歌「やるはしを、まことばしして、きばしして、うたればしして、悔みばしすな」の中に四回使われている「ばし」を「箸」に懸けたものと解しておられることを用例に加えると、御伽草子の用例は八例となる。

(11) 土井忠生訳注本四四九頁。

(12) たとえば、日本国語大辞典(小学館)をはじめ、角川古語辞典・岩波古語辞典・例解古語辞典(三省堂)・福武古語辞典など。

(13) なお、本書では「疑問・推量・禁止および条件を表す文に現れる」(三二二頁)と説明していて、「命令」はない。

(14) 小林芳規「中世片仮名文の国語学的研究」(『広島大学文学部紀要特集号3』昭和四十六年三月)

(15) 岩波日本古典文学大系本に拠る。

(16) 前掲注(1)参照。

(17) たとえば、『新明解古語辞典(補注版)』(三省堂)の「バシ」の項や『古語大辞典』(小学館)の「バシ」の項の語誌の説明。

(18) 春日順治「狂言の解釈と文法上の問題点」(『講座解釈と文法5』昭和三十四年十月)二七三頁。

(19) 前掲注(13)文献に、『却癡忘記』の「大日経ノ疏ハシモヨマセンスル也(巻上二丁オ)」「カマヘテ数返ハシヲモカサネ(巻下一丁ウ)」「二三時ノヲコナヒハシヲムネトシテ(巻上五丁ウ)」の例が示され、『光言句義釈聴集記』正元元年(一二五九)書写本の「…ト云ハ此ノ脇足ハシノヤウニテ」の例が示されている。

(20) 前掲注(1)の小林氏の論文には、山田孝雄氏が調査し指摘された『延慶本平家物語』の「バシ」に新たな例を加えた全用例十例が示されている。そこには、「イサ都へ京ツトハシモ取セム」「若小督カユクヘハシヤ知タル」「子息兄弟所従眷属ハシニ物ヲ云様ニ」「只御方ニ勢ノ候ハヌ時ニ憶シテハシソ被思食候ラム」のように、助詞「モ」「ヤ」「ニ」「ゾ」などに上接した「バシ」の例が見える。

(21) 湯沢幸吉郎著『文語文法詳説』第五章助詞「五」副助詞「ばし」の項(六一八頁)には、『長門本平家物語』巻七の「人の讒言したるむねばしのあるやらんと、思はぬ事もなく…」の例が示されているが、格助詞「ノ」に上接した「バシ」の例と考えられる。

第三章 室町時代における副詞「必ズ」と「定メテ」をめぐって

『曾我物語』には、たとえば、

助成もをくらむとて、むまにくらをかせ、うちのりて、中村どをり行べし。大道は馬くら見ぐるし。君をすけなりがおもふとは人みなしれり。ともの物などかいかくしからずとて、うちつれてこそをくりけれ。曾我と中村のさかいなるやまびこ山のたうげまでこそをくりけれ。十郎こむまをひかへて申けるは、いますこしもまいらたくは存ずれども、今朝はかならずうち出んといひしかば、さだめて五郎も来たるらん。なごりをしさは誰もおなじ事なるべし。この世にてあひみん事たゞいまばかりとおもふにも、いひやる方なくして涙にむせびければ、みちもさだかに見えわかず、かのまつらさよ姫がもろこし船をしたひつ、ひれふしけるすがたは石とぞ成にける。(太山寺本曾我物語巻第六 一九オ)⁽¹⁾

のような文章の中に、共に「きつと」という意味が与えられる副詞「カナラズ」と「サダメテ」が、同一文中に用いられている。この「カナラズ」と「サダメテ」のように、語形を異にしながらも、同じ意味を有する語を同義語と言っているのであるが、右の例文中の「カナラズ」と「サダメテ」は、果して同義語と判断できるであろうか。

そこで、「きつと」の語義について『日本国語大辞典』(小学館刊)(筆者注、以下『日国』と略称する)の記述を見ると、大きく次の二つに分類している。

□動作、行為が、物理的、心理的にゆるみのない状態で行なわれる時の、そのゆるみのないさま

□判断、推定がほぼ確実と思われる時の、その確実なさま。間違いなく。そして、さらに□を、

- ①瞬間的に集中して行なわれるさま。さつと。
- ②確固としていてゆるみがないさま。きびしく。嚴重に。きつぱり。きちんと。
- ③特に心身を緊張させたさま。しっかりと。じつと。
- ④意志、決意などの決定的なさま。是が非でも。
- ⑤相手に、必ずこうしてほしいと要望する気持を表す。

の五つの意味に小分類し、□を、

- ①ある動作が行なわれる、または、ある状態であることが確実なさまにいう。必ず。
- ②ある事柄について、自分の推測が確実であると信ずる時にいう。

の二つに小分類している。

この『日国』に示された「きつと」の意味分類に、先の『曾我物語』からの引用例中の「カナラズ」と「サダメテ」の意味をそれぞれの用法から検討しあてはめると、「かならずうち出ん」「さだめて五郎も来たるらん」というように、いずれも陳述副詞として推量の助動詞と呼応しており、両語とも『日国』の□に相当するものであることがわかる。しかし、この両語の意味をさらに文脈上から詳細に見てみると、「カナラズ」は□の①の方の意を表し、「サダメテ」は□の②の方の意を表していることを知る。

そこで、本章では、室町時代の国語資料を基にして、「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法について調査・検討し、「カナラズ」と「サダメテ」の関係を考察しようと思う。

調査の対象とした資料は、次の五点である。

文語資料

- ①車屋本謡曲（日本古典全書『謡曲集』上・中・下）
- ②太山寺本曾我物語（濱口博章解題『太山寺本曾我物語』影印本〈汲古書院〉）

口語資料

- ③虎明本狂言（池田広司・北原保雄著『大蔵虎明本狂言集の研究』本文篇上・中・下〈表現社〉）
- ④論語抄（京都大学附属図書館）（坂詰力治編『論語抄の国語学的研究』影印篇〈武蔵野書院〉）
- ⑤天草版平家物語（亀井高孝・阪田雪子翻字『ハビヤン抄 平家物語』〈吉川弘文館〉）

調査対象を右の五点にしたのは、これらがいずれも室町時代の各ジャンルを代表する国語資料であって、本論の目的を果たすのに事足りるであろうと判断したからである。

一 使用数から見た「カナラズ」と「サダメテ」

まず、①～⑤の資料における「カナラズ」と「サダメテ」の使用数を調査した結果を示すと、〈表1〉のようになる。

表のうち、「治定」「一定」「必定」「善悪」「是非」の諸語は、「カナラズ」「サダメテ」と同義・類義の関係にある漢語副詞であるが、参考までに示したものである。

〈表1〉の各資料における「カナラズ」と「サダメテ」の使用状況は、必ずしも一様ではない。すなわち、両語のうち、「カナラズ」の使用例が優勢なのは④（『論語抄』）だけで、他の①（『車屋本謡曲』）②（『太山寺本曾我物語』）の文語資料と③（『虎明本狂言』）⑤（『天草版平家物語』）の口語資料は、いずれも「サダメテ」の使用例が優勢だから

〈表1〉

是 非	善 悪	必 定	一 定	治 定	サ ダ メ テ	カ ナ ラ ズ	
0	0	0	0	0	12	2	①
0	0	0	5	0	20	8	②
20	10	0	0	0	87	30	③
0	0	0	0	4	2	77	④
1	0	1	5	0	25	19	⑤

そこで、次に「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法を、〈表1〉における両語の使用状況に対する解釈に基づき、文語資料の場合と抄物資料の④を除いた口語資料の場合とから資料ごとに検討し、その結果を④の資料の場合の「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法と対比させ、考察してみようと思う。

二 文語資料の「カナラズ」と「サダメテ」

ここでは、文語資料①②における「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法について検討する。初めに、①における「カナラズ」と「サダメテ」を見る。

①に見える「カナラズ」は、わずかに次の二例である。

○いかなる心を持つならば、必鬼と成るべしと御霊夢を蒙りて候。(鍊輪)

○去ながらたつとしとおほしめすならば、かならず我為あしかるべし。(大会)

いずれも仮定条件を受けての結びの句の中で使われ、確信をもって判断・推定する「間違いない。きっと」という意味で推量の助動詞「べし」と呼応し、「べし」の推量を確信のあるものとしている。

一方、①に見える「サダメテ」は一二例である。その意味・用法は、すべて下に推量の助動詞を伴って、「きつと」するに違いない」という推量の意味を表したものである。一二例中、「べし」と呼応した例は九例で、そのうち、

○此度北国に、まかりくだりて候はば、定めて、うちじにつかまつるべし。(実盛)

のように、上に仮定条件を伴った文中に用いられたものが三例、

○都東北院のあたりにての御事なれば、さだめて思食あはすべし。(大会)

のように、確定条件を伴った文中に用いられたものが一例、また、

○定我らもむなく成候べければ、さかさまなる御弔ひにこそ預り候べけれと、(夜討曾我)

のように、確定条件句の中で使用されたものが二例、

○定めて次信忠信が郎等なども内に候べし。(撰待)

のように、非条件文中に用いられたものが三例である。

「べし」のほか、「らん」と呼応した例は次の一例である。

○昔長井の斎藤別当実盛と申しし者は、此篠原のかせんに討たれて候。定めてきこしめし及ばれてこそ候らめ。

(実盛)

である。その上、④は単に「カナラズ」が「サダメテ」より優勢であるということではなく、七七対二という数値の差が示すように、ほとんど「カナラズ」専用という使用状況にあるからである。そして、このことは、いわゆる文芸性、文学性を強くもった①②③⑤の四資料では「カナラズ」は使用されるものの、「サダメテ」の方がより多用される傾向にあることを意味し、反対に、④のような文芸性・文学性の希薄な抄物資料のようなものにあつては「サダメテ」の使用は極めて少なく、「カナラズ」が多用される傾向にあることを示唆しているように思われる。

また、参考に掲げた「カナラズ」「サダメテ」と同義・類義の関係にある「治定」以下五語の漢語副詞の使用状況を見ても、五資料間にはそれぞれ使用頻度に差が認められることから、「カナラズ」をめぐる陳述副詞の使用には資料の性格による相違があることを考慮する必要があると言える。

なお、次の二例は打消し推量の助動詞と呼応した例である。

○^{さだめて}定而ゆかりの者の尋ねぬ事は候まじ。(富士太鼓)

○皆御共に参るなれば、定めてかたきの祐経も、御供申さぬことあらじ。(小袖曾我)

資料①における「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法については、「カナラズ」の使用例がわずかに二例しかないために十分に比較することができない。しかし、二例の「カナラズ」の意味・用法に限って考えると、「サダメテ」にあっても「カナラズ」と全く同じ用法(すなわち、仮定条件を伴った文中で、推量の助動詞「べし」と呼応している)が見られ、両語の間に差異が認められない。意味においても、両語ともに「間違いない。きつと」と捉えられ、差異はないようである。そこで、問題は推量表現中における「カナラズ」と「サダメテ」の意味には全く差異がないのかどうかということになるのだが、その点に関しては、さらに他の資料における検討結果を俟つこととする。

次に、資料②における「カナラズ」と「サダメテ」について見る。

②の「カナラズ」は八例である。ただし、強意の助詞「しも」の付いた「カナラズシモ」一例を含む。

八例中、推量の助動詞と呼応した例は五例で、そのうち、「べし」と呼応したものは、次の三例である。

○おやは一世と申せども、かならず浄土にてまいりあふべしとぞかきたりける。(巻七、一五オ)

○かへりにはかならずまいるべしとこと葉すくなに申けり。(同右、二三ウ)

○かりばよりかへりにはかならずまいり候べしとてたちにけり。(巻八、六ウ)

また、「ん」と呼応した例は、

○いますこしもまりたくは存ずれども、今朝はかならずうち出んといひしかば、さだめて五郎も来たるらん。

(巻六、一九オ)

○おやは一世のちぎりと申せども、来世にてはかならずまいりあはんとどう心にかきとめければ、(巻九、六ウ)の二例である。

右の用例における「カナラズ」は、多く確定条件を伴った文中で推量の助動詞「べし」と「ん」とに呼応して、いずれも確固たる意志や決意の意味を表している。

次に、②における「カナラズ」には、下に「あり」を伴って、断言、確言する(確信をもって断定する)意味を表す例、すなわち、

○是やふるきこと葉に、こうこくはかうてんにあそべども、せうたくなかならずうれへあり、……といへり。

(巻六、一三オ)

○会者定離とてあふ物はかならず一たびわかる、ためしあり。(同右、二一オ)

○はじめある物はかならずおわりあり。あふはわかれのはじめ也。(巻九、八オ)

の三例と、強意の助詞「しも」を付けて「カナラズシモ」の形で下に反語の表現を伴って用いられた例が、

○なんぢ何のきによつてかならずしもみ、をあらふ哉ととひければ、(巻五、一八ウ)

のように一例見える。

②における「サダメテ」は二〇例である。

このうち、次の非推量文中に用いられた二例を除いては、すべて推量の助動詞と呼応した例である。

○さだめてあそび物にとらせけるとおもへば、さはなくして、(巻七、一三ウ)

○さだめて君のおほせには、そのくわじやばらは誰がゆるして出けるぞ。(巻八、一七オ)

推量文中に用いられたもののうち、「べし」と呼応した例は、

○なむみだ如来、我らをたすけ給へとねんぜよ。さだめてち、と一所にまいるべしとをしへければ、(巻三、一五

オ)

○わらは候はでは、さだめてぶさに候べし。(巻十、一八オ)
 の二例のほか、

○一もんはせあつまり御ふしんのなげきを申あげ候はゞ、今日のそせう人はみなさだめてどうしたるべし。(巻三、二一オ)

のように、仮定条件を伴った文中で使用されたものが四例、「べからず」という否定形を伴ったものが、次のように二例見える。

○神明は正直のかうべにやどり給へば、さだめて天のかごもあるべからず。(巻一、九オ)

○我ら二人が中に一人、かたきのわうに出てつかふべし。さる物ありとさだめて心をゆるすべからず。(同右、二二オ)

「ん」と呼応した例は、

○しよきう、ていゑひとふ二人のしんかをちかづけ、なんぢらさだめて我もろともにじかいせん。とぞおもふらむ。……との給ひければ、(巻二、二一ウ)

○一ねんむりやうごうとなる事にて候へば、おもひわづらいて候。さだめて御のほりにて御さだめ候はんとまちたてまつれども、そのぎも候はず。(巻四、一一ウ)

○梶原さだめてこの人々とまらん。「と」、かたせ川をうち渡して、(巻五、一五ウ)

のように、「ん」の単独形と呼応して意志や推量を確信をもつて表現しているもの三例のほかに、完了の助動詞「ぬ」の未然形と複合した「なん」と呼応して、「なん」の実現性の高い推量を、より強めるはたらきをしている次のような例も三例ある。

○其人だにもしりなば、さだめて曾我殿にかたりなん。(巻四、一八オ)

○はこわうおとこに成つては、さだめてかゝる事を思ひたちなんとおぼえたり。(同右、一九オ)

○五郎もさだめて恨みなん。(巻六、一四オ)

また、「らん(む)」と呼応した例は、

○いますこしもまいりたくは存ずれども、今朝はかならずうち出んといひしかば、さだめて五郎も来たるらん。(巻六、一九オ)

の一例のほか、推量の助動詞「んず」と複合した「んずらむ」と呼応した例も、次のように一例見える。

○かれはべつしたる事にて候へば、さだめてあしき事もや出来候はんずらむとおぼえ候。(巻四、一六ウ)

この「んずらむ」は、現在の状態や状況にもとづいて、これから起ることを予想する意を表しているが、推量の助動詞の複合語を下に伴った「サダメテ」は、不確かな推量、すなわち「たぶん。おそらく」という意味を表していることと捉えることができる。

なお、「む」の否定の意味を表す「じ」と呼応した例も、次のように二例見える。

○明日は一ぢやう出家のよしき、つるあひだ、いそぎのほりて見たてまつらんおもひつれども、さだめてめもあてられじと思てなきあつるぞとのたまひければ、(巻四、一一オ)

○さだめてそのしるしうたがひあらじと「ぞ」おぼえし。(巻十、六ウ)

以上、文語資料①②における「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法について検討した。両語の間には、推量の語を下に伴った文中の場合と非推量文中の場合とを問わず、意味に関してはほとんど差異が見られず、いずれも「間違いなく。きつと」と判断したり、推量したり、決意したり、禁止したりすることの確かさを表しているといえる。また、両語の用法に関しても、共に推量文、非推量文でそれぞれ使用されるということで、両語の間に明確

〈表2〉

②	①	
3	2	べし
2	0	ん
4	0	非推量

〈表3〉

②	①	
6	9	べし
2	0	べからず
0	1	まじ
3	0	ん
2	1	じ
1	1	らん
3	0	なん
1	0	んずらん
2	0	非推量

な差異を見出すことはできない。しかし、「カナラズ」と「サダメテ」とに呼応する推量の助動詞に注目すると、両語と呼応する推量の助動詞の間には差異があることに気づく。すなわち、資料①②における「カナラズ」は、用例数が少ないとはいえ、これと呼応する推量の助動詞は〈表2〉に示したように、わずかに「べし」と「ん」にすぎない。

それに対して「サダメテ」は、〈表3〉に示したように、異なった肯定・否定の推量の助動詞のほか、複合した助動詞とも呼応しているということである。こうした「サダメテ」の、下に多くの異なり推量の助動詞をとって呼応するという傾向が意味の上にも反映し、一方では呼応する推量を確信性の濃いものとする意を表す反面、先の複合推量助動詞「んずらん」との呼応例から窺えるように、確信性の薄い「たぶん。おそらく」という意をも表すようになっていくものと思われる。

三 口語資料の「カナラズ」と「サダメテ」

文語資料①②に見られた「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法が、口語資料③⑤ではどういう様相を呈するか、以下検討する。

まず、③における「カナラズ」と「サダメテ」を見る。

③における「カナラズ」は、「カナラズ／＼」と用いられた一例を加え、三〇例である。「カナラズ」が下に推量

の語を伴って用いられた例は、三〇例中、一二例である。そのうち、

○お旦那衆へも御見廻なされう所で、かならず御所望がござらふ程に、けいこにもなりまらす、(中、どぶかつちり)

○下向にそこもとにいたらばきらふと申た程に、かならず爰元をとらぬ事はござるまひ、(上、大刀ばひ)

の推量の意を表す助動詞と呼応した二例を除き、他の一〇例はすべて意志の意を表す「う」「うず(る)」との呼応例である。少く用例を示す。

○くだりにも今の所まで、かならず同道いたさう、(上、餅酒)

○又のぼりまらしたらば、かならずお尋申さうが、お名をば何と申ぞ、(上、目近籠骨)

○のぼりにはかならずつれてのぼらふずるとやくそくして下り、(中、はなご)

○かならずもつて伺公いたさうずる、(下、すゞきばうちやう)

なお、ト書部分に用いられた例も一例ある。

○我ハ必ス功ヲ取ラントアリ、(下、かうやくねり)

③における「カナラズ」が多く意志の意を表す助動詞と呼応して用いられる傾向は、ひとり資料③にのみ見られる現象ではなく、室町時代における口語資料に広く行われるようになっていたことの反映と考えられそうである。が、ここでは断言を控えておく。ただし、③において「カナラズ」が推量の助動詞「べし」と呼応した例が見えないということは、本来「べし」の表していた推量や決意を、「ん」が「カナラズ」と呼応することによって代行するようになったのではないか、ということを推測させる。

次に、③における「カナラズ」が推量の助動詞と呼応せずに用いられた例は、三〇例中、十八例で、推量の語と呼応した例よりも多くなっている。すなわち、

- 身共は、またひ者じやに依て、三条の又九郎左衛門と申、かならずお尋にやれ、(上、目近籠骨)
- 明日去方へ使にやる程に、一番鳥のうたふ時分に、かならずこひやい、ゑい、(中、けいりう)
- などのように命令文中にあって、間違いなくその行為が実行されることを強制する意を表す例が四例、
- かならず大名の前では、けでんする物じや、(上、今まいり)
- いやお大名にはならせられうずるが、さやうの時はかならずお約束がちがふ物じやと申程に、(中、どんごむさう)

などのように、事実について確信をもって認定したり、断定する意を表す例が六例(うち、ト書の一例を含む)

- ようできた時かさねて御さう申さう程に、かならずなまいつて下されそ(中、河原太郎)
- のように、禁止文中に用いられた例が二例、

- 出入仕候へば、かならずふつきゑいぐわにさかゆるとき、およびて候が、(下、狸々)

- そうじてしやうあるものはかならずめつする、(下、寝替)

などのように、広く一般的な判断や断定を表す文に用いられたり、絶対的な真理を表す文中に用いられた例が六例である。

この資料③における「カナラズ」の意味・用法を見るかぎり、先の文語資料①②よりは、用法の面で大きく変っていることがわかる。

それでは、資料③における「サダメテ」について見よう。

- ③の「サダメテ」は八七例見える。そのうち、推量の助動詞と呼応したものは八一例である。

「う」と呼応した例は、

- さすが都の者として、ぬかばたゝもぬかひで、定てごきげんがわるからふと思ふて、(上、すゑひろがり)

- 仰のごとお国もとでは、定てお待かねなされませう、(上、入間川)

- わたくしがたなをひいておけとは申たれ共、定て其ま、おきませう程に、(上、雁盗人)

- あとではり／＼とくひはるをとがしてござる程に、さだめてかみはつたもので御ざらふ(中、しみづ)

- 定てきうくつにあらふほどに、身共はひつこむ、ゆるりとおじやれ(下、連歌盗人)

などのように、八〇例中五四例で、圧倒的に多い。推量の助動詞「う」と呼応した「サダメテ」は、「間違いなく。きつ」と確信をもって推量するという意味よりも、確信性の薄い「たぶん。おそらく」という意味に近いように思われる。

「うずる」と呼応した例は、次の四例である。ここでの「サダメテ」も確信性の濃い推量と薄い推量との両方の意味が見えるようである。

- 定て女共がはらをたて、しからふずる程に、(中、みかづき)

- さだめて女共がわめかふずるがめいわくなれ共、(同右)

- さだめて都へのぼる人もあまたあらふずる間、それとよせあわせて、(下、じしやく)

- さだめて正月小袖は、けつかうにできませうずうは、(下、よねいち)

なお、「よう」と呼応した例が一例見える。

- こひ／＼、さだめて国本にはめ子共が待かねていようが、(上、鬼がわら)

また、八〇例中、二二例は否定推量「まい」と呼応した例である。少しく例を示す。

- まだぬかすか、さだめてしらぬ事はあるまひと思ふてやつた、(上、すゑひろがり)

- 今日中にでかす約束であつらへてござる程に、定てできぬことはござるまひ(上、あさう)

- さて／＼にくひ事でござる、さだめておにはござるまひが、うそをつひてござる(中、しみづ)

○定てうりにいでぬ事は有まひ。(下、牛ばくらう)

否定推量の「まい」と呼応した場合においても、「サダメテ」の意味は確信性の濃いものと薄いものとが用いられているようである。

一方、③において「サダメテ」が非推量文中に用いられた例は、八七例中わずかに六例にすぎず、「サダメテ」が一般的には下に推量語を伴う文中に用いられるものであることを表している。③の非推量文中での「サダメテ」は、

○定て高札に付てお出ぢやほどに、申まではなけれども、(上、さひの目)

のように、肯定文に用いて「はつきりと。明らかに」の意を表した例が三例、

○定てこななつかしう存て、まほろしにみえたものじやと存る(中、ぬし)

のように、下に推量の表現を伴わずに「きつと」の意味を表した例が三例である。

次に、資料⑤における「カナラズ」と「サダメテ」について見る。

⑤の「カナラズ」は一九例である。このうち、下に推量の助動詞を伴ったものは六例で、

○まことに人はけふ別れては、またついの日、いづれの時はかならずめぐりあはうと契るさへも、その期を待つは久しいに、(二八七)

のように「う」を伴ったもの一例、

○必ずこの馬は道にいでうずると教へてござると申したれば、(二五九)

のように、「うず(る)」を伴ったもの四例、

他に、「う」または「うず(る)」の呼応語を省略したものが一例である。

なお、③の「カナラズ」に見えた「べし」との呼応例は一例もない。

⑤の「カナラズ」一九例のうち、下に推量表現を伴わないものは、一三例である。このうち、

○東三条の森から黒雲が一むら立つて来て、御殿におほへば、その時かならずおびえさせらるると申す、(一四

一)

のように、「確かに。明らかに」の意に用いられたもの二例、

○この世は生者必滅の国なれば、生るるものは必ず死に、あふものは定まつて別るるならひぢや、(三六四)

のように、絶体的真理を表す意に用いられたもの六例、

○父の墓所の前で三度伏し拝み、草の蔭でも亡魂かならずこれをこらうぜられて、おん心を休めさせられいと申された、(三六三)

のように、行為を強く命ずる意に用いられたもの三例、そして下に否定や禁止表現を伴って「決して」の意に用いられた例が、次のように二例見える。

○必ずおん身御一人のことではない、(二八二)

○剛の者は必ずわればかりと思ふな、(二六二)

⑤において「カナラズ」が推量の語と呼応した例は資料③と同様、ほぼ三―四割程度であり、呼応する助動詞の異なり語にもほとんど差異は見られない。また、「べし」との呼応例がないというのも、先の③において推測したことを強めることとなっている。さらに下に推量の表現を伴わない場合の「カナラズ」の意味・用法についても、③との間に差異は認められない。これらは口語資料としての③と⑤の共通性がもたらす結果であると判断できそうである。

⑤における「サダメテ」は二五例である。ここではすべて推量表現の文中で用いられている。助動詞「う」「うず(る)」と呼応した例がほとんどであるが、他の推量の助動詞を下に伴った例も数例見える。

まず、「う」と呼応した例は、

○さだめてお供に下りませうと恋しう心に待つてござるに、(三二一)

のほか、三例、

「うず(る)」と呼応した例は、

○たがもらいたか、さだめて北面の者どもが中にあらうずと思はぬことなう案じつづけておぢやつたところに、

(二七)

○はや白髪が少しあつたほどに、今はさだめて白髪にこそあらうずることぢやが、(一七一)

○世がしづまりまらしたならば、さだめて撰集の沙汰もござらうずれば、(二八二)

のほか、一三例、

「らう」と呼応した例は、

○そもそも御辺は平家の方ではさだめて名ある人でこそあらう、(二七四)

のほか、一三例、

否定推量の「まい」と呼応した例は、次の一例である。

○遊び者のならひなれば、さだめて苦しうもあるまい、(九四)

下に推量の語を伴った「サダメテ」は、確信をもって「間違ひなく。きっと」と推量したり、決意したりする意と、「たぶん。おそらく」のように確信性の薄い推量の意とを表すが、両者の使い分けを判断することはなかなか困難な面もある。しかし、⑤にあつては確信をもつて推量する例が多く見受けられるものの、明らかに両者が認められるのである。そして推量の確信性をより強めようとする時には、

○さるほどに目の前にかやうに見参に入らうとは思ひもよらなんだれども、さだめて今は屋島の大臣殿の見参に

も入りつべしいと存ずる、(三〇〇)

のように、「べし」にさらに完了の助動詞「つ」を上接させて確実な推量を表し、確信性のあまり持てない推量の時には、推量の助動詞を重ねて、次のように表現することも、おのおの一例ずつではあるが有り得たのである。

○源氏の大将実盛が申したにたがはず、さだめて搦手にやまはらうずらう、(一五三)

以上、口語資料③⑤における「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法について検討した。先に文語資料①②に見た場合と同様、意味に関しては両語の間にほとんど差異は認められない。しかし、用法に関しては文語資料①②の場合と同じように、差異が認められるということである。すなわち、「カナラズ」については、〈表4〉に示したように、推量文中において「カナラズ」と呼応する推量の助動詞は「う」「うずる」「まい」の三語で、その使用数も③⑤ともに非推量文中における「カナラズ」の使用数より少ないのである。

〈表4〉

⑤	③	
1	9	う(ん)
4*	2	うずる
0	1	まい
13	18	非推量

〈表5〉

⑤	③	
0	0	べし
1	0	つべし
1	22	まい
4	54	う
16	4	うずる
0	1	よう
2	0	らう
1	0	うずらう
0	6	非推量文

(注) *は省略部分の用例数

また、「サダメテ」については、〈表5〉に示したように、推量の助動詞との呼応が圧倒的に多く、かつ呼応する推量の助動詞の異なり語も多様である。そして非推量文中での使用例は極めて少ないのである。

かくして「カナラズ」と「サダメテ」の間には、用法の上で次のような差異を認めることができる。すなわち、「カナラズ」は、下に推量の語を伴うことはあつても、それがすべての用法ではなく、むしろ非推量文中にあつ

て、「事実について認定し、行為を命じ、あるいは判断を下すにあたって、間違いなくその事実が認定でき、行為が実行され、判断が成立することへの、確言、強制、確信を表」すために広く多用されるということ

「サダメテ」は非推量文中で用いられることはあっても、それを主とするものではなく、「カナラズ」が非推量文の中で果たしていた表現を確信をもって推量するという用法を担うものとして多用されるということである。

したがって、三節と四節において、文語資料と口語資料という資料の性格から「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法を検討してきたが、両語の差異は資料的性格による違いだけでは必ずしも明らかにされ得ないと言えよう。それよりも、すでに二節において「カナラズ」と「サダメテ」との使用状況を数量的観点から考察した際に推測したように、それぞれの資料の内容すなわち文学性・文芸性を強くもったものかどうかという点に因るところが大きいように思われるのである。

四 論語抄の「カナラズ」と「サダメテ」

最後に、以上の検討結果に抄物資料④における「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法を照して考察する。

④における「カナラズ」は強意の副助詞「しも」を付した「カナラズシモ」九例を含めて七七例である。「カナラズ」が下に推量の語を伴った例は、七七例中一八例で、そのうち、

○口ヨリ出ル言ハ必ス行ヘシ。(四24ウ1)

○人子ノ礼ハ出ル時ハ必ス告還時ハ必ス面スベシ。(一62ウ4)

○下ノ心ハ天下有道ニ政朝ヨリ出デバ我必ス用ラレテ与リ聞ベキ物ヲト云心也(四6オ14)

などのように、「べし」と呼応した例が一〇例、

○此子^コが必ス天地四方に^{コト}変アラント云テ示ス(一43オ5)

○三年バカリ学問ヲノハ必ズ禄ヲ求ントスル者ゾ(二56ウ14)

○人君ノ是^{マヤ}ヲ侯^{マヤ}(「信」か)セハ必ス国家カクツカヘラウゾ(五7ウ1)

○此篇ニハ君ノモシ難アルトキハ臣ハ必ス死ヲイタサウスト云^{マヤ}変ヲ明タソ(五16オ2)

などのように、「う(ん)」「うず」と呼応した例が八例である。推量の助動詞と呼応した「カナラズ」は、時に仮定条件を伴って、推量や意志を確信あるものとしている。

また、「カナラズ」が下に否定の語「ず」「で」「いで」「ない」などを伴って用いられた例も、

○必スソレヲ試ミ知テナラデハホメヌソ(四35オ8)

○根モナイコトヲ言モノハ必ス心モ言モ實カナイソ(四13ウ4)

のほか三例見え、確信をもって認定し、断定することが絶対的ではないことを表している。

なお、副助詞「しも」を付した「カナラズシモ」が九例見えるが、次のように下に反語の表現を伴って用いられた一例、

○何^{マヤ}必シモ位ニ居テスル斗カ政ヲスルテハアラウト也(一34ウ10)

を除いては、八例すべて、

○国トハ必シモ一國ヲ指テハ云ヌソ(一19ウ8)

○文武ハ必スシモ文王武王ノ道ト云心テハ無ソ(五22オ8)

などのように、下に否定の「ず」「なし」を伴ったものである。

④における「カナラズ」が推量や否定という特定の呼応語を下に伴った例は、右に見た三三例である。「カナラズ」七七例のうち、残りの四五例は、たとえば、

○物ト聲ト必ス相應スル物也(一25オ6)

○言ハ学テハ必ス其義理ヲ思フソ（二23オ1）

○戦時ハ必ス勝ツト云タソ（二36オ12）

○聖人ガ世ニ出ル時ハ必ス賢人ノ輔ガ出ル物ソタトヘハ天ノ雨ヲ降サウトテ必ス山澤ヨリ雲ヲ出スヤウナソ必ス天カラ輔ヲ出スソ（三34オ13・14）

○功ガアレバ必ス誇ル心アルハ小人ソ（四12ウ3）

などのように、一般的な肯定文の中に用いられ、事実や事柄に対する確言・強制・確信が絶対的であることを表している。

一方、④に見える「サダメテ」は、わずかに次の二例である。

○コ、ニ八十九ノ道モアラウズヲ云ザルハ如何ト云ニ孔子ハ七十三テ死ナレタホトニソ定テ七十以后ノ詞テアラウソ（二27オ3）

○鑿ハス、ソ刀ノツカニ鈴ヲ付テ拍子ニ合ヤウニスルソ鶏ハ定テ小刀テアラウソ（五2ウ12）

いずれも下に推量の助動詞「ウ」を伴って、しかるべく推量される事柄を確信をもつて表している。

資料④における「カナラズ」と「サダメテ」は、七七対二というその使用数から、文語資料①②とも、また、口語資料③⑤とも相違し、極めて顕著な偏りを見せている。しかし、両語の意味・用法に関しては、④も他の①②③⑤四つの資料に認められたものと同じく、大きく変わるところがない。こうした資料④に見られる傾向は、抄物という講述者の古典講釈を筆録したものにあつては極めて自然のことと認められよう。なぜなら、抄物は「原点を解釈し、人に説明してゆこうとする条件のもとで成立する」⁽⁵⁾ものであるから、そこには講述者の原典における事柄や事実についての認定や判断が示され、その認定や判断が成り立つことに対する確言・確信などが当然表れているものであるからである。

以上、『曾我物語』の一節に用いられた「カナラズ」と「サダメテ」が、現代語においては共に「きっと」という意味が与えられることに着目し、両語が同義語であるのかあるいは類義語と考えるべきなのかという疑問から発して、『曾我物語』と同時代の室町時代における文語資料と口語資料五点を対象に、「カナラズ」と「サダメテ」の意味・用法を検討した。その結果、意味の上では資料の性格に関わりなく、両語は同義の関係にあると見られるものの、用法面では両語に明らかな差異が認められるということである。そしてその差異は、互の用法の一部を補い合う関係―すなわち、「カナラズ」は時に推量表現に用いられることはあっても、それは一部の用法にすぎず、「カナラズ」の中心は断定・命令・疑問・意志などを表す文中にあつて、それらが成り立つことへの確言・強制・確信を表すのに対し、「サダメテ」は主に推量文中に用いられ、非推量文中での使用は極めて少ないということにあるということである。したがって、「カナラズ」と「サダメテ」は共に「間違いなく。きっと」と同じ意味に解釈されるけれども、両語には用法に相違する点が認められ、同義語と解することはできない。結局、類義語と理解する方が妥当であると言えよう。

わずかな資料を基にした検討結果から、結論めいたことを言うことは慎まなければならないのだが、室町時代における副詞「カナラズ」と「サダメテ」の関係を考察した結果、おおよそ右のような結論に達したということなのである。したがって、今後はさらに多くの資料に目を向け、右の結論を確認していくことが求められるであろう。

なお、「カナラズ」「サダメテ」両語と同義・類義の関係にある漢語「治定」「一定」「必定」「是非」などの副詞的用法も資料①～⑤にそれぞれ散見するが、本章ではそれら漢語副詞については言及することができなかった。⁽⁶⁾「カナラズ」「サダメテ」とそれらに対応する漢語副詞との関係については今後の課題としたい。

〔注〕

- (1) 濱口博章氏解題『太山寺本曾我物語』（汲古書院）に拠る。ただし、句読点、濁点は私に補う。以下同じ。
- (2) なお、「カナラズ」と「サダメテ」について論究したものに、橋本博幸氏「漢文訓読語の国語文への受容―『サダメテ』の場合―」（『訓点語と訓点資料』第八十四輯〈平成二年六月〉）がある。これは漢文訓読における漢文の直訳語がどのように国語文の中に受容されていたかについて考察したものであるが、本章は室町時代における「カナラズ」と国語の中に既に一般語として定着している「サダメテ」の意味、用法について考察しようとするものである。
- (3) 橋本博幸氏は前掲注（2）論文において、「国語文全体としては『サダメテ』は推量表現中で専用されるのが原則であると言い得る」と述べておられる。したがって、ここでの傾向は前代の用法を引き継いでいると言える。
- (4) 『日本国語大辞典』（小学館）の「カナラズ」の項の説明に拠る。
- (5) 寿岳章子著『室町時代の表現』第Ⅱ部「抄物語彙研究の意義と方法」一四九頁。
- (6) 近時、この点について論究したものに、原卓志氏「漢語『善悪』『是非』『決定』『必定』の副詞的用法について」（『鎌倉時代語研究』第十四輯、平成三年十月）の詳論がある。

第四章 中世語としての副詞「かまへて」

副詞には、その語構成の上から、実質的概念を表す語〈詞〉に、形式的概念を表す語〈辞〉が接して一語化したものがある。⁽¹⁾本章ではそうした語構成をとる副詞「かま（構）へて」（音転化して「かまひて」とも言う）を取りあげ、

(1) この語が一語の独立した副詞として多く使用されるようになるのは中世であるということ。

(2) この語が使用される文献には偏りがあるということ。

の二点について明らかにしようと思う。

一 平安・鎌倉時代における「かまへて」

―― 平安時代の「かまへて」

現在一般に活用されている国語辞典には、「かまへて」がどのように説明されているかを、『日本国語大辞典』（小学館、昭和四十八年九月）（筆者注、以下『日国』と略称する）の記述によって示すと、次のごとくである。

（動詞「かまえる（構）」の連用形に助詞「て」の付いてできた語）

①工夫、手段を尽くそうとする意図、意志を示す。なんとかして。心がけて。

（筆者注、用例省略、出典のみ掲げる。以下同じ）大鏡―二・時平、今昔―三一・一四、菟玖波集―釈教

②手段を尽くして実現させたいという、相手への要求、命令を示す。必ず。是非。

源氏―夢浮橋、無名抄、宇治拾遺―五・一、天草本平家―二・二

③手段を尽くして実現させるな、という相手への禁止を示す。絶対に(……するな)。決して(……するな)。
毎月抄、史記抄―一四・扁鵲倉公列伝、歌舞伎・一心女雷師―

④自分の言動に間違いはないことを、相手に主張する気持を示す。間違いなく。ほんとうに。

虎明本狂言・末広がり、浄瑠璃・用明天皇職人鑑―道行、不言不語〔尾崎紅葉〕三

この『日国』に記述された、①④の意味を有する用例の出典を手掛りとして、早く一語の副詞として独立した「かまへて」が見出される平安時代について、文学作品を中心にその使用状況を『古典対照語い表』(宮島達夫編)によつて検討してみると、そこに掲げられた、竹取物語・伊勢物語・古今集・土佐日記・後撰集・かげろう日記・枕草子・源氏物語・紫式部日記・更級日記・大鏡の十一作品において、副詞「かまへて」が見出されるのは、次に掲げる源氏物語と大鏡の二例である。

○この僧都ののたまへる人などには、さらに知られたてまつらじとこそ思ひはべれ。かまへて、ひがことなりけりと聞えなして、もて隠したまへとのたまへば、(源氏・夢浮橋⁽²⁾)

○なにがしの史が、ことにもはべらず。をのれ、かまへてかの御ことをとゞめはべらんと申ければ、(大鏡・時平⁽³⁾)
前者の源氏物語の例は、『日国』で②の意味の用例として引かれた、下に命令形を伴ったものであり、後者の大鏡の例は、同じく『日国』で①の意味の用例として掲げられた、下に推量(意志)を表す語を伴ったものである。

右の『古典対照語い表』に掲げられた以外の平安時代の文学作品、すなわち、大和物語・多武峰少将物語・宇津保物語・平中物語・三宝絵詞・落窪物語・篁物語・提中納言物語・夜の寝覚・浜松中納言物語・狭衣物語・讃岐典侍日記・法華百座聞書抄・古本説話集・松浦宮物語・梁塵秘抄の十六作品⁽⁴⁾について、副詞「かまへて」の使用状況

を検索してみても使用された例は殆どなく、僅かに平安時代末期の古本説話集に次の二例が見出されるだけである。⁽⁵⁾

○人はたゞ、歌をかまへて読むべしと見えたり。(巻上二八才)

○いかで京に上りて、東大寺といふところにまいりて、受戒せんとおもひて、かまへて上りて、受戒しにけり。

(巻下一一六ウ)

右の二例は、いずれも「よく心にかけて」「注意して」という意味を表しており、『日国』の①の用例として捉えられるものである。

副詞「かまへて」は、動詞「かまふ(構)」(下二段)に接続助詞「て」が付いて一語化したものである。この「かまへて」がこれまで見てきたごとく、平安時代の文学作品、とりわけ和語和文によつて書き表された物語や日記の世界(和歌では使用されることがない)では極めて稀にしか見出すことができず、僅かに見られる用例も会話文の中で使用されているということを考慮すると、俗語として生成したものが口頭語を反映する会話文の中に顔を出したものと思われる。このことは、先に例示したような平安時代末期の古本説話集に「かまへて」が二例見出されることから考えられよう。なぜなら、説話は表現が叙事的・具体的であつて、俗語が使用されやすいからである。そして副詞「かまへて」は、平安時代にあつては、まだ独立した副詞として十分に熟しきつていず、したがつて源氏物語や大鏡や古本説話集の使用例を見ても、「かまへて」の表す意味は複合して一語化する以前の動詞「かまふ(構)」の「思慮・工夫・注意・用心などをあれこれと組み立て、集中する⁽⁶⁾」という意味を含み持った『日国』の①②の表す意味領域を出るものとはなっていないのである。⁽⁷⁾

一―二 鎌倉時代の「かまへて」

この事情は、中世前期の鎌倉時代の文学作品⁽⁸⁾においても認められる。すなわち、和文や擬古文によつて書き表さ

〈表1〉

計	あひかまへて				かまへて				語 下に伴う表現 作品
	その他	禁止	要求・命令	意志	その他	禁止	要求・命令	意志	
6	1	1	2	2	0	0	0	0	保元物語
1	0	1	0	0	0	0	0	0	平治物語
11	0	4	4	3	0	0	0	0	平家物語
7	0	0	1	0	3	1	2	0	宇治拾遺物語
3	0	0	0	0	1	0	1	1	閑居友
3	0	0	1	0	0	0	1	1	十訓抄
31	1	6	8	5	4	1	4	2	計

ひかまへて」は「かまへて」の語調を整え、あるいは改まった言い方として使用されたものと解釈しておきたい。
 〈表1〉から特に注目されることは、禁止（否定）表現を下に伴った「かまへて」「あひかまへて」の用法が現出しているということである。

そこで、〈表1〉に示した各作品の「かまへて」「あひかまへて」の用例について検討する。

〔保元物語の例〕

○あひかまへて東近江へわたらんとしけれども、不破の関ふさがりたる由申ける間、（中、為義降参の事）

○相構て御所の中へ入らんと伺ひけれ共、門守護の兵士きびしかりければ、（下、新院御経沈めの事付けたり崩御の事）

○家弘相構へて、今度の命計たすけまいらせよと仰下されけるこそ浅増けれ。（中、新院・左大臣殿落ち給ふ事）

○相構而此等をば義朝に申助て、善は子どもおもへ、悪くは切ても捨てよ。（中、為義最後の事）

右の四例は、保元物語における使用例六例のうちの、下に推量（意志）、要求・命令の表現を伴った「あひかまへて」のものである。また、次の一例は、下に直接「あひかまへて」を受ける表現（ここでは、意志）が省略されているものであって、いずれも先に示した『日国』の「かまへて」の①と②の意味を表すものである。

○相構而三井寺までとおぼしめさるゝに、山險しく御馬より下て、歩よりのぼらせ御座。（中、新院・左大臣殿落ち給ふ事）

これらの「あひかまへて」の例は、副詞としての独立性が弱いと考えられるものである。事実、こうした「あひかまへて」を副詞とせず、連語と扱っている辞書もある⁽¹⁰⁾。しかし、次の一例は、「あひかまへて」が下に禁止表現を伴って、その禁止の意味を強めた言いまわしをしていることが窺え、さらに副助詞「ばし」を含んだ表現句中に使用されていることから、副詞としての独立性の強い例といえる。

○相構而一所へばしおちぬるな。（中、為義降参の事）

〔平治物語の例〕

○あいかまへて／＼御出家などめされ候なとさ、やき申ける。（下、頼朝遠流の事付けたり守康夢合せの事）

平治物語における「あひかまへて」の使用例は右の一例だけである。下に禁止表現を伴ってその禁止の意味を「あひかまへて」を反復して強めている。したがって、この反復表現をした「あひかまへて／＼」にはただ「決して」という意味だけではなく、それをさらに強調した「どんなことがあっても（どんなことをしても）決して」という意味があることを読み取ることができる。

れた無名草子・たまきはる（建春門院中納言日記）・高倉院嚴島御幸記。高倉院升遐記・海道記・東関紀行・十六夜日記・うたたね・中務内侍日記・竹むきが記などの物語評論や日記紀行、建礼門院右京大夫集・住吉物語などの家集や物語、方丈記・徒然草などの随筆には副詞「かまへて」は全く見出されず、俗語を取り入れて表現されている和漢混淆文の軍記物語や説話文学作品には、「かまへて」および「あひかまへて」の語形で〈表1〉のように現出する。

〈表1〉から窺えるように、軍記物語と説話文学作品との間には「かまへて」と「あひかまへて」とに語形上その使われ方が截然としている。しかし、そこに位相や用法による違いがあるとは考えられない。「あ

〔平家物語の例〕

平家物語においても「かまへて」の使用例はなく、一一例すべて「あひかまへて」である。

○か、りしかば、いかなる人も相構て其ゆかりにむすば、れむとぞしける。(巻一・禿髪)

○相かまへて思召たつならば、ちいろの底までもひきこそ具せさせ給はめ。(巻九・小宰相身投)

○相構て、夜を日につぎて勝負を決すべしと仰下さる。(巻十・逆櫓)

の三例は、下に推量の助動詞「む」「べし」を伴った表現に使われ、強い意志や要求の意味を表している。また、次の四例は下に命令表現を伴い、「必ず」「きつと」などの意味を表している。

○此世になき者ときかば、相構て我後世とぶらへとぞの給ひける。(巻二・大納言死去)

○相かまへて是漢王に奉れと云ふくめ、(同・蘇武)

○相構て事ゆへなくかへしいれたてまつれと、仰下さる。(巻九・三草勢揃)

○相構てよく／＼なぐさめまいらせよ。(巻十・千手前)

下に禁止表現を伴ったものは四例があるが、終助詞「な」を取ったもの三例、禁止の複合助動詞「べからず」を取ったもの一例である。

○相かまへて念仏おこたり給ふなど、たがひに心をいましめて、(巻一・祇王)

○相構へて池殿の侍共にむかて弓ひくなど情をかくれば、(巻七・一門部落)

○相構て少将殿の心にたがふなとこそ仰候しか。(巻十・維盛出家)

○相構て、衆徒は狼藉をいたすとも、汝等はいたすべからず。(巻五・奈良炎上)

保元物語・平治物語・平家物語のいわゆる軍記物語に「かまへて」が使用されず、「あひかまへて」が専用されていることについては先述した。この副詞「あひかまへて」が、意味・用法において「かまへて」と同じであるこ

とは、右の軍記物語の諸例の検討から明らかであろう。そして、やはりここで注意されることは、「あひかまへて」が下に禁止表現を伴う場合には、「あひかまへて」と下の禁止を表す語との呼応関係がかなり密接で、そのため一語の副詞としての独立性が強く現れるということである。それに引換え、下に推量(意志)・要求・命令などの表現を伴う場合には、それらの意味を表す語との呼応関係——すなわち、「あひかまへて」の下に伴う語への拘束力は緩く、副詞としての独立性は弱いということになるのである。

「あひかまへて」が下に伴う表現の語との呼応関係を緩くし、一語の副詞としての独立性を弱めてしまうのは、たとえば、先の平家物語において禁止表現の複合助動詞「べからず」を下に伴った例のように、たとえそれが下に禁止表現を伴う場合であっても、「相構て」が呼応する「べからず」の間に、他の要素(関係)、ここでは仮定条件「衆徒は狼藉をいたすとも」を挿入してしまつて、「相構て」の下に伴う「べからず」に対する直接の拘束力を緩めているからなのである。したがつて、もし「相構て」が下の禁止表現「べからず」との呼応関係を緊密にし、一語の副詞としての独立性を強めるのなら、平家物語のこの例は、「衆徒は狼藉をいたすとも、汝等は相構ていたすべからず」という表現がなされなければならないであろう。すなわち、副詞「あひかまへて」には、平安時代の副詞「かまへて」について先述したように、動詞「構ふ」の原義からそれほど距離を置かない意味が使用されたり、あるいは原義が抽象化されて使用されたりする二つがあることを理解するのである。

〔宇治拾遺物語の例〕

○人は唯、歌をかまへてよむべしとみえたり。(巻三ノ八)

○せをそらしたるやうに覚えて、かまへていでえて、あせをのごひて、(巻三ノ一)

○しる所などもなくて、かまへて世をすぐしければ、やもめなる女ひとりあらむには、(巻九ノ三)

右の「かまへて」の三例は、「なんとかして」「心がけて」という意味で使用されており、『日国』の①に該当す

るものである。この場合には、必ずしも下に一定の語(表現)を伴うとは限らない。

また、次の三例は、下に命令表現を伴ったもので、「必ず」「きっと」の意味を表し、『日国』の②に該当するものである。

○かまへて参り給へといへば、目もみえねば、いかでか参らんといふ声す也。(巻五ノ一)

○ことかけにたり。相構てつとめよ。せめて京ばかりをまれ、事なきさまにはからひとつめよと、(巻五ノ六)

○さらば、かならずかまへて射よ、いみじき悦びせんといへば、(巻二ノ一九)

しかし、実際は「必ず」「きっと」の意味が適當するのは最初の例だけで、あとの「かまへて」の二例は、「必ず」「きっと」の意味では不適當であつて、むしろ、『日国』の①に相當する「なんとかして」「心がけて」の意味を表しているとも解されるであらう。最後の例は「かまへて」の直上に副詞「かならず」があり、この「かまへて」を「必ず」「きっと」と解釈することが不適當であることは明白である。

なお、宇治拾遺物語において「かまへて」が下に否定表現を伴った例は、次の一例だけである。

○これを聞きて、かやうのものをば、構へて調ずまじきなり(巻三ノ二〇)

〔閑居友の例〕

閑居友⁽¹²⁾には「かまへて」が三例使用されているが、下に意志の表現を伴ったもの一例、要求の表現を伴ったもの一例、その他のもの一例である。次に例を示す。

○かまゑて誦経物一、つかまつらむとし侍か、(下ノ四)

○かまへてのこりとまりて、いかなるさまにても、後のよをとぶらひ給べし。(下ノ八)

○かまへて身をとめて、おさまれる心となしはて、おのづからほとけの御事をも思ひしるべき也。(下ノ十)

これらの「かまへて」の表す意味は『日国』の①と②に相當するものである。

なお、閑居友には「かまへて」が下に否定表現を伴った例はない。

〔十訓抄の例〕

〈表1〉に示した保元物語・平治物語・平家物語の軍記物語には副詞「あひかまへて」が専用され、宇治拾遺物語・閑居友の説話文学作品には副詞「かまへて」が専用されているというように、「あひかまへて」と「かまへて」の使用上の偏りが認められるが、十訓抄⁽¹³⁾においては、次のように「かまへて」が二例、「あひかまへて」が一例使用されている。

○二十人斗カマヘテ語ヒ集メ給へ。(第一・不施人惠事)

○人々寄合テサルベキ遊ビナドセムニハ、タトヒ身ニ取テ安カラズ、口惜キ事ニアヒタリトモ、構テ其日ノサハリアラセジトハカラフベキ也、(第七・可專思慮事)

○此本鳥切タリト云男、相構テトラヘテ参ラセヨト仰ラレケレバ、(第四・可誠入上事)

「かまへて」の二例は、一つは下に命令表現を伴い、一つは下に否定表現を伴ったもので、「あひかまへて」の一例は、下に命令表現を伴ったものである。

以上、鎌倉時代の文学作品に見られる「かまへて」「あひかまへて」の使用状況について調査し、その使用例の意味・用法を検討してきた。確かに鎌倉時代になると、「かまへて」「あひかまへて」の現れる文学作品が多くなる。しかし、「かまへて」「あひかまへて」が総ての文学作品に現れるのではなく、軍記物語や説話文学作品に見られ、偏りがあるということである。

一三 『却癡忘記』の「かまへて」

ところで、鎌倉時代初期の文献で、「かまへて」「あひかまへて」が現れることで注目されるものとして、明恵上

人の教訓・談話を、弟子の長円が筆録した却癡忘記⁽¹⁴⁾（文暦二年（一二三五））があげられる。そこには「かまへて」「あひかまへて」が数多く使用されている。

以下、用例を整理して示す。

「かまへて」の例

〈下に意志（決意）・勧誘・命令の表現を伴ったもの〉

○申事トモ、ソライタラテ、カマイテタモタムトシアヒテオハシマスカ故也。（上17オ）

○カマヘテ数返ハシヲモカサネ、他事ナク行ヒテ候ハムト思也。（下1ウ）

○サレバ信ヲカマヘテコノムヘキニテアル也。（上6ウ）

○オコナヒハ、近來ハヤクスルヲ以テヨキニシタル、キハメタルヒカコト也。カマヘテシツカニ如説ヲサキトスヘキ事也。（上1ウ）

○人ノ師トシテハ、カマヘテ広カルヘキ也。（上9オ）

○幼稚ノ当初、童子ノ時、高尾ニテ、真実ノ信ト知恵トカマヘテアラセサセ給ヘトテ、如法、後夜二人ニモシラセテ、（上20オ）

右の「かまへて」（かまひて）六例は、それぞれ下に推量の助動詞「む」「べし」、活用語の命令形を伴って、『日国』の①や②に相当する「なんとかして」「心がけて」や「必ず」「是非」といった意味を表している。

〈下に否定や否定的推量の表現を伴ったもの〉

○諸方ノ信施ウケアツメテ、カマヘテアサイハシセテ、精進ノ行、ハケマシ給ヘシ。（下5ウ）

○諸方ノ信施ウケテ、カマヘテ／＼アサイハシセシト、ハケミアハルヘキ也。（上10ウ）

右の二例（後の例は「かまへて」を反復した「かまへて／＼」が使用されている）は、いずれも下に打消を伴って、

「決して（…ない）」という意味を表しているが、「かまへて」が禁止表現と呼応した例はない。二例とも鎌倉時代の「一般大衆の口頭語、中でもその俗語に生きていた可能性が大きい⁽¹⁵⁾」とされる副助詞「ばし」を含んだ表現句中に使用されている。このことは、「かまへて」が使用される文献や現れる場面が限られていることを考えるのに示唆するものである。

「あひかまへて」の例

〈下に意志・勧誘・命令の表現を伴ったもの〉

○第三戒ヲ身命ヲツクストモ、相構マフラムト思ヘキ也。（上4オ）

○イソカシキ事アラハ、コト処ヲハハヤクストモ、入我ミ入、字輪観、コノニヲハ、相構、ヲシ、ツメテ、能ミ観スヘキ也。（上1ウ）

○精進修行ハカリハ、ヤスキ事也、相構、只ツトメヲコナヒアハセ給ヘシ。（上11オ）

却癡忘記の「あひかまへて」の使用例は右の三例を含む計四例である。いずれも下に推量の助動詞「む」「べし」を伴って、『日国』の「かまへて」の①と②に相当する意味を表している。ただし、否定や禁止表現と呼応した「あひかまへて」の例は現れない。

また、明恵上人の夢記（承久二年四月五日の記）には、「あひかまへて」の例が一例見出される。⁽¹⁶⁾

○可住槇尾歟、答云、尔也。即観云。相構可令住槇尾給也。（明恵上人夢之記第十篇、12オ14ウ）⁽¹⁶⁾

この「あひかまへて」は、下に助動詞「べし（可）」による勧誘・命令の表現を伴って、『日国』の「かまへて」の②に相当する「必ず」「是非」の意味を表している。

このように、鎌倉時代初期の明恵上人の談話を筆録した却癡忘記や夢記の会話文に「かまへて」「あひかまへて」が見出されるというのは、先に検討した軍記物語や説話文学作品の「かまへて」「あひかまへて」が多く会話文や

〈表2〉 (17)

計	あひかまへて				(かまへて)				語	
	その他	禁止	命令	推量・意志	その他	禁止	命令	推量・意志		
									下に伴う表現	文献名
42	0	0	0	0	5	29	8	0	①虎明本狂言	口語資料
5	0	0	0	0	0	3	2	0	②論語抄	
12	0	3	0	0	3	1	3	2	③杜詩抄	
8	0	0	0	0	5	3	0	0	④漢書抄	
8	0	0	0	0	1	2	5	0	⑤古文真宝桂林抄	
46	0	0	0	0	6	15	24	1	⑥山谷抄	
2	0	0	0	0	0	2	0	0	⑦莊子抄	
30	0	0	1	0	1	13	14	1	⑧百丈清規抄	
2	0	0	1	0	0	1	0	0	⑨日本書紀桃源抄	
9	0	1	3	0	0	2	3	0	⑩天草本平家物語	
1	0	0	0	0	0	0	1	0	⑪車屋本謡曲	文語資料
6	0	3	1	0	0	1	1	0	⑫大山寺本曾我物語	
1	0	0	0	0	0	0	1	0	⑬増鏡	
3	0	1	0	0	0	1	1	0	⑭義経記	
1	0	0	0	0	0	1	0	0	⑮サントスの御作業	
0	0	0	0	0	0	0	0	0	⑯ドチリナ・キリシタン	
176	0	8	6	0	21	74	63	4	計	

といった軍記物語にしか「あひかまへて」は使用されていず、口語資料の天草本平家物語(三例)にも「あひかまへて」が使用されていることを考えると、やはり「あひかまへて」は軍記物語の表現と深い関わりを持っているであろうことは想像に難くない。

それでは、右のような変遷を辿る「かまへて」は、中世後期すなわち室町時代ではどのように使用されているか、考察しようと思う。ここでは、口語資料と文語資料との二つに分けて、「かまへて」がこれらの資料にどのような現れるか検討する。

二 室町時代における「かまへて」

思惟文の中に現れることと共通するところであり、「かまへて」「あひかまへて」が現れる文献や場面に明確な偏りが存することを理解するのである。そして、中世前期の鎌倉時代における「かまへて」「あひかまへて」は、
 ー 前略 ー 物事を構築する意から、心に掛ける、気を配るなどの意を経て、自他の意志を確認したり勧誘する連用修飾語としての意が強まり、陳述副詞として独立したもの。初めは意志および命令とも、肯定・否定いずれにも用いたが、しだいに禁止表現と呼応するものが多くなった。(中田祝夫編監修『古語大辞典』の「かまへて」の項の語誌〔高橋伸幸〕)

という意味・用法の変遷を辿り、独立した一語の副詞として多く使用されるようになったと整理されよう。

まず、口語資料と文語資料とにおける各文献ごとの「かまへて」の使用状況を示すと〈表2〉のごとくである。

〈表2〉から窺えることは、口語資料と文語資料との間に「かまへて」の使用数の差がかなりはつきりと現れているということである。口語資料における①から⑩までの文献間には、「かまへて」の使用状況にかなりの多寡が認められ、文語資料においても⑪から⑯までの文献間には、「かまへて」の使用状況に多寡が認められるが、それでも相対的に見て、「かまへて」の使用数は口語資料の方が遙かに多いと言える。また、「あひかまへて」については、全体的に使用数が少なく、使用状況を云々することはできないが、鎌倉時代における軍記物語と説話文学作品との間に見られるような顕著な差は認められない。文語資料の中で、大山寺本曾我物語(三例)、義経記(一例)

「かまへて」は、口語資料では虎明本狂言（四二例）、山谷抄（四六例）、百丈清規抄（三〇例）などの文献に数多く使用されているが、これら以外の文献ではそれほど多い使用数ではない。ただし、狂言・抄物・キリシタン物といった、いわゆる室町時代の三大口語資料という観点からすれば、天草本平家物語の「かまへて」の使用数は必ずしも多いとは言えないが、「かまへて」（抄物文献では圧倒的に「かまひ（い）て」が使用される）は口頭語を反映した口語資料に現れると言ってよいであろう。なお、抄物文献における山谷抄・百丈清規抄と他の抄物との間に見られる「かまへて」の使用数の差は、口語的かあるいは文語的かといった各抄物文献の性格の違いに因るものと推察される。いずれにせよ、室町時代にあっても「かまへて」が使用される文献には、やはり偏りがあるということである。「かまへて」の現れ方の文献による偏りは、結局、前代の鎌倉時代の状態を継承した結果に基づくものと思われる。

二― 口語資料の「かまへて」

以下、〈表2〉に示した室町時代の各文献における「かまへて」「あひかまへて」の用例について検討する。

〔虎明本狂言の例〕

まず、「かまへて」（「かまひて」の語形で使われる例が多い。〈以下、「かまへて」で統一する〉）が下に命令の表現を伴って、『日国』の②の「手段を尽くして実現させたいという、相手への要求、命令を示す」意に使用された例は、次の例を含めて八例見られる。

○おごうかまへてきにいるやうに致せ、何も兩人にゆづり、身はいんきよ仕る（かくすいむこ 666）

○それならはまいらふ程に、かまひてほしひ物をたもれ（かなづの地藏 687）

○かまいてよく／＼おとふらひあれと、かきけすやうにうせにけり（ゆうげん 757）

なお、「かまへて」を重ねて、「相手に懇命したり、念をおしたりする気持を特に強めていう」〔かまへて／＼〕

の次の二例が含まれている。

○馬になつたらは、馬とりは則そちであらうが、かまひて／＼まぜなどよくして、かひなどをもねん（念）
だるうなひやうにしてくれさしめ（人馬 356）

○かまひて／＼此事を、人々にかたりつたへよと、（文山だち 93）

次に、下に終助詞「な」を伴った禁止表現に使用された「かまへて」は、二九例も見られる。数例用例を示す。

○かまひておぢさせらるゝな（よろい 95）

○それにおまちやれ、かまひて余所へおじやるな、目をぬかうぞ（目近籠骨 122）

○そうじてむこ入には、人がみたがる物じや程に、かきからもどこからのぞかうほどに、かまひてをくするな、
（二人袴 652）

○めいよばかすきつねが有程に、汝らをやる、かまひてばかされなと云て、なるこをやる、（きつねづか 254）

○又みどもがつれてゆくほどに、かまいてお。のかほをするな（みめよし 420）

「かまへて」を重ねて強調表現をした「かまへて／＼」の例が三例見出されるが、そのうち一例は、次のように下に「な……そ」の禁止表現を伴っているものである。

○きつねと云ものは、あたをなせばあたをなす、おんをみすれはおんをほうずる、あたかもみにかげのしたがふ
がことく、かやうに執心ふかきものにて候ぞ、かまひて／＼な、つらしまつそ（つりきつね 228）

「かまへて」が下に命令や禁止表現を伴って「よく注意して」「必ず」「是非」という意味に使用されるのは、前代からのものである。しかし、虎明本狂言では、とりわけ禁止表現と呼応した例が多く見られるが、これは先に引用した『古語大辞典』の「かまへて」の項の語誌の記述に適うものであって、注意してよい。また、虎明本狂言には、下に推量の助動詞を伴って、意志や勧誘を表す「かまへて」の例は見られないが、反対に前代の鎌倉時代には

見られなかった、『日国』の「かまへて」の④の意味、すなわち「自分の言動に間違いはないことを、相手に主張する気持を示す」に相当する「間違いなく」「ほんとうに」の意を表した例が、次のように五例現れている。これは下に条件句を伴ったり、断定（肯定・否定）表現を伴った用法である。

○あ、かたじけなひ、かまゐてわれらのおはれまらするでは御（負）ざなひ、是は天神を御おひなさる、とおほしめせ（あがり170）

○立居の人にわらはれ給ふな、かまひてなひ事に、そ候ぞ（すゞきばうちやう211）

○かまひてあいつは、す、どひやつで、心がけた者じや程に、たはかつてせい、（ぶあく493）

○かまひておそうもどりやつたらは、くせ事でありやらふぞ（文荷200）

○一段よからふ、かまひて申合、程に、以来は同心申さう（酢はじかみ140）

〔論語抄の例〕

下に命令表現を伴ったもの二例、禁止表現を伴ったもの三例が見られる。

○火ト云モノハキブイ程二人ガヨリツカヌガ水ガウルギヨツテ人ガアナヅ、テ溺ル、ソカマイテキブウセイト云
タソ（四16オ4）

○来―是ヨリ後ハカマイテ我ヤウニ隠居ノヨリ候、ヘソ（五12オ12）

○カマイテ魯国テ緩怠ナ振舞ハシスナ（ト）云心ソ（五15オ7）

○カマイテウレシサウナカホバシ仕ルナ（五20ウ13）

右の禁止表現と呼応した二例はいずれも副助詞「ばし」を含んだ句中に使用されており、「かまへて」の陳述副詞としての性格を表している。また、次の一例は終助詞「そ」を伴った禁止表現と呼応したもので、抄物の特異な文体に因るものであろうか。

○巨室ハ大夫ノ吏ソ故旧ハ旧友ヲハ大ナ吏カナクハカマイテ忘レソ（五15オ10）

〔杜詩抄の例〕

「かまへて」が下に推量の助動詞「べし（可）」を伴ったもの二例、命令表現を伴ったもの三例である。一例ずつ用例を示す。

○凡送行時辞曰カマヘテ路次無為無事ニアルヘシト云（二15オ）

○学者カマイテ此テ止マレ（十12オ）

次の「かまへて」は、下に否定推量の助動詞「まい」を伴って、禁止の意味を表したもので、禁止表現を下に伴った例はこの一例である。

○御分カマイテ飢寒ナリトモツイシヨウスマイ（十四43ウ）

また、「かまへて」が下に条件句を伴って、まちがいなくそうだと確認する意味を表した例が二例見られるが、次の一例もまた「当面する事態について、まちがいなくそうだと確認を求める」¹⁹⁾意味を表していると解釈できる。

○故明日遅参ハ治定構テ可有御免也（十五36オ）

右の「構テ」の直上にある漢語副詞「治定」は「かまひて」の表す確信性の意味を更に強めている。なお、杜詩抄には「あひかまへて」が三例見られるが、いずれも下に禁止表現を伴ったものである。

○我ハセメテ無大吏相構テ外人ニカ、ル風情ヲシテ嫌疑ミスルコトナカレ（二22ウ）

○アイカマエテ甚人ナテライソ（三45オ）

○サナイニ相構テ卒忽ニシテサマルナ也（十九16ウ）

〔漢書抄の例〕

漢書抄には「かまへて」が意志や命令表現と呼応した例は見出せず、次に一例ずつ示したような禁止表現を下に

伴った用法（三例）と、下に条件句や断定表現を伴って「まちがいなくそうだと確認する」意味を表す用法（五例）が見られる。

○横ナレト、ハカマイテヨムマイソ、（三三三ウ）

○サキニ云ツルカマイテ戦ヲイトムトモタ、カウソト云（三三一ウ）

〔古文真宝桂林抄の例〕

下に命令表現を伴った例は五例見られるが、その一例を示す。

○サテコ、ノ心ハ後世ノ人カマイテコ、ヲ能マフレソ（坤一七ウ）

下に禁止表現を伴った例は次の二例である。

○今日ハカマイテ聊ルスルナ（乾六八オ）

○封時父ノ云ハレタル叟ハカマエテ只ヨノツネハ叶マイソト周公ノ戒メラレタソ（坤一八ウ）

また、下に条件句を伴って「まちがいなくそうだと確認する」例が一例見られる。

○武子カ初メハカマイテ我レ死タリトモ此妾ヲハ我ニソヘテイキナカラ埋ナト云ソ（坤四七オ）

〔山谷抄の例〕

山谷抄には、下に命令表現を伴ったもの（二五例）、禁止表現を伴ったもの（二四例）というように、この二つの用法が主である。たとえば次のごとくである。

○李多殿カマイテ学文ヲヨウノ猶々ヨイ僧ニナレ（三三三オ）

○一義ニ今コソ官ニナラストモツメハ用ラレウスホトニカマイテ恙ナウイラシメソ（五三八ウ）

○是コソ酒ノ聖処ヨリカマイテ／＼カウ有レト云心ソ（五三三オ）

○カマイテ金沙花ドノ金麤ノマネバシサシムナ（二四七オ）

○カマイテ我ヲ昔ノ大官人テ有ルナント、誰モナ云ソ（五六五ウ）

しかし、下に推量（意志）の表現を伴った

○コ、カラ谷カ教訓ヲ云ソカマイテカウノ所領トラウ（一六七ウ）

の一例や、下に断定（肯定・否定）表現を伴った次のような例が六例見られる。

○カマイテ学問ヲスルト云テ、蛮魚ノ文字ニネイタ様テハ書ヲ読タリトモ本性カ愚ナラハナン用ソ（六二九ウ）

○カマイテ口ワルダテハイヤソ（三二二ウ）

〔莊子抄の例〕

莊子抄には、「かまへて」が下に禁止表現を伴った次の二例が見られるだけである。

○カマヘテナ解ソ（二四〇オ）

○構テナ擢チソ（同右）

〔百丈清規抄の例〕

○カマイテ敦厚ニコクモンニセウソ（三一〇ウ）

右の一例は、下に推量の助動詞を伴って、「工夫、手段を尽くそうとする意志」を示したものである。また、

○カマイテ公界ニセヨソ（二四九ウ）

○鑄鐘テカマイテ長ク撞ケト云ワレタソ（四六ウ）

のように、下に命令表現を伴って、「手段を尽くして実現させたいという、相手への要求、命令」を示した例は、右の二例のほか一二例見られる。さらに、下に禁止表現を伴って、「手段を尽くして実現させるな、という相手への禁止」を示した例は、

○有生有滅ホトニカマイテ御ナケキナ、アツソトテ説法メサレタソ（二五九オ）

○天台宗ノチカイ人ノカマイテ常ニ居ル処ニ仏像ナント安シタリスナト云タコトカアルソ(四18ウ)
 のように一一例見られるが、次の二例は下に否定推量を伴って、「当面する事態に対して、確固たる信念をもって対処しようとする覚悟のほどを、相手に念をおしていうさま」を表すのに使われている。

○カマイテ香ヲハ受マイソ(二31オ)

○カマイテ住持モ同様ニハヒロケマイソ(三64オ)

なお、「かまへて」が「自分の言動に間違いはないことを、相手に主張する気持」を表す意味に使われた例は、次の一例だけである。

○カマイテ其時ニ睡テハヤカテ可行ソ人ヲ待セタリナントセマイソ(四25オ)

抄物文献には、「あひかまへて」の使用例が極めて少ないが、百丈清規抄には一例見られる。下に命令表現を伴ったものである。

○相構テヨク御覽セヨ(二49ウ)

〔日本書紀桃源抄の例〕

日本書紀桃源抄には、「かまへて」と「あひかまへて」が一例ずつ見出される。「かまへて」は下に禁止表現を伴い、「あひかまへて」は下に命令表現を伴って使われている。

○カマイテ御覽セソト申ニナセニ御覽アルソ(上60オ)

○相構テ我国礼法将来センヲウ護セヨトアルソ(中72オ)

論語抄から日本書紀桃源抄まで、〈表2〉に示した抄物文献のそれぞれに現れた副詞「かまへて」と「あひかまへて」について、その用例を検討してきた。〈表2〉に示した抄物文献は口語資料としての性格を有するものであるが、既に触れたように、そこでの「かまへて」と「あひかまへて」の使用数の多寡は、各抄物文献の口語的かあ

るいは文語的かといった性格の違いに因るものであろう。二語の意味・用法についても、相対的には、下に命令表現や禁止表現を伴い、『日国』の②と③、すなわち「手段を尽くして実現させたいという、相手への要求、命令」と「手段を尽くして実現させるな、という相手への禁止」を示す意味に使用する傾向が顕著に認められる。しかし、なお『日国』の①の「工夫、手段を尽くそうとする意図、意志」を示す意味に使用されたり、また、『日国』の④の「自分の言動に間違いはないことを、相手に主張する気持」を示す意味に使用されたりして、多様な意味・用法を表している例も見られるのである。こうした抄物文献に見られる「かまへて」「あひかまへて」の意味・用法もやはり抄物の特性にかかわるものと推測されるのである。

〔天草本平家物語の例〕

「かまへて」五例と「あひかまへて」四例が見られる。

「かまへて」五例のうち、下に命令表現を伴ったものが、次の先に示した例を含めて三例、下に禁止表現を伴ったものが、次の後に示した例を含めて二例ある。

○かまへて軍をようせい者どもと言うて、(221)

○討手の使ひの上子にも、かまへて汝ら池殿の侍ども弓を引くなど、下知せられたによつて、(189)

また、「あひかまへて」四例のうち、下に命令表現を伴ったものが三例あるが、次のように「あひかまへて」を重ねて用いた「あひかまへてく」の一例を含む。

○あひかまひてあひかまひて心にたがはず、宮仕ひ申せとこそ最後のおほせまでをも承つたが、(314)

また、下に禁止表現を伴ったものが次のように一例ある。

○われいかにもならうところで後世のお供つかまつらうと、相構へて思ふな。ただ命生きてお行方を見継ぎまらせいと、(279)

以上が室町時代の口語資料における「かまへて」「あひかまへて」の意味・用法である。

二―二 文語資料の「かまへて」

それでは、文語資料における「かまへて」「あひかまへて」はどうか。〈表2〉から窺えるように、車屋本謡曲からドチリナ・キリシタンまでの六文獻に現れた「かまへて」は七例、「あひかまへて」は五例であつて、文語資料では「かまへて」「あひかまへて」の使用数の少なさが指摘できる。意味・用法も二語ともに下に命令表現と禁止表現を伴い、「必ず」「是非」とか「絶対に」「決して」とかいう意味に使われているものである。文献ごとの用例を示す。

〔車屋本謡曲の例〕

○もしもうたがふ人あらば、其時わらはおことにつき、我名を名乗り申すべし。[〽]かまへて能々おとどけあれと、(二人閑)

車屋本謡曲に見られる「かまへて」は右の一例だけで、下に命令表現を伴ったものである。

〔大山寺本曾我物語の例〕

「かまへて」を重ねて、念を押す気持を強調した「かまへてく」が下に命令表現を伴って使用された例が一例、「かまへて」が下に禁止表現を伴った例が一例、それぞれ次のように見られる。

○かまへてくおりくいとひ玉へとて、なくく道よりたち別給ふ。(巻十、一八オ)

○かまへてこの馬くら返し給ふなよ。(巻六、一八ウ)

大山寺本曾我物語には「かまへて」のほか、「あひかまへて」が四例見出せるが、これは鎌倉時代の軍記物語に専ら「あひかまへて」が使用されていることと関連があらうか。四例のうち、

○あひかまへてとの原、なに事もせばよくし給へ。しそんじては一家のはぢなり。(巻九、三オ)
のように、下に命令表現を伴ったもの一例、

○あひかまへて人といさかみし給ふな。(巻七、一五オ)

○あひかまへてしそんじ給ふなといひをきて、(巻九、四ウ)

のように、下に禁止表現を伴ったもの二例、同じく「あひかまひて」を重ねた「あひかまひてく」が下に禁止表現「べからず」を伴ったもの一例がある。

〔増鏡の例〕

増鏡には、下に命令表現を伴って使われた「かまへて」が一例だけ見られる。

○かまへてまろが面起こすばかり、よき歌つかうまつれよ、とおほせらるゝに、(第一、おどろのした)

〔義経記の例〕

義経記には、次のように、「かまへて」が下に命令表現を伴ったものと、「かまへて」を重ねた「かまへてく」が下に禁止表現を伴ったものが、それぞれ一例見られる。

○構へて暇申(し)て、冬の頃は下れ、と申(し)し間、(四、土佐坊義経の討手に上る事)

○此家のあるじは世に聞えたるゑせ者にて候。かまへてく見えさせ給ふな。(二、伊勢三郎義経の臣下にはじめて成る事)

なお、義経記に「あひかまへて」が禁止表現と呼応した例が一例ではあるが現れるのは、先の大山寺本曾我物語と同様の事情によるものであらう。

〔サントスの御作業の例〕

サントスの御作業には、「かまへて」が下に禁止表現を伴って一例見出される。

○かまへて心を臆病にしてこの白髪なる老尼に恥をかけ給ふな(巻第一220)

なお、キリシタンの教義書ドクリナ・キリシタンには「かまへて」「あひかまへて」の使用例はない。

文語資料の右の諸文献に見られる副詞「かまへて」「あひかまへて」の意味・用法は、命令表現と禁止表現を担う語とに呼応したものに限られ、その表現も極めて単純な呼応関係でなされている。

このように、副詞「かまへて」「あひかまへて」が文語資料に僅かしか見出されず、しかもその表現も、命令や禁止の意を担う語と呼応した単純なものであるということを見ると、この語は口頭語としての性格が重要なものだったと断言してよいであろう。それ故に、この語が文学作品やその他の文献に使用される時には、口頭語を反映する会話文の中に現れてくるものと考えられるのである。

動詞「かまふ(構)」の連用形に助詞「て」が付いて一語化した副詞「かまへて」について、(1)この語が一語の独立した副詞として多用されるのは中世であるということ、(2)この語の使用される文献には偏りが見られるということ、の二点を確認するために、同じ意味・用法をもつ「あひかまへて」と併せ、各文献の用例を取りあげて検討した。

その結果、(1)に関しては、平安時代から中世前期の鎌倉時代までは、まだ一語の独立した副詞として使用された例は少なく、意味・用法についても、動詞「かまふ」の原義を残しつつ、連語としての用法を留めているものが認められる。やがて中世後期の室町時代には、「かまへて」の使用数が増大し、意味・用法も多少の拡がりを示しはするものの、反面、命令や禁止の意味を表す特定語との呼応関係をもつものが顕著に現れるようになったということがいえよう。

(2)に関しては、平安時代や鎌倉時代では、和文や擬古文によって書かれた物語・評論・日記・紀行・和歌や家集といった文学作品には、「かまへて」は殆ど現れず、和漢混雑文の軍記物語や説話文学作品に現れ(表一)から窺

えるように、調査した文献の範囲では「かまへて」は説話文学作品に、「あひかまへて」は軍記物語に使用されるという明確な差が現出した)、それが室町時代では口語資料の諸文献に引き継がれて多用されるようになったということがいえよう。

もとより、個々の文学作品やそれ以外の文献に使用される「かまへて」「あひかまへて」の用例を検討し、その意味・用法を厳密に決定することは困難なことである。本章では、「かまへて」「あひかまへて」の意味の区別を『日国』に示された①から④に求め、用例の判断をしたが、一定の用法が一定の意味と常に結びつくものでは必ずしもないことを考えると、用例の処理の仕方にはいささか問題が存するであろう。しかし、「かまへて」「あひかまへて」が中世になって盛行した副詞であり、また、この語が現れる文献には偏りが認められ、口頭語を反映する会話の場面に見られるものであることには変わりはないであろう。

[注]

(1) たとえば、古典語でこうした語構成による副詞としては、次のようなものがあげられる(竹内美智子・渡辺瑤久江・星野園子の三氏による「現行辞書における副詞一覽」『品詞別日本文法講座5』所収)を参考に、『日本国語大辞典』『古語大辞典』(共に小学館刊)などの用例を確認して判断をした。

あげて(挙) あはせて(併) あへて(敢) あまりて(余) あらためて(改) 〈近世以降か〉 ありありて(在在) いたのきて(甚除) いまもつて(今以) うちへて(打延) えて(得) おして(押) おしなべて(押靡) おしなめて(押靡) おつて(追) おつとつて(追取) おもひきつて(思切) かがなべて(日並) 〈上代語〉 かきまぎれて(掻紛) かけて(掛) かねて(兼・予) かへつて(却) かへりて(却) きはまりて(極) きはめて(極) けつして(決) 〈近世以降か〉 こころして(心) ごして〈近世以降か〉 こぞりて(挙) さだめて(定) しきつて(類) 〈近世以降か〉 しきつて(仕切) 〈近世以降か〉 しのびて(忍) しひて(強) しめて(締) 〈近世後期以降か〉 すぐれて(勝) すべて(総・凡) せめて(攻・迫) そうじて(総) たつて(達) 〈近世以降か〉 たてて(立) つとめて(努・勤) とりわきて(取分) とりわけて(取分) 〈近世以降か〉 なべて(並) 降か) たてて(立) つとめて(努・勤) とりわきて(取分) とりわけて(取分) 〈近世以降か〉 なべて(並)

なめて(並) はじめて(始) はたして(果) はれて(晴) 〈近世以降か〉 ひきかへて(引換・引替) ふりは
へて(振延) べつして(別) まいて(増・況) まして(増) ゆふづけて(夕付) わいて(別) わきて(別)
わけて(別) わりいつて(割入) 〈近世以降か〉 われて(割・破)

(2) 吉沢義則編『対校源氏物語新釈卷六』に拠る。

(3) 日本古典文学大系本(松村博司校注)に拠る。

(4) すべて索引を利用する。ただし、動詞「かまふ(構)」を有するものについてはその連用形の例を確認している。

(5) なお、他に『宇津保物語』(嵯峨院)に、「〈前略〉さこそあれ、よしあきら、かまへてなんばいともてはべると申たまへば」(古典文庫〈前田本〉三二六頁)の一例が見出されるが、「かまへて」を受ける部分に本文異同が見られ、また、この「かまへて」を「謀事をして」とも解釈している注釈書(日本古典文学大系『宇津保物語一』河野多麻校注、二八三頁頭注一七)もあるところから、副詞の例とは積極的に認めがたい。

(6) 大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典〈補訂版〉』の「かまへ」の項②の意味記述に拠る。

(7) このことについては、『日本国語大辞典』の「あいかまえて」の項の補注にも「①は(筆者注、『用心して。心を配って。』の意味のこと)、『構う』という動詞の原義が生きた意味であり、②は(筆者注、『必ず。きつと。』の意味のこと)、それが抽象化して、言いまわしを強めるようになった。」とあることから言い得ることであろう。

(8) 住吉物語(新日本古典文学大系本)以外は索引を利用する。

(9) この語については、『日本国語大辞典』に「『あい』は接頭語。『かまえて』の改まった言い方」とある。

(10) 井上宗雄・中村幸弘編『福武古語辞典』の「あひかまへて」の項。

(11) 日本古典文学大系『宇治拾遺物語』(渡辺綱也・西尾光一校注)一二〇頁頭注には、この「かまへて」の意味について次のように記す。

「心に構えて出ることができて」、「やつとの事で出ることができて」の意と解したい。諸注多く「かまへていでえで」とする。「かまへて」は、後に否定の語が接続すれば、「どうしても」ほどの意となる。

(12) 古典文庫本(永井義憲編)に拠る。

(13) 古典文庫本(泉基博編)に拠る。

(14) 高山寺典籍文書綜合調査団編『明恵上人資料第二』(高山寺資料叢書第七冊)所収に拠る。

(15) 小林芳規氏「鎌倉時代語研究の課題」(鎌倉時代語研究会編『鎌倉時代語研究第十輯』昭和六十二年五月)二八頁。

(16) 注(14)に同じ。

(17) 調査対象とした文献①～⑯の底本は次のとおりである。

①池田広司・北原保雄著『大蔵虎明本狂言の研究』本文篇上・中・下(表現社)索引利用。②坂詰力治編『論語抄の国語学的研究〈影印篇〉』(武蔵野書院)、③～⑨大塚光信編『統抄物資料集成』全九卷(清文堂)、第十卷の索引利用。⑩亀井高孝・阪田雪子翻字『ハビヤン抄 平家物語』(吉川弘文館)索引利用。⑪田中允校註『謡曲集』上・中・下(日本古典全書、朝日新聞社)、⑫影印本(汲古書院)、⑬日本古典文学大系本(時枝誠記・木藤才蔵校注)索引利用。⑭日本古典文学大系本(岡見正雄校注)索引利用。⑮福島邦道著『サントスの御作業〈翻字・研究篇〉』(勉誠社)、⑯橋本進吉著『キリシタン教義の研究』(橋本進吉博士著作集第十一冊、岩波書店)

(18) 『時代別国語大辞典(室町時代篇二)』(三省堂)の「かまひて」の項。

(19) 注(18)文献「かまひて」の項③の説明。

第五章 接頭語「御」を冠した形容詞の敬讓表現

——御伽草子を中心として——

一 平家物語における接頭語「御」＋形容詞

御伽草子⁽¹⁾には、たとえば、『熊野の御本地のさうし』に、

(大王) 大きに御喜びありて仰せあるやう、「悪玉にておはしますらん事こそうれしけれ。これ程の大国は悪玉にてこそ保ち給ふらんずれ。五にて東宮にたゝせ給ひて、七歳にては位につかせましますらん事を見奉らんこそ何よりうれしけれ。ゆめく苦しかるまじ」とて、相人に多くの御宝を取らせて帰されぬ。后たち思ひの外の御返事なり、これはいかにとてあさましくおぼして、皆々帰らせ給ふ。(四一九頁)。

のような、尊敬動詞「おぼす」を形容詞「あさまし」が修飾した表現が見られるほか、

御めのと申させ給ふやう、「大王の願はせ給ふ王子御誕生ならせ給はんずるに、御懷妊にてわたらせ給ふ。さても万の五体臓の御見苦しくいたく御入り候との給ふ、御懷妊の心なり。月の障りとまりて、産の神の御身に入らせ給ひて、かたを作り給ふ時は、眠り物くさく、口を作り給ふ時は、万の甘き物は苦しくなり、苦き物は甘くなりて、足を作り給ふ時は、五体やすからず。日に添ひて胸をせく」と申させ給へば、后も御心少し慰みて、御うれしくおぼしけり。(四一五頁)

合 計	小 計	一 二 三 四 五 六 御いたはし 御いとほし 御恋し 御親し 御煩はし 御なつかし	小 計	一〇九八七六五四三二一 御後めたし 御物狂はし 御物悲し 御名残惜し 御人わろし 御腹黒し																語 例
				一 二 三 四 五 六 七 八 九 〇 一 二 三 																

のような、同じ尊敬動詞「おぼす」を接頭語「御」を冠した形容詞「御うれし」が修飾した表現も見られる。これらは、共に「后」に対して使われた尊敬表現であるが、前者では形容詞が接頭語「御」を冠せず使われ、後者では「御」を冠した形容詞が使われている。しかし、両者には、尊敬表現としての用法上の相違は認められない。前者のような形容詞の使い方は伝統的な文語文に基づくものであるのに対し、後者のような「御＋形容詞」の形式をとった使い方は、伝統的な文語文では見られなかったものである。そして、後者のような「御＋形容詞」が使われるようになったのは鎌倉時代以降であると言われている。

鎌倉時代における形容詞に接頭語「御」を冠した敬讓表現に関する考察については、夙に山田孝雄氏の『平家物語の語法』において行われている。氏は『延慶本平家物語』について調査、研究され、そこに認められる「御＋形容詞」の用法について考察された。すなわち、『平家物語の語法』において

そは（「御＋形容詞」＝筆者注）、必ず上に名詞を伴ひて、熟合せるものに限られたもの、如し。そのうち最も多きは「心」と熟合せるものなりとす。（復刻版三九八頁）

として、「御心苦シ」「御心スゴシ」「御心ツヨシ」「御心長シ」「御心モトナシ」「御心安シ」「御心弱シ」の諸例を列挙し、更に、「後クラシ」「人ワロシ」「物狂ワシ」にも接頭語「御」を付した例があることを示された。そして、以上を通覧してふと考へたるのみにては、或はその冠せる名詞に「御」を添ふる心にてのものなるが如くに考へらるゝ点もなきにあらねど、熟々考ふるに、なほ、その形容詞全体に冠したるものなるべし。何となれば、最後の「御物狂ハシク」の例の如きは「物」といふ名詞に冠したるものにあらざること明なればなり。されど、いづれも名詞と熟合せるもののみに冠したることは注意を惹く事実にして、恐らくはこの時未だ、現今の話し語の如くに、たゞの形容詞に「御」を冠することは行はれざりしものならむか。（同三九九頁）

と述べられた。

このように、山田孝雄氏によれば、形容詞に接頭語「御」を冠した敬讓表現は鎌倉時代に行われるようになったが、それは名詞を含む複合形容詞に「御」を冠したものであつて、単なる形容詞に直接「御」を冠した使い方はまだ起つていなかったというのである。右の『平家物語の語法』にみられる記述は、形容詞の敬讓表現に関するその後の国語史の通説になつていくのであるが、現在においては、『平家物語』の諸本の研究の進展に伴つて、諸本の系統関係と成立時期がかなり明らかにされ、それを踏まえた新たな調査研究が近藤政美氏⁽²⁾によつて精密になされてゐる。その結果、『平家物語』にあつては、引用表示した〈表1〉・〈表2〉からわかるように、単なる形容詞に「御」を冠した例が語系諸本にのみ見られるというのではなく、増補系諸本にも見られるのであつて、それはこの表現形式が鎌倉時代後期にはすでにあつたからであると言うのである。⁽³⁾

〈表2〉増補系諸本における「御・形容詞」の語別用例数

小 計	語 例																			延慶本	長門本	盛衰記
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八	一九			
	御心安し	御心苦し	御心細し	御心うし	御心弱し	御心長し	御心もとなし	御心つよし	御心すごし	御心広し	御心よし	御後めたし	御後めたなし	御後ぐらし	御物狂はし	御口惜し	御名残惜し	御目ざまし	御人わろし			
	1	4	2	4	1	1	1	1	3	3	1	3		1	1							
	1	8	8	15	5	4	4	4	1	1	1	1	1	1	3	1	1	8	1			

合 計	語 例																			延慶本	長門本	盛衰記
	一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二										
	御いたはし	御いとほし	御恋し	御すさまじ	御しづけし	御なつかし	御かるがろし	御うらめし	御たのもし	御珍し	御むつまじ	御めでたし										
						1																
27												0										
24							1					2										
98							1	1	1	2	1	2	2	2	2	2	2	4	5			

『延慶本平家物語』の調査研究によって述べられた山田孝雄氏の「恐らくはその時未だ、現今の話語の如くに、たゞの形容詞に『御』を冠することは行はれざりしものならむか。」（復刻版『平家物語の語法』三三九頁）という記述は、近藤政美氏の調査研究によって訂されたわけであるが、「御＋単純形容詞」の成立過程についての山田孝雄氏の指摘、すなわち、

（御＋名詞）＋形容詞Ⅱ御＋（名詞＋形容詞）Ⅱ御＋形容詞（『平家物語の語法』二〇一九頁）

は十分に首肯できるところである。そして、特に注意されることは、鎌倉時代末期にすでにわずかではあるが行われていた「御＋単純形容詞」が先の〈表1〉・〈表2〉から窺えるように、『平家物語』にあつては語り系諸本、増補系諸本を問わず、諸本の成立時期が下るにしたがつて徐々にその使用数を増しているということである。

二 御伽草子における接頭語「御」＋形容詞

それでは、鎌倉時代において前述したような成立過程を辿った形容詞に接頭語「御」を冠した敬讓表現は室町時代においてはどのような現れかたをするのであろうか。鎌倉時代の擬古物語の流れを汲むお伽草子を対象として考察してみようと思う。

お伽草子は、平安時代の仮名文学語を中心とした古典語によって書き表されたものである。しかし、なおそこには、当代語としての日常語が混用されていて、一種の雅俗折衷ともいべきものとなっている。そこで、お伽草子の文章に見られる雅俗折衷の一つの姿の反映を、形容詞の敬讓表現をとおして見てみようとするのが本章の意図である。

なお、本章で扱ったお伽草子の作品は日本古典文学大系『御伽草子』（市古貞次校注）に収載されている、いわゆる板本お伽草子二十三編と「福富長者物語」「あきみち」「熊野の御本地のさうし」「三人法師」「秋夜長物語」で

〔表5〕増補系諸本における「御・形容詞」の活用形別の用例数

御・単形容詞 盛衰記 長門本	御・複形容詞 盛衰記 長門本	活用形	
		諸本	未然形
	3 4 5	カラ	形
15 1	48 15 20	連	用形
	1	音便	形の連用
	1	カリ	形の連用
	6 1	終止	形
6 1	13 3 1	連体	形
	1	カル	形の連用
1	3	已然	形
22 2 0	76 22 27	計	
68 50	65 68 74	連用形とその音便形の全体に対する比率 (%)	

うことは、新しい表現形式としての「御+単純形容詞」の用法の自由な拡がりを物語っているものと言えよう。

以下に『御伽草子』の全用例を掲げて、その用法を示すことにしたい。

○御+複合形容詞

（大王）事に触れて御心苦しくおぼしめしけり。（熊野の御

本地のさうし、四一四頁）

（中将殿）「何と御心深くのたまふともこのうちをばいだし申（す）まじ」とて、さまぐ御言の葉をつくし給ふ。（木幡狐、一五二頁）

人は寝れどもまどろまず。笛の音も聞えず、姫君も御心もとなく思ひて、かつぱと起きて、走り廻りて見るに、（梵天国、二八四頁）

めのと承り、「御供申（し）て出づるより、野の末山の奥、火の中水の底までも、共に入り、共に沈み申（す）べし。御心安くおぼしめせ、尼公さま」とぞ申（し）ける。（唐糸さうし、一三三頁）

万寿うけ給はり、「何事もましまさず、御心安かれ」と申（し）ければ、（同右、一三九頁）
（猿源氏）「それは御心やすくおぼしめせ。……」と申（し）ければ、（猿源氏草紙、一七五頁）

あなか殿聞き給ひて「……御心やすくおぼしめせ。さいはひわらはが娘を、その姫君へ御宮仕に参らせ、……」といへば、（のせ猿さうし、二九四頁）

（鉢かづき）さすが父母住みなれ給ふことなれば、御名残惜しくおぼしめし、落つる涙にかきくもり、（鉢かづき、七五頁）

また宰相殿かくばかり、……とあそばしてすでに出でんとし給ふが、さすが御名残惜しく、悲しく思ひ給ひて、（同右、七六頁）

（中将殿）常に住み給ひし所御覧すれば、さまぐの御なごり惜しき御事、書きつくし給ふ御事限りなし。（木幡狐、五九頁）

みかど「……御誕生まではこれに（う）て、見参らせ候はんと思ひ候へども、なか／＼それもいかゞと思ひ候。御なごり惜しく候へども」など、慰め申させ給ひて、（熊野の御本地のさうし、四一九頁）

（后）王子に仰せあるやう「……御なごり惜しく候へども、とても添ひも遂げ申（す）べき身にもあらず。……」と仰せありければ、（同右、四二四頁）

姉が申（す）やう「……又いつの世にか廻りあひ参らせ候べき。返す／＼も御なごり惜しくこそ候へ。……」といひしも果てず、（三人法師、四五三頁）

右の一三の「御+複合形容詞」の用例は、「名残惜し」を除いて、すべて「心」と結合した複合形容詞であつて、すでに山田孝雄氏が『平家物語の語法』において述べられた「そのうち最も多きは『心』と熟合せるものなり」（復刻版三九八頁）と一致するのである。そして、この用法が会話文にも地の文（心中文）にも見られ、連用修飾語として多く尊敬動詞「おぼしめす」をとって用いられていることは古典語を基準にした文語文の尊敬表現を踏襲したものである。しかし、「姫君も御心もとなく思ひて」（梵天国、二八四頁）の例のように、当然尊敬動詞「おぼす」か

「おぼしめす」が使われるところを「思ふ」を使った不完全な尊敬表現がされたり、最後の三例に見えるような下に「候ふ」ととって謙譲語としても用いられているということは、時代の用法を反映したものと言える。活用形の用法も連用形が大部分である中であって、わずかではあるが「御なごり惜しき御事」（木幡狐、五九頁）の連体形の例や「御心安かれ」（唐糸さうし、一三九頁）の命令形の例が見えることは、「御十形容詞」の用法の拡がりとして理解されよう。

こうした近代語化の様相は、次に掲げる「御十単純形容詞」の用法にも現れる。

○御十単純形容詞

大臣、公卿にいつきかしづかれ給はんずる物を、自らが賤しき腹に宿らせおはしましける御身こそ御いたはしけれ。（熊野の御本地のさうし、四二四頁）

御台御君達の御有様を見参らせ候（う）て、あまりに御いたはしく存（じ）候（う）て、（三人法師、四四九頁）

これも尉が為にはあらず、君達の行末を思ひやり候（う）て、御いたはしく候程に、この田を打ち候。（同右、四四九頁）

たゞ今はをまかり通り、かゝる御いたはしき事を見参らせ候も、思へば前世の宿執にてこそ候らん。（同右、四五三頁）

あまりに御いたはしく候ものかな。（同右、四五四頁）

余二御勞敷見奉（り）テ候へば、我ハカチニテ歩（み）候ハン。（秋夜長物語、四七二頁）

『あまりに君の御うらめしき事共御座候程に、さやうに思ひ立ちて候』と申せし程に、（三人法師、四四六頁）
久しく御おとづれも申（し）候はで、心よりほかに候処に、御文給はりうちおきがたく、御うれしくながめ入（り）候。（さいき、三三四頁）

「……」と申させ給へば、后も御心少し慰みて、御うれしくおぼしめしけり。（熊野の御本地のさうし、四一五頁）

「……日本はいづくの人にてましますぞ。御なつかしや」と申（し）けり。（梵天国、二八一頁）

ある時王子高き嶺に登らせ給ひて遊ばせ給ふ程に、麓の地を御覧じつけて、御なつかしくおぼしめしけり。

（熊野の御本地のさうし、四二六頁）

御はづかしながら、大しやうの入道、しんぜいのためには孫の局の妹、ならのないでんとは自らが事なり。

（小敦盛、二二三頁）

右の一二の「御十単純形容詞」の用法を見るに、この用法が会話文にも地の文（心中文）にも見られ、連用修飾語として多く用いられていることは「御十複合形容詞」の場合と同様である。ただし、「御十単純形容詞」の場合は、下に尊敬動詞「おぼしめす」とったものは、共に「熊野の御本地のさうし」に用いられた「御うつくしくおぼしめしけり」（四一五頁）と「御なつかしくおぼしめしけり」（四二六頁）の二例のみであって、他は下に「候ふ」「存（じ）候ふ」「見奉る」「ながめ入（り）候ふ」などを伴った謙譲表現の中に使われている。また、連用形以外の各活用形の用法も「御十複合形容詞」よりも多様で、「御なつかしや」（梵天国、二八一頁）「御はづかしながら」（小敦盛、二二三頁）などの終止形（語幹）の例、「御いたはしき事」（三人法師、四五三頁）「御うらめしき事共」（同、四四六頁）などの連体形の例、さらには「御身こそ御いたはしけれ」（熊野の御本地のさうし、四二四頁）のような已然形の例などが見られる。こうした「御十単純形容詞」の各活用形の用法も古典語の形容詞の各活用形の用法を継承した結果によるものと思われるが、尊敬語のほか謙譲語としても使用されることが多いのは、現在、一般に行われている。

お寒いですね。

お懐しう存じます。

心のおやさしい方です。

いつもお美しくしていらっしゃる。

などといった使用法につながっていくことを思わせ、近代語化の様相を示したものと言うことができよう。

三 接頭語「御」＋形容詞の流れ

国語史上、室町時代は文語と口語とが大きく隔たり、それぞれ別個の道を辿っていくわけであるが、平安時代の仮名文学を中心とする古典語による類型化、固定化した表現を基調として、そこに当代語としての言語を交えもった文章によって書き表されたお伽草子について、中世語法の一つである形容詞に接頭語「御」を冠した敬讓表現がどのように現れるかを具体的用例をもって検討した。その結果、『御伽草子』にあっては、山田孝雄氏が指摘したごとく、鎌倉時代以降、(御＋名詞)＋形容詞→御＋(名詞＋形容詞)→御＋形容詞という段階を経て行われるようになった形容詞の敬讓表現の発達過程の様相を反映していることを理解した。そして、『御伽草子』に見える「御＋単純形容詞」の増加と各活用形の用法の拡大は、同時代の『太平記』⁽⁵⁾にも次のような例が見えるところから、近代語の様相を窺わせるものであると言える。

御痛ハシキニ付テモ、両六波羅加様二城中色メキタルサマヲ見テ(西源院本)太平記・第九卷・五月七日合戦事同六波羅落事

御台ノ御事ハ、又赤橋殿サテモ御座候ハン程ハ何ノ御痛敷事カ候ヘキ(同・第九卷・足利殿上洛事)

其辺ナル道場之聖リ、余リニ御イタハシケレハト持仏堂ニイサナヒ入レ奉レハ(同・第二十卷・梶左中将首事)

又山中ノ御栖居モ余ニ御痛敷ケレハト延文二年之二月ニ、皆賀名生之山中ヨリ出シ奉リ都へ還幸成奉ル(同・第三十三卷・三上皇自吉野御出事)

また、『御伽草子』にあっては、「御＋形容詞」が謙讓表現としても多用されているが、かかる用法も室町時代の日常会話の世界で行われるようになっていたことが、ロドリゲス『日本大文典』(土井忠生訳、五七二―五七三頁)の中に掲げられた次のような用例からも窺えるところから、それが反映したものであろう。

Vonatucaxu zonzuru (お懐しう存ずる)

Voyucaxu zonzuru (おゆかしう存ずる)

Von vrexigu zonji soro (おん嬉しく存じそろ)

結局、『御伽草子』における形容詞の敬語表現は、この文章が平安時代の伝統的な仮名文学語を基本とした、いわゆる擬古物語の文章の流れを汲む文語文によって書くことを志向したものであっても、「擬古物語の文章が当時の言語と相当に隔たりを生じていて、そのままでは容易に享受し難いものとなっていた」⁽⁶⁾ことから、当代語の語法の一つとして使用されたものと思われる。

〔注〕

(1) 日本古典文学大系『御伽草子』(市古貞次校注 昭和三十七年八月 岩波書店刊)に拠る。

(2) 「平家物語における形容詞の敬讓表現について」(金田一春彦・清水 功・近藤政美共編『平家物語総索引』所収、論文・Ⅲ)

(3) 「御」＋単純形容詞による表現形式が鎌倉時代後期にあったとする近藤氏の考えは、平家物語以外の他の作品として指摘された『とはすがたり』(日本古典全書)に、「御おほつかなく」「御うらめしく」「御ゆかしくて」「御いたはしくて」「御いたはしければ」「御わづらはしう」「御わづらはしければ」「御むつまじく」の六語八例が見られること(和田利政『「とはすがたり」の敬語——御Ⅱ形容詞・覚え給ふ——』「国学院雑誌」昭和四十二年十二月号に拠る)や春日和男編『新編国語史概説』中世Ⅰ(山内洋一郎担当)に示された次の用例などから首肯できる。

あまりにひさしくみまいらせ候はねば、まめやかに／＼御恋しく思いまいらせて候にも(「金沢貞顕」一二五五―一三三三書状「金沢文庫古文書」第一輯)

- (4) 近藤政美氏前掲注(2) 論文に拠る。
 (5) 山田 巖「中世の敬語概観」(敬語講座③『中世の敬語』所収)に拠る。
 (6) 峯岸 明「物語の文体」(『講座日本語学8 文体史Ⅱ』所収)四五頁

第六章 御伽草子の形容詞

——その語彙的変遷の過程を踏まえて——

形容詞は、日本語の表現の上で、事物の客観的性質・状態または言語主体の主観的情意を表すものとして、重要な複雑な用法をもっている。この形容詞が、国語史上、異なり語数および用法を整えるようになるのは、平安時代になってからである。とりわけ、この時代には源氏物語を中心とする物語文学の隆盛によって、作中における事柄の属性概念を表す語の使用はもちろんのこと、登場人物の喜怒哀楽など感情・情緒や心理状態などを表現する形容詞が増大した。鎌倉時代以降の形容詞は、平安時代の形容詞を継承する形で使用されていくのであるが(もちろん意味の変遷はみられるにしろ、形態的にはそのまま継承することが少なくない)、鎌倉時代以降の表現対象の多様化、複雑化に伴う位相差の拡大によって、新たに造り出された語も決して少なくない。形容詞の中古から中世への語彙的変遷に関する考察については、夙に寿岳章子氏による巨視点観点からの卓論がある。⁽¹⁾そこでは、語形態を中心に、中古において使用されたであろう形容詞と、中世における形容詞とを比較し、「如何なる語を如何なる原因で否定しあったか、」また、中世になって「新たに必要を生じた形容詞群」はどのようなものであるかを考察された。

形容詞の中古から中世への語彙的変遷が顕著に見られるのは、口語の世界であると言える。特に、語形態の変化や時代を反映した新しい接辞(接頭辞・接尾辞)を付した形容詞の出現は、鎌倉・室町時代の口語・俗語の中に認められる。こうした形容詞の語彙的変遷の一過程を、室町時代の物語草子、お伽草子に目を向けて探ってみるとどう

であろうか。以下、かかる意図のもとに検討した結果を示そうと思う。

すでに言われるように、お伽草子は、文語と口語とが互いに独自の方向を目指して進展する、いわゆる中世という言文二途の時代にあつて、文章に使われる語として固定化した平安時代のことばを基調として書かれた擬古文の流れを汲むものである。従つて、そこに見られる形容詞は、文語として固定化、類型化した古典的な表現を担うものが大部分であるが、中世における口語・俗語の混入も認められる。そこで、本章では、まず、形態的観点からお伽草子にはどのような形容詞が見えるのかを示し、次に特徴的な語の意味・用法について考察する。

なお、調査に使用したテキストは、江戸時代の初期に、大阪の書肆洪川清右衛門によって刊行された「文正草子」以下「酒吞童子」までの二十三編と、「福富長者物語」「あきみち」「熊野の御本地のさうし」「三人法師」「秋夜長物語」の五編とを収めた日本古典文学大系『御伽草子』（市古貞次校注、岩波書店）である。

一 『御伽草子』に見る形容詞

形容詞と言っても、一語としての形容詞の認定は必ずしも単純にはいかない。特に、複合形容詞の取扱い方については、形式的な方法と意味的な方法とが考えられるが、いずれの方法をとるにしろ、認定上の問題は残るであろう。

本章で取扱った一語としての形容詞の認定は、『新潮国語辞典』（改訂版）に見出し語として登載されているものを基準にし、小見出し扱いされているものも考慮に入れて行つた。なお、『岩波古語辞典』も時に参考にした。

この方法によって採集した『御伽草子』の形容詞の異なり語とその使用数（算用数字で示した）は、次のごとくである。

ア アカシ（赤）5 アケヤスシ1 アサシ（浅）20 アサマシ49 アシ（悪）15 アヂキナシ2 アツシ（厚）

2 アツシ（暑）2 アマシ4 アヤシ（怪・賤）10 アヤナシ1 アヤフシ6 アラシ（荒）6 アリガタシ35 アワタタシ1 アヲシ1

イ イシ1 イタシ8 イタハシ30 イツクシ30 イツトナシ3 イトケナシ19 イトドシ1 イトホシ7 イハレナシ1 イヒガタシ2 イブカシ1 イブセシ7 イフハカリナシ7 イマイマシ1 イマメカシ1 イミジ4 イヤシ29 イリガタシ1

ウ ウシ19 ウシロメタシ1 ウスアカシ2 ウスシ3 ウタガハシ2 ウタテシ4 ウチオキガタシ1 ウツクシ27 ウトシ2 ウラメシ12 ウラヤマシ8 ウルサシ1 ウルハシ1 ウレシ73

オ オクフカシ1 オソシ11 オソレガマシ1 オソロシ35 オダシ1 オトナシ6 オナジ35 オビタタシ6 オホシ37 オボシ14 オボツカナシ7 オモシ1 オモシロシ37 オヨビガタシ1 オヨビナシ1

カ カウバシ3 カギリナシ51 カクレナシ14 カシコシ（賢・畏）4 カタシ（堅）2 カタシ（難）3 カタジケナシ20 カダマシ（軒）1 カナシ42 カナヒガタシ2 カヒガヒシ1 カヒナシ8 カロシ3

キ キビシ1

ク クサシ2 クチヲシ9 クハシ11 クマナシ6 クヤシ7 クラシ9 クルシ19 クロシ6

ケ ケシ2 ケタカシ5 ゲニゲニシ1 ケハシ1 ケブタシ1

コ コエヤスシ1 ココロウシ3 ココログルシ4 ココロツヨシ3 ココロナガシ1 ココロナシ3 ココロニクシ1 ココロフカシ2 ココロボソシ8 ココロモトナシ4 ココロヤスシ17 ココロヨシ1 ココロヨ

ワシ2 コザカシ1 コトゴトシ2 コトシゲシ1 コヒシ21

サ サウナシ8 サビシ5 サムシ11 サメヤスシ1 サモシ1 サヤケシ1 サリガタシ1 サルベシ1

シ シカルベシ3 シゲシ8 シゲシゲシ1 シサイナシ5 シタシ5 シヅゴコロナシ2 シルシ1 シロシ

ス スクナシ5 スサマジ5 スズシ5 ステガタシ2 スミガタシ1
 セ セハシ1 セバシ3 ゼヒナシ5 センカタナシ6 センナシ4
 ソ ソコハカトナシ1 ソコヒナシ1 ソラオソロシ1
 タ タカシ23 タグヒナシ8 タケシ3 タダシ3 タツトシ12 タノシ1 タノミナシ1 タノモシ11 タヘ
 ガタシ1 タヤスシ4 タヨリナシ1
 チ チカシ32 チカラナシ14 チヒサシ2
 ツ ツクシガタシ2 ツタナシ3 ツツガナシ2 ツツマシ1 ツメタシ2 ツユケシ2 ツヨシ8 ツラシ2
 ツレナシ7
 ト トコロセシ1 トシ(疾)2 トドメガタシ2 トホシ9 トボシ2 トモシ2
 ナ ナガシ7 ナガナガシ1 ナゴリヲシ13 ナサケシ1 ナサケナシ11 ナサケフカシ2 ナシ⁴⁵⁰ ナツカ
 シ5 ナニゴコロナシ1 ナニトナシ6 ナマゲサシ1 ナマシ1 ナヤマシ1 ナラビナシ8 ナリガタシ
 6 ナンナシ4
 ニ ニアハシ1 ニガシ2 ニガニガシ1 ニクシ7 ニセガタシ1
 ネ ネムシ1
 ノ ノガレガタシ1 ノドケシ1
 ハ ハカナシ13 ハカリガタシ1 ハカリナシ1 ハゲシ6 ハズガマシ2 ハヅカシ21 ハナハダシ1 ハナ
 レガタシ3 ハヤシ12
 ヒ ヒキガタシ1 ヒサシ22 ヒダルシ2 ヒトシ7 ビビシ1 ヒマナシ1 ヒロシ4

フ フカシ83 フシソヒガタシ1 フトシ1 フルシ6
 ホ ホイナシ3 ホシ14 ホソシ2 ホドナシ15
 マ マウシガタシ1 マウシツクシガタシ1 マコトシ3 マサシ1 マタシ1 マタナシ2 マヂカシ2 マ
 ヅシ3 マドシ7
 ミ ミグルシ1 ミジカシ2 ミステガタシ1 ミハナシガタシ1 ミメヨシ5 ミヤウガナシ1
 ム ムツカシ4 ムツマシ1 ムナシ24
 メ メヅラシ19 メデタシ66 メンボクナシ2
 モ モツタイナシ1 モノウシ8 モノクサシ7 モノサビシ2 モノスゴシ1 モノヨワシ2
 ヤ ヤサシ24 ヤスシ(安・易)31 ヤランカタナシ1 ヤルカタナシ3
 ユ ユカシ1 ユキガタシ1 ユクヘナシ1 ユユシ4 ユエナシ1
 ヨ ヨシ49 ヨシナシ5 ヨネンナシ1 ヨブカシ2 ヨワシ1
 ワ ワカシ19 ワキマヘガタシ1 ワスレガタシ4 ワヅラハシ2 ワリナシ6 ワルシ1 ワロシ8
 ヲ ヲカシ5 ヲサナシ18 ヲシ15

以上、二六四語が『御伽草子』から採集した形容詞の異なり語である。これらのうちで、特に目に止まった語に
 ついてふれる。

まず、語形態上目についたものとして、「ナシ」を下位構成要素とする複合語を指摘することができる。この
 「ナシ」を伴った複合語は各時代を通じて広く採集できるものであるが、『御伽草子』にあつては、その内容および
 書かれた時代を考慮して、イハレナシ・イフハカリナシ・カギリナシ・チカラナシ・ミヤウガナシ・モツタイナシ・
 ヨネンナシなどを挙げるができる。これらのうち、カギリナシは各時代を通じて多用される語であるが、『御

伽草子』にあつては、五一例中、文末に立つて終止形終止をしているもの四四例、他は僅かに、連用形五例、連体形一例、已然形一例という形で使用されているにすぎない。そして、活用語の連体形に形式名詞「コト」の付いたものに接した例が二分の一で、他は「ウレシサ」「カナシサ」「喜ビ」「歎キ」「寵愛」「騒ギ」などやそれらに助詞「ハ」の付いたものに接している。意味は、ほとんどが「こと」の程度のはなはだしさを表したものであるが、わずかに、

これを聞き八か国の大名たち、われも／＼と心をつくし、文玉章限りなし。(文正さうし、三六頁)

のように、「もの」(ここでは手紙)の数・量のはなはだ沢山であることを表したものもある。『御伽草子』に見えるカギリナシのこのような文末に偏った用法は、平安時代の物語や説話などのものを継承したものであるが、『御伽草子』のような読み物の中にあつては、より類型的表現をとって使用されたものと思われる。

カギリナシを除いた、右のイハレナシ以下六語は、ともに中世になって新しく現れたと考えられる語である。⁽²⁾以下用例を示し、若干の考察を加える。

ある時、鎌倉殿よりいはいはれなき御命ありて大軍勢を向けられしかども、(あきみち、四〇三頁)

イハレナシは、平安時代にあつては「無謂」という表記をとって、訓点資料や記録資料などで使われ、中世になつて広く文学作品の中にも現われるようになったものと推量される。

どれ／＼も智慧才覚、芸能いふはかりなく、世にならびなく聞えありて、(木幡狐、一四八頁)

あらありがたや、年月願ひ奉るしるしかなくて、三度礼し、良薬をなめ給ふに、あまた味はひいふはかりなし。^(さか)

(さざれいし、二〇九頁)

イフハカリナシは、「イフ」「ハカリ」「ナシ」の複合したものであるが、この「ハカリ」は「限度、際限」という意味をもった名詞であつて、動詞「言フ」のほか「申ス」などの連体形を受けて「無シ」と結合し、中世以降多

く使用されている。『御伽草子』には、右の二例のほか、五例(木幡狐二、秋夜長物語三)のイフハカリナシが見えるが、「申スハカリナシ」も見える。

近ごろあはれなる事こそ、たゞ今見て候へ。大井川へ、十七八の女房の、身を投げ給へるを、あれよ／＼といひつれど、川よりこなたを通る事なれば、あはれさ申(す)はかりなしと、(横笛草紙、三五八頁)

なお、「ハカリ」が活用語の連体形を受けず、「ナシ」と結合して、「際限がない。はかり知れない」意味として使われた例もある。

(文正)横座に直り、盃をとりて申(す)やう、「あるじ関白と申(す)事の候へば、まづ飲み候べし」とて、三度飲みて後に、中将殿に参らせければ、力なくて参りけり。(文正さうし、四八頁)

「此上は力なし。具して参り候へ」とて、小袖一かさね、大口直垂、烏帽子刀と、のへて、(物き太郎、二〇二頁)

知らずは力なし、たま／＼法師の身とはなりて、立寄り陀羅尼の一遍も満てずして通らん事は、邪見なり。(三人法師、四五二頁)

チカラナシは、本来の「力がない」意からその結果として起る「どうしようもない。仕方がない」という意味を表現する複合語となったものである。『御伽草子』には右の三例のほか、一一例(文正さうし六、鉢かつぎ二、唐糸さうし一、酒呑童子一、秋夜長物語二)が存し、いずれも「どうしようもない。仕方がない」という独立した意味で使われている。この複合形容詞チカラナシは平安時代にはほとんど使われることがなかったようで、中世になってから、たとえば、

景親は景能ををかん。とて、あたりの小家をた、け共、あけず、音もせず。力なくして、爰にや捨ましとしけれ共、(『保元物語』中、白河殿攻め落す事、一一二頁)⁽³⁾

のように多く使われるようになってくる。

大宮司殿のたまひけるは、「文太はまことや限りなき長者となり、十善の君にましますとも、われにはいかでまさり給ふべきと、かたじけなくも申(す)とかや。さやうに冥加なきこと、何とてか申(す)ぞ」とのたまへば、(文正さうし、三三頁)

中世には、漢語使用の増大によって、漢語を語の中心要素あるいは構成要素とする「曲(モ)ナイ」「等閑ナイ」「料簡(モ)ナイ」などのような形容詞が多く現れるが、右のミヤウガナシもその一つである。「冥加」は「知らないうちに人が授かる神仏の恩恵」といった意味をもつ仏教語であるから、「冥加ナシ」は「神仏の恩恵を授からないさま」を表すのが原義である。しかし、右の「冥加ナシ」は下位要素の「無シ」が否定の意味を失い接尾辞化し、語義の中心が上位要素の「冥加」のみにおかれて、「恐れ多い。もったいない」といった新しい意味となったものである。

その頼光も末武も、名を聞くだにもはじめにてまして目に見る事はなし。たゞ今仰せをよく聞けば悪逆無道の人と聞く。あらもつたいなやあさましや、さやうの人には似るもいや。(酒吞童子、三七五頁)

此君の御代、五百八十年の御齡をたもち給へと、朝日に向(か)つて餘念なう、のんどを鳴らし拝み申(す)なり。(猫のさうし、三〇二頁)

モツタイナシもヨネンナシも、それぞれ漢語「勿体」「余念」に「ナシ」が接して一語としての意味を表すようになったものであるが、これらも極めて中世的な複合形容詞である。『日本国語大辞典』(小学館)によると、モツタイナシは、①おおげさであるべきさまをはずれて不都合である。不届きである。②おそれ多い。身に過ぎてかたじけない。③使えるものが捨てられたり、働けるものがその能力を発揮しないいたりして、惜しい感じである。の三つの意味を載せているが、『御伽草子』のモツタイナシの例は①の意味で使われている。

次に、語構成の上で目についたものとして、接頭・接尾辞をとった形容詞が指摘できるが、『御伽草子』にあつては、中世において特に顕著に現れるコ——、テ——、——クサイ、——ラシイ、——ワシイ、——クラウシイなどの型の新形容詞はほとんど見えず、この種のものとしては、接尾辞——ガマシの型による「オソレガマシ」が一例あるだけである。

御曹子聞(こし)召(し)、「恐れがましき事なれども、此内裏に大日の兵法のましますよし承はり及び、是まで参りてさふらふ也。……」との給へば、(御曹子島渡、一一四頁)

そして、他は——ガタシ、——ヤスシをとった形容詞が数多く使われている。接辞を付した形容詞には新しい接辞は現れず、大部分が平安時代において盛んに使用されたものであるが、中にはモノ——のように、平安時代に盛んであった接頭辞モノを付した中世的な新しい語、モノクサシ、モノスゴシが見られることは『御伽草子』の表現の時代性を示すものとして注目してよい。なお、モノクサシは七例採集されるが、そのうち六例は「物くさ太郎」の作品の中に現れ、この語が深く素材と関わりをもった形容詞であることを理解するのである。一例ずつ用例を示す。

物くさ太郎是を見て、世間にあれほど物くさき人の、いかにして所知所領をしるらん、あの餅を馬より下りて、取りて伝へん程のことは、いとやすき事、世の中に物くさきもの、われ独(り)と思へば多く有(り)けるよと、(物くさ太郎、一八九頁)

西は秋とうち見えて、四方の梢も紅葉して、……まはぎが露を分けく／＼て、声ものす／＼き鹿の音に、秋とのみこそ知られけれ。(浦島太郎、三四〇頁)

形容詞は、「名詞のような、外的なものに対してそれと表裏関係にたつ密接さはなく、外在の諸現象に対する人間の反応度がかなり濃い品詞」⁽⁴⁾であると言われる。従って、「人間が事柄をどんなに受取ったか、いかに感じたか

等を直接に表出することを使命とする」ことになるのであるが、同じ形容詞であっても、中には比較的「外的なもの」に対してそれと表裏関係にたつ密接さ⁽⁵⁾をもったものともたないものがあることは、形態的区別であるク活用とシク活用とを意味上の区別に結びつけることがあることによっても知ることができる。右に示した「モノクサシ」(懶)について、それが「物くさ太郎」という作品の素材と深く関わって使われた形容詞であると述べたが、この語などは外的なものに対して表裏関係にたつ密接さ、——換言すれば、詞的要素——を他の形容詞よりも強くもつたものと言えよう。このように捉えることによって、次のような「モノクサシ」の名詞としての使われ方も理解できるのではあるまいか。

東山道みちのくの末、信濃国十郡のその内に、……不思議の男一人はんべりける。其名を、物くさ太郎ひぢかすと申(し)候。名を物くさ太郎と申(す)事は、国にならびなき程の物くさしなり。(物くさ太郎、一八七頁)

二 語幹の用法

『御伽草子』から採集した形容詞について、その語形態上、特に目に止まった数語について記述してきた。ここでは、形容詞の用法のうち、語幹の用法を検討する。

古典語における形容詞の語幹の用法には、語幹そのままか、あるいは接尾辞「サ」「ラ」「ケ」「ヂ」「メ」「ミ」などを伴って体言となるもの、語幹を重複させて副詞となるものなどのほか、

- (イ) 語幹＋ヤ (間投助詞)
- (ロ) アナ (感動詞)＋語幹(＋ヤ)
- (ハ) 語幹＋ノ (格助詞)＋体言＋ヤ
- (ニ) 語幹＋ナガラ (接続助詞)

のような「述語を目ざす系統のもの」がある。⁽⁵⁾『御伽草子』には古典語における形容詞の語幹の用法がすべて見られるが、中でも特に目を惹くのは、右の(ロ)を中心とした詠嘆的表現の多さである。桜井光昭氏は『源氏物語』の形容詞語幹の用法について検討されておられるが、⁽⁶⁾以下、右の(イ)(ロ)(ハ)を中心に『御伽草子』の語幹の用例を示して『源氏物語』と比較しつつ考察する。

- (イ) 「語幹＋ヤ」の形式をとったもの 12例 (アリガタシ4 ウタテシ1 オモシロシ3 メデタシ4)

各語一例ずつ用例を示す。

ありがたや三神現れ給ひつつ、六人の者共に「……」との給ひて門の扉を押し開きかき消すやうに失せ給ふ。(酒吞童子、三七九頁)

……か程に捨てはてけるぞと、うたてやと思へば、いと後へひく心地して、(横笛草紙、三五七頁)

「年を経て鬼の岩屋に春の来て、風や誘ひて花を散らさん、おもしろや」と、(酒吞童子、三七七頁)

「めでたや、大宮司殿、嫁にすべきよし仰候」と申(し)ける。(文正さうし、三六頁)

『御伽草子』には形容詞の語幹単独で使った例は見えず、右のように間投助詞「ヤ」を伴って詠嘆的表現をしている。なお、『源氏物語』では、語幹単独で使ったものが四例、助詞「ヤ」を伴って使ったものが一例である。

- (ロ) 「アナ＋語幹(＋ヤ)」の形式をとったもの 46例

(ロ)の形式46例のうち、

- 「アナ＋語幹」2例 (アサマシ1 オソロシ1)

士農工商の(外の)遊民は、一つ故づける芸の侍りてこそ、名を四方にか、やかし、世渡るものにてさふらへ。あなあさまし。(福富長者物語、三八六頁)

おり来る人、「鬼の人くふなる、あな恐ろし」とて、逃げ侍るもあり。(同右、三九三頁)
 「アナ語幹+ヤ」2例(イタシ2)

嫁はおもの重湯とりぐに勧むれど、見だにやらず。あ腰痛やぐ。(福富長者物語、三九二頁)

「アナ+語幹+ヤ」14例(アサマシ5 オソロシ5 クチヲシ1 ケブタシ1 メデタシ2)

各語一例ずつ用例を示す。

物くさ太郎あなあさましや、わが女房取にがしつる事よと思ひて、(物くさ太郎、一九八頁)

……大手をひろげて待つところに、参り下向の人々は是を見て、あな恐ろしや、何を待(ち)てかやうには有(る)らんとて、(同右、一九四頁)

物くさ太郎これを聞(き)、あな口惜しやさて、われと寝じとごさんなれと思ひ、(同右、一九七頁)

あな煙たや、煙はうばにやほれつらん、しつこの煙や、そちへ行けく。(福富長者物語〈絵ノ中ノ詞〉、三九一頁)

文正うれしく思ひ、やがてわが家に帰り、「あなめでたや、大宮司殿の公達を、聳に取るなり。……」との、しりける。(文正さうし、三六頁)

右は、感動詞「アナ」についての語幹の例であるが、「アラ」を使った例も次のように見える。

「アラ+語幹」1例(カタジケナシ1)

頼光は聞(こし)召(し)「御不審は御こと^わはりなり。……われらもともに浮かぶなり。あらかたじけな」と礼すれば、(酒吞童子、三七三頁)

「アラ+語幹+ヤ」26例(アサマシ6 アリガタシ2 イタハシ4 ウラメシ1 ウレシ3 オソロシ1 オモシロシ3

クサシ2 ココロウシ1 コヒシ1 ムツカシ1 モツタイナシ1)

各語一例ずつ用例を示す。

物くさ太郎是を見て、あらあさましやあなたへ行(く)ぞや、(物くさ太郎、一九五頁)

さゞれ石の宮此壺を受け取らせ給ひ、あらありがたや、年月願ひ奉るししかなくて、(さゞれいし、二〇九頁)

あらいたはしや一寸法師は、姫君を先に立て、ぞ出(で)にけり。(一寸法師、三三三頁)

女にて候者、某が袂をひかへ、さめく^めと泣きて申(す)やう、「あらうらめしや、など情なく候ぞや。……」

と、(三人法師、四四〇頁)

鬼どもあまたゐたりしが、御曹子を見付、横手をはたとうち、「あらうれしや、餌食にせん」とて中にとりこめけり。(御曹子島渡、一一一頁)

しゝら申(す)やう、「あら恐ろしや思ひも寄らぬ事なり。……」とて、(蛤の草紙、二二四頁)

舟人是を見て、「あらおもしろや、いかなるものやらん」とて、(鉢かづき、六三頁)

九献にこそ酔ひつらめ、熟柿くさ、もまじりて侍るぞかし。あらくさやぐ。(福富長者物語〈絵ノ中ノ詞〉、三八九頁)

前に立(ち)たる女房は、『あら心憂や』と申(し)て、行方知らず。(三人法師、四四二頁)

若君聞(こし)召(し)、あら父母恋しやと臥し沈み、(小敦盛、一三三頁)

宇都宮聞きて、「……あらむつかしや、とくく寝させ給へ」と申(し)けり。(猿源氏草紙、一八四頁)

あらもつたいなやあさましや、さやうの人には似るもいや。(酒吞童子、三七五頁)

感動詞に形容詞語幹(+ヤ)がついて、詠嘆的文を中止(終止)する用法は、『御伽草子』には右に示したごとく頻出する。こうした詠嘆的表現は平安時代の『源氏物語』などに数多く見られるが、ただ『源氏物語』では間投助詞「ヤ」を伴わない「アナ+語幹」の形式による表現が六二例(イデ、アナ+語幹を含む)、間投助詞「ヤ」を伴つ

た「アナ＋語幹＋ヤ」の形式によるものが三九例（イデ、アナ＋語幹＋ヤを含む）というように、間投助詞「ヤ」を伴った形式は、伴わないものよりもずっと少ない。これは、ちょうど『御伽草子』とは逆の使われ方であって、『御伽草子』では間投助詞「ヤ」を伴った「感動詞＋語幹」が「ヤ」を伴わない形式に対して、四二例対四例というように圧倒的に多いのである。いずれにしろ、かかる現象は、『御伽草子』の文章が平安時代の文章表現を規範として書かれたものであって、それ故、詠嘆表現のような特定の表現に対しては、「アナ（アラ）＋語幹＋ヤ」の形式を常套的に使用するという意識があったことを理解するのである。また一方においては、『御伽草子』が古典的表現を基調とした文章を目指したものとはいえ、そこに当代語としての口語・俗語の混入も免れ得なかったろうことを示すものとして、感動詞「アナ」に対する当代語「アラ」「ア」の使用を指摘することができる。

『御伽草子』における感動詞「アナ」と「アラ」との混用は、「アラ」が当代語として頻用されるようになり、やがて古典語「アナ」に取って替わる過渡的様相を示しているものとして捉えられる⁷⁾。しかし、『御伽草子』の場合はさらに、「福富長者物語」の作品の結末部に「昔はまつかう」という表現がなされていることから推量されるように、中には口承性を強くとどめた作品の存在も考えられるところから、そこに「アナ」と「アラ」との発音上の類似による混同が起り、その結果の反映であろうとも思われるのである。

いずれにしろ、『御伽草子』において、右に見てきたごとく「感動詞＋形容詞語幹＋ヤ」の形式をとった詠嘆的表現が多く採集できるということは、この形式による表現が教養の比較的低いお伽草子のような読者に、作品の登場人物の強い感情や情意を直接的かつ簡単明瞭に理解されるのに極めて適確なものであったからであろう。

なお、(ハ)の「語幹＋ノ（格助詞）＋体言＋ヤ」の形式をとった詠嘆的表現の用例も『御伽草子』から二四例採集できるが、その内訳は次のごとくである。

「語幹＋ノ＋体言（および相当句）＋ヤ（カナ、ヤナ）」 12例（ウツクシ² ウラメシ¹ ウラヤマシ² ウレシ¹ オソ

ロシ¹ オビタタシ¹ タノモシ¹ ナサケナシ³）

全用例を示す。

うつくしの中將殿や、（木幡狐、一五〇頁）

うつくしの御手やと、（のせ猿さうし、二九五頁）

イツハリノアル世ヲ知ラデタノミケン我心サエ恨（メシ）ノ身ヤ（秋夜長物語、四七六頁）

誠にうらやましのしゝらの心や。（蛤の草紙、二一九頁）

うらやましの人々や（酒吞童子、三八二頁）

さてもうれしの仰せ哉（酒吞童子、三七五頁）

恐しの事や、（蛤の草紙、二二五頁）

「……おびた、しのことや」といひければ、（物くさ太郎、一九一頁）

頼もしの人のことばやな。（のせ猿さうし、二九二頁）

なさけなの事どもや、（唐糸さうし、一二四頁）

情なの有様や、（横笛草紙、三五六頁）

『……情なの父御や』と申（し）、（三人法師、四五四頁）

「アナ＋語幹＋ノ＋体言（および相当句）＋ヤ（カナ）」 4例（ウラヤマシ¹ オソロシ¹ ヤサシ²）

全用例を示す。

あなうらやましの螢火かな、（猿源氏草紙、一七八頁）

あな恐ろしのもの、心や。（物くさ太郎、二〇〇頁）

あなやさしのもの、心や（同右、二〇二頁）

あなやさしの男の心やとおぼしめして、(同右、二〇三頁)

「アラ+語幹+ノ+体言(および相当句)+ヤ(カナ)」8例(アサマシ1 イツクシ1 ウタテシ1 ウレシ1 オモシロシ1 ムツカシ2 ヤサシ1)

全用例を示す。

あらあさましの女の心やと思ひとり、(三人法師、四四四頁)

あらいつくしの女房や、(さいき、三三四頁)

「あらうたての殿や」とて、(物くさ太郎、一八九頁)

あらうれしの御ことばぞや。(小町草紙、九三頁)

あらおもしろの谷々や、(浜出草紙、三〇七頁)

あらむつかしのことを仰せ候(ふ)ものかな。(鉢かづき、八一頁)

あらむつかしのとがめごとや。(猿源氏草紙、一八五頁)

あらやさしのくわんきよが心ざしや。(御曹子島渡、一一四頁)

この形容詞の語幹をもとにした(イ)の形式による表現は『源氏物語』に八四例見られるが、本章で調査対象として扱った『御伽草子』の分量と『源氏物語』とのそれとを対比してみた場合、『御伽草子』から採集された二四例は極めて高い数値であると認められる。先の(イ)(ロ)の形式による詠嘆表現の数値とこの(ハ)の形式による数値とを合わせてみると、いかに『御伽草子』には形容詞の語幹を基にした詠嘆的表現が多くなされているかが諒解されよう。そして、語幹に立つ形容詞はそれぞれ列挙したごとく、すべて情意を表す形容詞であって、しかも会話文か心話文かのどちらかに集中して使われ、地の文での用例を見ないのである。(ただし、「浜出草紙」に見られる「あらおもしろの谷々や」は、この作品が幸若舞の台本をもとにしてお伽草子の祝儀物に作られたものであるということから、会話・心話文

とも地の文とも判断しかねる)。

お伽草子は長編的内容をもった短編であると言われるところから、その叙述は筋本位、興味本位⁽⁹⁾のものにとどまっている。従って、鎌倉時代までの代表的な物語文学と違って、人間の心理を細かに描写するのではなく、驚き・嘆き・喜び・悲しみなどの強い感情を直接的に表すものとして、形容詞の語幹を基にした特定の表現形式を使うことによって、その叙述は全うされたのである。『御伽草子』における形容詞の語幹を基にした詠嘆的表現の頻出はかかる事情によるものと解される。

『御伽草子』の形容詞について、中古から中世への語彙的変遷の過程を踏まえ、語形態上どのような特徴的な形容詞が採集できるか、また、用法上の特徴として捉えられる形容詞の語幹の用法について、お伽草子の表現性と結びつけながら考察した。その結果、明らかにし得たことは次のごとくである。

(1) 語形態的には、複合語の中に当代的特徴をもった形容詞が存する。

(2) 接頭・接尾辞を付した形容詞には、特に中世語的特徴を表すものが存するが、『御伽草子』にはそのような形容詞がほとんど採集できず、「モノクサシ」「モノスゴシ」のような平安時代に盛んに用いられた接頭辞「モノ」を付した中世的な新しい語が採集できる。

(3) 用法上の特徴として、語幹を基にした詠嘆的表現が多く行われていることを指摘することができる。この種の詠嘆的表現は、古典的表現を基調としたお伽草子の常套的表現形式であって、喜怒哀楽の感情を直接表している。

お伽草子は、長短さまざまな文章によって書かれ、その内容も、(一)公家に関するもの、(二)僧侶・宗教に関するもの、(三)武家に関するもの、(四)庶民に関するもの、(五)外国に関するもの、(六)異類に関するもの、⁽¹⁰⁾など極めて多岐に亘っており、まちまちの様相を呈している。しかし、そこに使用されている語は、右にみてきた形容詞語彙の実態からも窺えるように、基本的には伝統的な古典語を常に意識下に置いて使用するという姿勢によっているものであるこ

とが認められる。けれども、室町時代という中世末期の、文語（書きことば）と口語（話しことば）との隔たりが顕著になっていく時代にあつて、どんなに古典語に規範を求めて書こうとも、純粹に伝統的な古典語を使いこなすということは、不可能であつたに違いない。従つて、そこに当代語としての口語・俗語が混在することは、むしろ当然の成行きであつたろう。

このように受け止めることによって、本章で試みた形容詞の中古から中世への語彙的変遷の過程を踏まえたお伽草子の考察も意義をもってくるものと考えるのである。

〔注〕

- (1) 「形容詞の語彙的変遷——中古から中世へ——」（『国語学』第二二集、後に『室町時代語の表現』所収）
- (2) 中世になって新しく現れたとする判断は、『古典対照語表』（宮島達夫編）『平家物語総索引』（金田一春彦・清水功・近藤政美編）『保元物語総索引』『平治物語総索引』（坂詰力治・見野久幸編）『宇治拾遺物語総索引』（境田四郎監修）および寿岳氏前掲注（1）論文などを基に行つた。
- (3) 日本古典文学大系『保元物語・平治物語』に拠る。
- (4) 寿岳氏前掲注（1）論文（『室町時代語の表現』二二三頁）
- (5) 桜井光昭「形容詞の諸問題」（『研究資料日本文法』③）用言編（二）形容詞・形容動詞）に拠る。
- (6) 前掲注（5）参照。以下、『源氏物語』の用例数は桜井氏の調査に基づく。
- (7) 「アナ」と「アラ」に関しては、感動詞の史的変遷の観点から、品詞別日本文法講座6『接続詞・感動詞』（『感動詞の変遷』森田良行）一八七—一八九頁、講座国語史3『語彙史』（『近代の語彙1』佐藤喜代治）一六九—一七二頁に詳説されている。
- (8) 日本古典文学全集『御伽草子集』（大島建彦校注・訳）三七九頁頭注。
- (9) 日本古典文学大系『御伽草子』（市古貞次校注）解説一七頁。
- (10) 前掲注（9）解説に拠る。

第七章 御伽草子の美的表現

——「うつくし」「いつくし」をめぐる——

緒言

『御伽草子』⁽¹⁾には、たとえば、

大納言殿北の方御覧じて、かゝるうつくしき女房も、世にはありけるよ、いかならぬ宮腹の姫君といふとも、かゝる姿は有るまじ。

（木幡狐、一五五頁）

のような文章表現の中に、「うつくし」が使われ、また、

文正が内の者ども多けれ共、やまがつなれば聞（き）知らず。女房たちのその中に、都人にてありけるが、情も深く、読み書き和歌の道にくらからず、みめかたちいつくしき人として、姫君の介錯につけたりしが、此商人をうち見つつ、姿有様にいたるまで、ただ人ならぬふぜいなり。

（文正さうし、四六頁）

のような文章表現には、「いつくし」が使われている。右の「うつくし」「いつくし」は、それぞれ「人の容姿の美しさ」を表したもので、両語はほとんど同じ意味・用法をもったものとして認められる。

語彙史上、「うつくし」は、元来、親子・夫婦の間において、互いに「いとしい」「かわいい」と思い、人に対する愛情を表す語であつた。それが平安時代には、「かわいらしい」「あいくるしい」という、対象の可憐さから受け

る美的感情を表す語となった。一方、「いつくし」は、神や天皇の靈威や威光が盛んであるさまを表すのが原義であった。平安時代になると、その対象が神仏や天皇から貴人に対していうようになり、対象のもつ莊嚴さや端正さから受ける美的感情を表す語となった。この両語が、「うつくし」「いつくし」という語形上の類似による連想などもはたらい、その語義と結びつき、それぞれ本来の意味を保持しつつ、互いに欠いている一方の美的感情を表す意味を補足する（すなわち、混同する）ようになるのは中世以降であるといわれる。⁽²⁾従って、先の「うつくし」「いつくし」の例は、時代を反映したいわゆる混同例とみることができる。

本章は、こうした「うつくし」と「いつくし」とが互いに混同する用法を有するようになった中世後期の一資料『御伽草子』を取りあげ、そこで使われている両語が、対象のどのような状態によって起こされた美的感情の表現を担っているかを検討し、両語の時代性を確認すると同時に、鎌倉時代の擬古的物語の流れを汲む『御伽草子』に見られる美的表現の類型性の一端についても触れてみようとするものである。

一 「うつくし」「いつくし」の使用状況

まず、『御伽草子』に見られる「うつくし」「いつくし」の使用状況について調査した結果を示すと、表のごとくである。⁽³⁾

調査した『御伽草子』は、江戸時代初期に、大坂の書肆渋川清右衛門が刊行した、文正さうし・鉢かづき・小町草紙・御曹子島渡・唐糸さうし・木幡狐・七草草紙・猿源氏草紙・物くさ太郎・さざれいし・蛤の草紙・小敦盛・二十四孝・梵天国・のせ猿さうし・猫のさうし・浜出草紙・和泉式部・一寸法師・さいき・浦島太郎・横笛草紙・酒吞童子のいわゆる「御伽草紙二十三篇」と、「福富長者物語」「あきみち」「熊野の御本地のさうし」「三人法師」「秋夜長物語」の五篇を加えた計二十八篇である。

調査した作品二十八篇のうち、「うつくし」は二十七例、「いつくし」は三十一例それぞれ使われており、両者の使用はほぼ伯仲している。両語の使用状況を各作品別に見てみる（次頁表参照）と、二十八篇のうち、「うつくし」および「いつくし」（ただし、接尾辞「さ」を付した名詞形と語幹の用法をもった例も含む）が使われているのは十七篇である。そのうち、

(A)「うつくし」「いつくし」両者が使われている作品……鉢かづき・猿源氏草紙・蛤草紙・さいき・浦島太郎・

熊野御本地のさうし の六篇

(B)「うつくし」のみ使われている作品……文正さうし・小町草紙・物くさ太郎・小敦盛・二十四孝・一寸法師・

横笛草紙 の七篇

(C)「いつくし」のみ使われている作品……木幡狐・のせ猿さうし・あきみち・三人法師 の四篇

である。調査した『御伽草子』全体から見た場合、「うつくし」「いつくし」の使われ方は、二十七例対三十一例というようにほぼ伯仲しており、その使われ方が一見、混同しているような印象を与える。しかし、各作品ごとに両語の使用状況を見ると、右の(A)(B)(C)のごとく、作品によって、両語の使用にかなりの偏りがあることがわかる。『御伽草子』二十八篇に見える「うつくし」「いつくし」についてのこのような偏用は、どのように理解したらよいのであろうか。「うつくし」「いつくし」のどちらかが、一作品中に一例のみしか使われていない「小町草紙」「物くさ太郎」「二十四孝」「横笛草紙」「あきみち」などは別として、二例以上使われている場合には、特に両語の偏用が問題になってくるのである。

『御伽草子』に見られる「うつくし」「いつくし」の各作品における偏用の理由については、次の二つのことが考えられる。すなわち、

一つは、「うつくし」と「いつくし」とが、それぞれ別の美的表現を担う意味・用法をもった語として書き手

作 品	う つ く し				い つ く し			
	連用形	連体形	その他	計	連用形	連体形	その他	計
正 崎 町 渡 糸 狐 草 氏 郎 盛 孝 国 猿 出 部 師 郎 笛 子 者 ち 地 師 長								
文 鉢 小 御 唐 木 七 猿 物 さ	1	1		2	7 2	6 1 1	1	14 3 1
か づ 子 島 幡 源 太 郎 し								
小 曹 子 島 幡 源 太 郎 し								
唐 木 七 猿 物 さ	3	4	1	8				
木 七 猿 物 さ	1			1	1			1
物 さ		1		1				
さ		1		1		1 3 1		1 3 1
蛤 敦 四 天 せ 猫								
小 二 梵 の								
の		3	1	4				
猫								
浜 和 一 さ 浦 横 酒 福 あ 熊 野 三 秋								
和 一 さ 浦 横 酒 福 あ 熊 野 三 秋								
一 さ 浦 横 酒 福 あ 熊 野 三 秋	2	1 1	1	4 1		2 1	1	2 1 1 1
さ 浦 横 酒 福 あ 熊 野 三 秋					1			
浦 横 酒 福 あ 熊 野 三 秋								
横 酒 福 あ 熊 野 三 秋								
酒 福 あ 熊 野 三 秋								
福 あ 熊 野 三 秋								
あ 熊 野 三 秋								
熊 野 三 秋	2	1		1	1	1		2
野 三 秋	2			2				
三 秋	2			2				
秋								
計	11	13	3	27	12	17	2	31

(作者)に意識され使い分けられているということ。二つは、「うつくし」と「いつくし」とが、その形態的類似による連想作用によって語義が結びつき、ほとんど同義語として意識され、混同して使われているということ、である。

二「うつくし」の意味・用法

そこで次に、先に表示した「うつくし」および「いつくし」を使用している各作品の用例を検討し、「うつくし」「いつくし」両語がどのような意味・用法をもった語として使われているかを明らかにすることによって、右の二つの理由づけについて確認しようと思う。

『御伽草子』に見える「うつくし」の全用例二十七の活用形別内訳は、

連用形 十一例 連体形 十三例

その他(語幹と接尾辞「さ」を付したもの) 三例

である。他の活用形の用例は皆無であるが、これは「いつくし」についても言えることであって、形容詞の活用形別使用状況の偏在は形容詞全体から論ぜられるべき問題である。

以下、全二十七例を列挙して、「うつくし」の語義・用法を検討する。⁽⁴⁾

①三人の兄嫁御前たちをも、はじめは美しくおぼしめしけれども、此姫君にあはすれば、仏の御前に悪魔外道が居たるに、ことならず。

(鉢かづき、七九頁)

②「弟姫ハ」いづれよりも殊にすぐれて、容顔美麗にうつくしく、心ざまならびなく侍りて、

(木幡狐、一四八頁)

③姫君きこしめし、「いかにとゞめ給ふとも、われ思ふ子細ありて、思ひたちぬる事なれば、いかにとゞめ給ふとも、とまるべきにてあらず」とて、うつくしく化けなしてこそ出でにけり。

(同、一五一頁)

④「若君ハ」かくて日にそへて、光さし給ふ心地してうつくしく生い立ち給ふ。

(同、一五四頁)

⑤其時亭主申(す)やう、「……中略……」とて、三十人ばかり出(で)た、せて、南阿彌に見せ候へば、南阿彌これを見て、いづれも美しく候へども、其内を十人えり出し申(す)所に、

(猿源氏草紙、一七八頁)

⑥年の程二十ばかりの女房の、みめかたち世にすぐれて、……中略……桂のまゆずみ青ふして、丹菓のくちびる美しくして、ほうたんのかさねをにことならず、

(さいき、三二七頁)

⑦さるほどに程なく迎ひは京へ上り著きけり。その間に美しく御所を建て、待たれけり。

(同、三三四頁)

⑧「大王ハ王子ヲ」さながら吉祥天女もかくやと疑ふ程、美しくおぼしめしけり。(熊野の御本地のさうし、四二九頁)

⑨又はいづれの大臣、公卿の御子やらん、それもこれ程美しくはおはせじ。

(同、四二九頁)

⑩御年はいまだ二十にはならせ給ひ候はじと、見えさせ給ひしが、練貫の肌小袖に、紅花緑葉の一襲に、紅の袴をふみ、たけなる髪をゆりかけて、何と申(す)はかりなく、美しく御わたり候ひしが、物にたとへば、楊貴妃、漢の李夫人、わが朝の衣通姫、小野小町、染殿の後、女御更衣と申(す)とも、いかでかにはまさるべき。

(三人法師、四三五頁)

⑪「同ジ程ノ女房タチ」たゞ一目見申せし事なれば、いづれか尾上殿にて御わたり候やらん、いづれもく美しく御入(り)候程に、迷惑仕り候ところに、

(同、四三八頁)

右の「うつくし」十一例は、連用形として使われたものである。このうち、②と④を除いた他の九例は、いずれも対象を「美麗」なものとして受け止め、「美しい」「きれい」といった意味を表しているものと解される。「うつくし」の対象を人全体(の容姿)に向けたものは①③⑤⑧⑨⑩⑪の諸例であるが、これらはいずれも対象の視覚的な直接的な美麗さを表現したもので、⑥の「丹菓のくちびる美しくて」のように、具体的に人のどの部分がどの

ように「美しい」「きれい」なのかを示すということが極めて少ない。⑦は、「うつくし」の対象を人間以外のもの(ここでは建物)に向けた例であり、②と④は、姫や姫君の愛らしい、かわいらしい状態を「うつくし」と表現しており、「うつくし」の平安時代における一般的な意味、すなわち、幼少の者、小さいものなどに対する愛情、可憐美を示している。なお、②の表現は、「容顔美麗にうつくしく」というように、美的表現の語を並列してなされているが、『御伽草子』には、美的表現の語はもちろんのこと、広く形容語を並列して用いるということが極めて少ないといえる。

⑫御曹子は御覧じて、河内国は狭しといへども、いかほどの人をも見てあれども、かほどにも弱く、愛敬世にすぐれ、美しき人(鉢かづき)はいまだ見ず、

(鉢かづき、六七頁)

⑬中将殿もめのとも御よろこびにて、その年も過ぎあらたま二月もたち、三月と申(す)には、さもうつくしき若君をもうけ給ふ。

(木幡狐、一五四頁)

⑭その身はいかやうの人にてあられ、中将殿の御覧ぜん人、その上うつくしき若君も出来させ給へば、

(同、一五四頁)

⑮大納言北の方御覧じて、かゝるうつくしき女房も、世にはありけるよ、

(同、一五五頁)

⑯ある時中将殿の御めのと、中務のもとよりとて、世にたぐひなき一物とてうつくしき犬を進上いたしけり、

(同、一五五頁)

⑰七日湯風呂に入(れ)ければ、七日と申(す)には、うつくしき玉の如くに成(り)にけり。

(物くさ太郎、二〇三頁)

⑱釣竿も心のありけるにや、すは魚こそかゝりたるらめと思ひ、ひそかに釣り上げて見れば、美しき蛤ひとつ釣り上げたり。

(蛤の草紙、二二三頁)

①9 是はいかなる人のすみかやらんと、立ち寄り、霞の絶え間よりながめ給へば、美しき姫君、琴ひきて居給へり。
(のせ猿さうし、二九〇頁)

②0 御示現あらたにかうふらせ給ひ、いできさせおはします姫にてましますば、美しきことは断なり。
(理)

②1 父母吉日を選び、御見参有(り)て見給ふに、世にかゝる美しき姫君も有(る)かや、
(同、二九三頁)

②2 かほど美しき人をさへ、いひ出す事もなし、
(同、二九六頁)

②3 「浦島太郎」怪しみやすらひ見れば、美しき女房只ひとり波にゆられて、次第に太郎が立ちたる所へ著きにけり、
(浦島太郎、三三八頁)

②4 北の方の悲しさは、その年の末よりたゞもなくして、美しき若を一人まうけさせ給へども、(あきみち、四〇〇頁)

右の十三例は「うつくし」の連体形の用例である。「うつくし」が連体修飾語として係る対象は、右のごとく、姫・若(君)・女房などといった女子供のほか、①6や①8に見られるように、人間以外の動物(犬・蛤)にも及んでいる。そして愛すべき可憐な美を表している。①7は「玉」という具体的な物を修飾し、人の美しさの譬えとして、「玉のように美しい」と表現している。②0の「美しきことは断(理)」なりは、形式名詞「こと」を修飾することによって、姫という対象に対する美的感情に状態性を与えた表現となっている。この「うつくし」の体言化は、②5あらいつくしの女房や、李夫人楊貴妃、衣通姫、小野小町と聞き伝へしも、是にはいかでまざるべき、われさへ見れば、あまりの美しさに、たちどもさらにおぼえず、かほど美しき人をさへ、いひ出す事もなし、

の「うつくし」と共通する用法をもったものであるが、右の「美しさ」は、「あまりの」の被修飾語となつて、

美しさの程度を表している。なお、「うつくしき」の係る対象をどのように美しいのかといった表現は、①7の「玉のように」のほかは見られず、形容詞や形容動詞の連用形を並列した「美麗にうつくしき」といった例は一例もない。

②6 折ふしかのきしゆ御前、稲荷の山より見おろして、うつくしの中将殿や、われ人間と生れなば、かゝる人にこそ逢ひ馴るべきに、
(木幡狐、一五〇頁)

②7 「こけまる殿」うれしくてふと起き上り、三度いたゞき見て、美しの御手やと、胸にあて顔にあて、
(のせ猿さうし、二九五頁)

右の二例は、「うつくし」の語幹(終止形)が格助詞「の」をとった連体修飾語の用法である。②6は、ふと目にした「中将殿」という成人男子の容姿の美しさを表したものであり、②7は、「御手」という人、の造り出したもの(筆跡)から受ける美しさを表している。こうした「うつくし」の使われ方は、「うつくし」の表す美の対象の広がり示しているものであるが、こうした用法は中世になつてから顕著に認められるものである。

ところで、「うつくし」の語誌については、夙に、宮地敦子氏のすぐれた論考がある⁽⁶⁾。それによると、「うつくし」は、上代では「自分が優位の立場から抱く肉親のないし肉体的な愛情をあらわすのが中心的な意味であつて、それは現代語の「いとしい」とか「かわいい」とかに近い意味をもった、いわゆる「愛」の感情を表す語であつた。従つて、「その対象は、夫婦・子・孫それに母親であつて、「親といつても父親に対して使つた例がない」という。中古では、歌では上代のように「いとしい」の意が忠実に引きつがれ、散文では「自分の子・孫などのほか、他人の子供にも猫にもというようにその対象は拡大しつつ」、「いとしい・かわいい」の意味はそのまま受けつがれたが、「その用法が拡大し、他人にも、また、人以外の物にさえも使うようになり、その対象に愛情をもちながら賞美し、さらには対象そのものにも美の属性をみとめるという、情意性と状態性とを兼ねた語になつた。すなわち、現代

語の「かわいらしい」「あいくるしい」などに近い意味にあたる、いわゆる「愛と美」の感情を表すものとなった。しかし、『擁護者的立場』から、幼い者・弱いものに向かうという条件は失われぬ」で保たれているという。そして、中世のある時期から、「人以外の自然美にも人工美にも、また、匂いやかな美にもきらびやかな美にも、また、目の前の小さなものの美ばかりでなく、時には遠くの大きなものの美にも 使われるようになり、「美一般をあらわし得るようになった」という。

右に要約して示した宮地氏の語誌に照らしてみると、先の『御伽草子』における「うつくし」の用法は、確かに中世以降の時代を担ったものであるといえる。しかし、女子供に対して「うつくし」を多く使っていること、「玉」など「手に取って愛撫するに足る小さいもの」を表していること、「犬」とか「蛤」など人以外のものにも「うつくし」を使っていることなど、「うつくし」の美の属性を表す適用範囲が拡大しても、そこにはなお「うつくし」の本来の条件、すなわち、「幼い者・弱いものに向かうという条件」は保持されているとみることができる。

三 「うつくし」の意味・用法

一方、「うつくし」は『御伽草子』においてどのように使われているのであろうか。

『御伽草子』に見える「うつくし」は、全部で三十一例である。その活用形別内訳は、

連用形 十二例 連体形 十七例

その他（語幹と接尾辞「さ」を付したもの） 二例

である。以下、三十一例の全用例を掲げて、その意味・用法を検討する。

- ①その時文正げにもと思ひ……中略……見るに姉御前よりも、いつくしくありければ、又乳母介錯までも、みめかたちよきを揃へて付けにけり。
(文正さうし、三五頁)

- ②都にてだにもまぎれなく、いつくしくましますに、東の奥にては、いよ／＼まがふ方も有(る)べからずと、案じめぐらすに、
(同、四一頁)

- ③中将殿は十八、式部太夫二十五、いづれも若殿上にて、いつくしかりける御姿にて、御身をやつし下り給へ共、まがふべき方もなし。
(同、四二頁)

- ④御身をやつし給へども、優に気高く、いつくしく、いかなる風のたよりもがなとおぼしめしける。
(同、五一頁)

- ⑤御冠、束帯の姿にて、かねつけ眉つくり給へば、心もことばも及ばず、いつくしく見え給ふなり。
(同、五三頁)

- ⑥御車どもをば金銀にて飾り、女房たちをいつくしく飾り、都へ上り給へば、
(同、五五頁)

- ⑦みかど御覧ずれば、姉君よりもいつくしくおぼしめし、御寵愛限りなし。
(同、五六頁)

- ⑧この鉢かづきの風情を、ものによく／＼譬ふれば、……中略……籬の内の撫子の、露重げに物弱く、はづかしげにてそばみたる、顔の愛敬のいつくしく、楊貴妃李夫人も、いかでかこれにまさるべきと不思議におぼしめしける。
(鉢かづき、七〇頁)

- ⑨ものによく／＼譬ふれば、……中略……御かほばせ気高くいつくしく、御姿は春のはじめの糸桜の、露のひまよりもほの見えて、
(同、七八頁)

- ⑩さしもいつくしかりし、翡翠のかんざし、嬋娟たる鬢、桂のまゆずみ、柔和の姿引(き)かへて、
(同、七八頁)

- ⑪そのかたち、容顔美麗にしていつくしく、霞に匂ふ春の花、
(猿源氏草紙、一八三頁)

(横笛草紙、三四六頁)

- ⑫御姿、髪の御かゝりをはじめて、御姿なのめならずいつくしくおはしましけり。

(熊野の御本地のさうし、四一二頁)

右の十二例はいずれも「いづくし」の連用形として用いられたものである。①②③⑤⑥⑦⑩⑫は、ほとんど「うつくし」のもつ意味と同じく「人の心を強く引きつける美しさ」を表現するのに使われているもので、具体的にどこがどのように「いづくし」状態にあるのかを表している例は、わずかに⑧の「顔の愛敬のいづくしく」、⑨の「御顔ばせ気高くうつくしく」、⑪の「容顔美麗にしていづくしく」の三例ぐらいで、他は対象となる人や物の姿・形全体から受ける美的感情を表している。これらの用例には、「いづくし」の原義である「神や天皇の靈威・威光が勢い盛んで、鋭く、激しい」意を表したものは認められず、また、平安時代以降の「威厳があり、莊嚴である」意や「気性や容姿が神の子のように凜とした気品にあふれて人並と異なっている」という意味をそのままたせて使用することはない。従って、「いづくし」が後者のような「凜とした気品にあふれて人並と異なった」意を表すのに使われる場合には、「いづくし」単独では使われず、④の「優に気高くいづくし」、⑨の「気高くいづくしく」、⑪の「美麗にしていづくしく」などといったように、「いづくし」の上に、「端正で、上品であるさま」を直接表す形容語が並列することであった。

⑬九月の苦しみ十月の末には、産の紐をときたる。三十二相たらひたる、いづくしき姫にありける。(文正さうし、三四頁)

⑭女房たちのその中に、都にてありけるが、情も深く、読み書き和歌の道にかららず、みめかたちいづくしき人として、姫君の介錯につけたりしが、

⑮せんだんびつ持ちたる男、大事のはんざうだらひに足を入(れ)て、一人は洗ひ、今一人は、いづくしき絹にて、のごひ候惜しさよ。

⑯其後いづくしき物ども、箱の中に入れて、姫君の方へとつかはされける、

⑰此年月、多くの文を見つれども、これほどいづくしきを見ざりける。(同、四九頁)

⑱かねてより用意してをき給へば、劣らぬいづくしきものどもを、贈り給ひける、(同、五一頁)

⑲世にいつくしき人なれど、縁なき方へは、目もゆかず、御身に縁があればこそ、かくまで深く思はるれ。

⑳……前略……と詠じ給へば、いづくともなくみめかたち、いづくしき女房出(で)て、(鉢かづき、六九頁)

㉑是ほどいつくしき女房の、姿を見れば春の花、かたちを見れば秋の月、(小町草紙、一〇〇頁)

㉒さて月日を送り給ふ程に、御産の紐をぞとき給ふ。見ればいづくしき若君にてまします也。(小敦盛、二二四頁)

㉓さがり松にて幼きもの、泣く声をきこしめして、立ち寄り御覧ずれば、いづくしき若君にてましますなり。(蛤の草紙、二二四頁)

㉔……前略……蘭麝のにほひ、容顔美麗にして、心も心ならず、いづくしき女房の参り給ひて、(同、二三〇頁)

㉕されば老菜子七十にして、身にいつくしき衣を着て幼き者のかたちなり。(二十四孝、二四八頁)

㉖やがて十月と申(す)に、いづくしき男子をまうけけり。(一寸法師、三一九頁)

㉗すなわち参内つかまつり、大王御覧じて、まことにいづくしき童にて侍る。(同、三二五頁)

㉘左の脇よりいつくしき箱を一つ取り出し、(浦島太郎、三四二頁)

㉙ある嶺の極めて高く聳へたる所に、いづくしき若君まします。(熊野の御本地のさうし、四二七頁)

以上、⑬～㉙は「いづくし」の連体形の用例である。このうち、姫・女房・若君・男子・童など人そのものを修飾したものは、⑬⑭⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙の六例である。⑬は「いづくしきを」と準体法であるが、文脈から「文」を省略していることが

わかる。この「文」は、「手紙の筆の流れ、墨つき」の意味を含んだ語であって、その「文」から得た美的感情を

「いつくし」と表現している。人そのものを修飾した「いつくし」は、人全体の整った美しさを表す一方、対象を定めて表現する場合には、「みめかたち」にその対象が偏っていることが認められる。また、人間以外の具体的な物を修飾した「いつくし」は、その対象物の「形状・色彩などが華麗ですばらしいさま」であることを示している。「いつくし」の修飾する対象は人にも物にもというように拡大しているが、その表す意味は「うつくし」と同様、姫・若君・男子・童など「幼少の者の可憐な美しさ」や、女房さらには人間以外の物などの「美麗ですばらしい」対象から受ける美的感情であるといえる。なお、「いつくし」が形式名詞「こと」を修飾し体言化した例は見られないが、接尾辞「さ」を付した名詞形「いつくしさ」は次の一例見える。

③⑩ 姫君は、藤がさねの七重衣に、多いその唐衣、桜の紅袴にはやかに着なし給へば、姿かゝりまことにいつくし
 さたとへん方なし。
 (文正さうし、五五頁)

ここでは、姫君の姿の様子から受ける美的感情を「いつくし」と表現しているのであるが、この「いつくし」は「姿かゝりまことにいつくしきこと」と言いかえることのできるものである。

③⑪ さるほどに程なく迎ひは京へ上り著きけり。その間に美しく御所を建て、待たれけり。京にはうれしく思ひて、やがて下られける間、程なく豊前国に著き給へり。御下りとてをの／＼ひしめき、やがて新造へ入れ奉りて、女房いであひて、あらいつくしの女房や、李夫人楊貴妃、衣通姫、小野小町と聞伝へしも、是にはいかでまざるべき、われさへ見れば、あまりの美しさに、たちどもさらにおぼえず、かほど美しきをさへ、いひ出す事もし、
 (さいき、三三四頁)

「いつくし」の語幹(終止形)として使われた例は右の一例である。感嘆詞「あら」と結びついて、女房の「美しさ」のおどろきを表したものであるが、この「いつくし」は前後に「うつくし」を使っている中に狭まれた形で並列的に使われているが、「うつくし」との意味の相違はほとんど認められない。

結 語

「うつくし」「いつくし」が、相互の美的感情の表現の欠を補いながら、中世以降、単なる対象となる人や物によって引きつけられる美しさを表す同義語となつて使われている様子を、両語の用例を比較しながら検討してきたのであるが、『御伽草子』にあつては、時に姫(君)などの表現として「かわいらしい」という「愛と美」の感情をもつて平安時代に広く使われた意味も見られるが、一般的には、単なる「美しい」状態、すなわち美一般を示しているということが出来る。なお、『御伽草子』における「うつくし」「いつくし」の同義性は、ウ「エ」とイ「二」という母音の音的形態の類似性からも指摘されるところである。⁽⁷⁾

結局、『御伽草子』において、「うつくし」「いつくし」という語を使った美的表現には、次のような特徴が見られると言える。

たとえば、人物設定や筋の設定に注目すると、『御伽草子』では一定の型があつた。すなわち、対象が姫であろうと女房であろうと、また若君であろうと、その人物に関する美的表現は、「うつくし」「いつくし」だけで等し並みに言い表された。これが平安時代などの物語であれば、「姫の美しさ」と「女房の美しさ」との表現の間には格段の差があつたはずであるけれども、『御伽草子』にはそのような差はなく、すべて「美しさ」という点において同じであつたということである。しかし、同じ作品の中で姫君を美的基準で並べた場合には、その表現が大変詳しく丁寧になされる。たとえば、「鉢かづき」の次のような叙述がそのことを明確に示している。

嫡子の御嫁御前は尋常なる御装束にて、御年の程二十二三ばかりとうち見えて、ころは九月のなかばのことなれば、肌には白き御小袖、上にはいろ／＼の御小袖召し、紅の袴ふみく、み、御髪はたけに余り、辺もか、やく計なり。御引出物には唐綾十疋、小袖十かさね、広蓋に入(れ)参らせ給ふ。次男の嫁御は、御年、二十ば

かりにて尋常にして氣高く、人にすぐれて見え給ふ。御髪はたけと等しく、御装束は肌にはすゞしの御あはせ、上には摺箔すりばくの御小袖、紅梅の縫物の御袴、ふみく、み、さて引出物には、小袖三十かさね、参らせ給ふ。三男の嫁御前もつとも御年十八ばかりとうち見え、御髪たけには足らねども、月にねたまれ花にそねまれさせ給ふ程の御風情なり。御装束は肌には紅梅の御小袖、上には唐綾着給へり。御引出物には染物三十反参らせ給ふ。三人の嫁御前いずれも劣らぬ御姿なり。

(七七頁)

ここでは、着物・髪長さ・風情・引出物などに対して、はっきりと差をつけた表現がなされている。こうした表現は平安時代の物語などにおいてとられている美的表現を完全網羅した形でなされているとみることができる。その上、詳細に描写された「美しさ」も、「鉢かづき」なら「鉢かづき」という一つの作品にしか通用しないものであって、その作品の中でとられた美的基準が他の作品の中で通用するといふものではなかったのである。更に、こうした美的表現に対して、最高の「美しさ」を表すものとして、「あたり辺もかかやく程の美人なり」(鉢かづき、八〇頁)と一言で言っているのである。

要するに、「うつくし」「いつくし」などということばで、『御伽草子』の読者はその対象の美的内容を十分に把握し、そこから自分自身の想像を広げることができたと考えられる。『御伽草子』における「うつくし」「いつくし」は、そういう美的表現を担った語であつたと思うのである。

〔注〕

- (1) 日本古典文学大系『御伽草子』(市古貞次校注 昭和三七年八月 岩波書店刊)に拠る。
- (2) 室町時代語辞典編修委員会編『時代別国語大辞典室町時代編一』(一九八五年三月 三省堂刊)、大野晋・佐竹昭広・前田金五郎編『岩波古語辞典』(一九七四年十二月 岩波書店刊)のそれぞれ「うつくし」「いつくし」の項を参考にした。
- (3) 前掲書(注1)をテキストとして使用した。

- (4) 用例を掲げるに際し、テキストのルビを省略したところもある。また、必要に応じて、私に特定の語に傍線を引いたり、傍点を付したりしたところもある。

- (5) 宮地敦子「『うつくし』の系譜」(『国語と国文学』昭和四六年八月号)

- (6) 前掲注(5)文献。

- (7) 佐野裕子「御伽草子に現れた異色の語形をめぐって——その史的価値と意味——」(『国語と国文学』昭和五九年八月号)

第八章 御伽草子の文章

いかなる時代においても、文語（書きことば）と口語（話しことば）との間には一定の距たりが認められる。しかし、その距たりが平安時代後期から鎌倉・室町時代へとすすむに伴って次第に大きなものになっていくことは周知のところである。文語は文章に使われる表現として、社会的慣用として固定化し、口語は生きたことばとして常に流動し、独自の推移をとげていく。そして両者の相違は、文法事象についてだけでなく、語彙の領域においても認められる。

このように、文語と口語とが互いに別個の道を歩みつづける言文二途の時代にあつて、類型化、固定化した古典的な表現を基調としてそこに当代語としての口語・俗語を交えもった独自の文章——擬古文といわれる——に、文語としての規範意識がどのように投影しているかを、擬古文の流れを汲むお伽草子に見られる文末活用形式と係り結びの現象をとおして捉えてみようと思う。

お伽草子を国語資料として取り扱うということに関しては、すでに言われているように、これには多くの異本が存在するといったテキストの信憑性の問題が指摘されよう。しかし、ここでは、そうしたテキストの問題を承知した上でお伽草子が読んで聞かせる書物として古典的表現を基調とした文章、たとえば、『ぞ・ける・こそ・けれ』式の旧来の美文調¹⁾によって書かれたものであるといったことを踏まえて取り扱うことにする。

調査したお伽草子は、江戸時代初期に、大坂の書肆渋川清右衛門によって刊行された、文正さうし・鉢かづき・小町草紙・御曹子島渡・唐糸さうし・木幡狐・七草草紙・猿源氏草紙・物くさ太郎・さざれいし・蛤の草紙・小敦盛・二十四孝・梵天国・のせ猿さうし・猫のさうし・浜出草紙・和泉式部・一寸法師・さいき・浦島太郎・横笛草紙・酒吞童子の二十三篇に限定し、テキストは日本古典文学大系『御伽草子』(岩波書店)を使用した。

一 係りなし文末活用形

ここにいう「係りなし文末活用形」とは、係り結び、すなわち係助詞「ゾ・ナム(シ)・ヤ・カ」および「コソ」を受けて、結びを連体形または已然形で終止させる文法形態といった制約なしに、文末が活用形で終わるものをいう。ただし、「蓬萊宮と申(す)とも、いかでこれにはまさるべき」(浜出草紙)のような疑問の副詞をとるものも便宜ここで処理した。

『御伽草子』における命令形を除く係りなし文末活用形を整理して、一応次のような数字を得ることができた。⁽²⁾

終止形 一、六四六 連体形 三六七

(一四) (二)

已然形 六

注、(一)の数字は和歌

この数字は、明確にその活用形であると判定できたものである。従って、終止形と連体形とが同形となる四段活用、上一段活用などの動詞、「ン・ラン・ケン・ジ・マシ」および「マジイ・タ」などの助動詞は判定不可能であるので除いてあるが、その数は九三一(内、和歌二二)にのぼる。また、助動詞「ズ」は終止形と連用形とが同形となるが、文末に立っているものは終止形として処理した。

お伽草子は、長ささまざまな文章によって書かれ、その内容も、一公家に関するもの、二僧侶・宗教に関するもの、三武家に関するもの、四庶民に関するもの、五外国に関するもの、六異類に関するものなど多様である。しかし、本論の主旨から考え、地の文と会話文(心中思惟文)の区別、各篇ごとの数字を示すということをせず、二十三篇を通して得られた全体の結果から考察する。

『御伽草子』の係りなし文末活用形は、右に示したように、終止形が一、六四六で、終止・連体・已然三形の合計二、〇一九の八一・五%を占め、圧倒的に多い。しかし、係りなしで文末を連体形で終止させたものも三六七あって、三活用形合計の一八・二%になる。確かに、係りなしで文末を活用形止めにする場合、相対的に終止形で終止させようとする傾向が強く認められる。けれども、時に連体形止めで結ぶということも行われたことは注意されなければならない。

国語史上、係りなしで(あるいは疑問の副詞をとらないで)文末を連体形で終止する現象が起きてくるのは、一般的に平安時代の頃からであって、それも散文における会話文に顕著である。それが院政期以降になると、会話文ばかりでなく、地の文においても広く用いられるようになり、連体形止めが一般的傾向となる。

そこで、『御伽草子』にあつては、どのような場合に係りなしで連体形止めをするかが問題となる。

さるほどに文正喜び、「八か国にすぐれたる、男子を生み給へ」とぞ申(し)ける。九月の苦しき十月の末には、産の紐をときたる。三十二相たらひたる、いつくしき姫にてありける。文正腹を立て、「約束申せしかひもなく、女を生みたることよ」とてしかりける。その中に、おとなしき女房たち申(す)やう、「人の子に姫君こそ、末繁盛してめでたき御ことにて候へ」と申(し)ければ、「さらばうちへ入れ申(せ)」とて、寵愛申(し)ける。乳母介錯までも、みめよきをすぎり付けにけり。(文正さうし、三四頁)

右の例から、『御伽草子』に現れる係りなし連体形終止は地の文にも多く見られることがわかる。そして、その連

体形止めは、六文中最後の係りなし終止形終止「ケリ」の見られる「乳母介錯までも、みめよきをすぐり付けにけり。」を除く前四文の文末に現われる。これら四文末に現われる「タル」「ケル」は、文末に余韻余情をもたせる効果をねらったものとみるよりも、統一した内容をもった話の終結部に向って、次から次へと連続する場面の切迫したリズムをもった表現効果を担っているように思われる。それは、前掲の引用文のあとに、

又次の年も、なを光る程のひめ御前をもふける。文正「何ぞ」と申せば、「いつものもの」と申（し）ける。文正腹を立て、「さきこそ約束違へめ、さのみはいかで人の命をそむき給ふぞ。その子を具して、急ぎ出で給へ」と、しかりけること限りなし。（同、三五頁）

とあって、新たな内容（次の年のこと）をもった場面が展開し、そこでも同じように、「ケル」「ケル」と連体形止めが連続し、「限りナシ」という終止形止めで場面を終結させるといった表現をとっていることから首肯できる。ただ、『御伽草子』における連体形終止を、常に次へ連続する場面の切迫したリズムからとられた表現であるとはできない。いわゆる余韻余情の表現効果を併せもっていることは勿論であるが、右の解釈は一つの傾向として捉えられたにすぎないものである。

『御伽草子』において、連体形終止をとる語はどのようなものであるかを示すと〈表1〉のごとくである。この表では、終止形終止をとるものも同時に掲げた。

〈表1〉によると、連体形終止をとる語は多種の活用に及んでいるが、用例数からみると、助動詞が圧倒的に多く、それも「ケル」二三四に集中し、連体形終止全体の六三・八%をしめている。従って、「ケル」を除くと、『御伽草子』にあつては、連体形終止は決して一般的傾向ではないと言いうことができよう。また、終止形および連体形で文末に立つことの多い語は、助動詞「タリ」「ケリ」「ベシ」「ズ」「ナリ」、動詞ラ変（「アリ」が大半）形容詞（「ナシ」が大半）などであつて、「リ」「ヌ」「マジ」の助動詞も比較的多い。これらの語の中で、「ケリ」を除く他

〈表1〉

活用語	終止形終止	連体形終止
スル	1	1
ラ	2	7
ツ	1	2
ヌ	1 (1)	1
リ	26 (1)	1
タ	103	20
キ	63	6
リ	2	6
ケ	245 (4)	234
ベ	172 (1)	36 (2)
シ	1	0
マ	25	9
ズ	149 (4)	4
リ	0	1
シ	1	1
ト	5	0
ナ	433	4
変	151 (1)	10
変	5	5
二	1	0
二	2	16
形容詞	240 (2)	3
形容動詞	17	0
計	1646 (14)	367 (2)

〈表2〉

カ	ヤ	ナム	ゾ	コソ	
0	0	0	2	139(5)	已然
28 (2)	5	0	207(15)	37	連体
3	1(1)	0	18	30 (1)	終止
32 (6)	52(7)	0	44(3)	28 (3)	終止連体
63 (8)	58(8)	0	271(18)	234(9)	計
28 (2)	5	0	207(15)	139(5)	正格
3	1(1)	0	20	67 (1)	破格

注 終止連体とは、終止形と連体形とが同形の四段活用、上一段活用および助動詞「ン・ラン・ケン・ジ・マシ」など判定不可能なもの。() は和歌。「正格」とは、係り結びの法則に適用するもの、「破格」とは、適用しないものをいう。

の語がほとんど終止形終止で文末に立つのに対し、「ケリ」は、終止形終止二四五（内、和歌四）対連体形終止二三四で、ほぼ伯仲している。これを対立とみるか混乱とみるか、また、なぜ「ケリ」「ケル」のみが伯仲し、他の語は連体形止めが少ないのか、その事情を考察する必要がある。

『御伽草子』に、右にみたような活用語が多いということは、この作品の内容と深く関わっていることであつて、この作品の特色を示している。すなわち、「ケリ」を中心として、「タリ」「ヌ」などのいわゆる時の助動詞が多くなるといふことは、『御伽草子』が長篇の内容をもった短篇であるということから、筋本位、興味本位の読み物となり、物語的というよりは説話的であるということから諒解される。一方また、教訓的・啓蒙的な傾向を強く現した話、更には、中世という時代的關係から、仏教的内容をもった話が重要な部分を占めている作品では、「ベ

シ」およびその否定語「マジ」、「ナリ」(断定)などの助動詞が多用される。なお、「ズ」「アリ」「ナシ」は作品の内容と関わりなく、事物・事柄の存在・非存在、動作の否定の意味を表す語として多用されたものと解される。それでは、なぜ「ケリ」「ケル」のみが伯仲し、他の語は連体形止めが少ないのかということを検討することにする。

「ケリ」が早くから連体形終止とする要因を、「ケリ」の表す意味(詠嘆)と連体形終止の担う表現効果との一致に求めるのは妥当であろう。そしてそれは、終止形終止が一般的傾向であった時代まで、余韻余情という特別の表現効果をあげるものとして有効であった。しかし、連体形終止法が増大し、一般化してくると、特殊な表現価値が薄れ、ついには形態だけが残り、「ケリ」「ケル」という異形態が終止形終止として混用されるようになったものと考えられる。ただし、連体形終止法の一般化が、「ケリ」のように等しくすべての活用語に傾向の浸透化をみせているかという点、決してそうではなく、語によって相違がみられる。それは、すでに先学によって調査された結果⁽⁵⁾からも窺えるところであって、「ケリ」を除く他の語は、終止形終止法の使用が依然として盛んで、「ケリ」にのみきわだって連体形終止が見られるのである。

このように、連体形終止法の傾向の浸透を時間的経過としてみると、〈表1〉に示した『御伽草子』の各語の数値は、そのまま中世期一般としての傾向を反映したものとみることができる。そして、「ケリ」を中心として連体形終止を多くとる語と、「ナリ」(断定)のようにほとんど終止形終止しかとらない語の相違は、特別な表現効果を担う連体形終止の機能と、個々の語の表す(持つ)意味(特性)との関わり具合によってもたらされるものと思われる。

次に、『御伽草子』に見える係なし已然形終止について検討する。係りなしで已然形終止するものは、次の六例である。このうち、「ござんなれ」「ニコソアルナレ」から転じたものを除いた他の語は、古代の已然形の用法に基

づくものである。

①文正面目なく、大宮司殿に此ありさまを申せば、大宮司殿腹を立て、「なんじが子共の分として、自らを嫌はんこと、不思議なれ。急ぎ参らせずは、なんぢを罪科に及ぼすべし」との給へば、(文正さうし、三七頁)

②大宮司殿は、国司へ始より終まで語り給へば、此よしきこしめし、「此程はあひみん事を思ひて、ものうき鄙の住居も慰みぬれ。今はそのかひなし」とて、都へ上り給ひける。(同右、三九頁)

③夜もやうく更ければ、鴛鴦の、衾の下にたはぶれけれ(底本「たはかれ」)。たがひに御心ざし浅からず、生きては偕老の契と思しめし、夜の明けやすき夜半にて、程なく鳥も音づれ、寺く鐘もはや明けぬると響きけり。(木幡狐、一五三頁)

④物くさ太郎これを聞、あな口惜しやさて、われと寝じとござんなれと思ひ、(物くさ太郎、一九七頁)

⑤物くさ太郎是を聞(き)、さては手をゆるせとござんなれ、いかがせんと思ひて(同右)

⑥汝是迄来ること、姫と一所に有上は、かへすくもうれしけれ。爰にひとつの笑止有(り)(梵天国、二七七頁)

係助詞「コソ」なしで、文末を已然形で終止する用法は、已然形の独立性が強くはたらいっていた段階においてとられたもので、已然形単独で順接・逆接条件を表したのである。右の①②③④⑤⑥は、いずれも文脈の上から、①は、順接、②③④⑤⑥は逆接で下へ続くところを已然形止めにし、一種の強調表現の効果をねらったものと解される。

以上、『御伽草子』における係りなし文末活用形には、命令形を除いても、終止形を中心に、連体形と已然形とがあることを見てきた。『御伽草子』にとられている話の内容は、伝誦的なものが多く、話のスタイルというものには固定化の傾向があったはずである。そして、『御伽草子』は、教養の比較的低い読者を目ざして書かれたものであり、単に興味ある話を伝えるだけでなく、そうした読者に伝統的な古典の文体を身につけさせるという意図をももっていたと考えられる。そのため、時代の口語の影響をまともに受けながらも文章語のスタイルをもった文末

活用形をとらせたものといえよう。

二 係り結び

終止形によって文を終止させるということが一般的であった平安時代にあつて、一種の強調表現として用いられた係り結びが、『御伽草子』ではどの程度規則的におこなわれているかを調査したものが〈表2〉である。

『御伽草子』の係り結びを、「ゾー連体」「こそー已然」の形式に照らしてみると、たとえば、

それより天にあらば比翼の鳥、地にあらば連理の枝とぞ契り給ひけり。(文正さうし、五二頁)
さすがに頼朝は、果報いみじき、大將軍にてまし／＼ければ、とかく、のがれ給ふぞ、めでたけれ。(唐糸さうし、一二六頁)

残る四人の人々は定光末武公時や、保昌とこそおぼえたり。(酒吞童子、三七五頁)

是を最後のことばにて、終に身をこそ投げにける。(横笛草紙、三五八頁)

のように、「ゾ」の結びに終止形や已然形、「こそ」の結びに終止形や連体形をとったりして、呼応の形式が「ゾー連体」「こそー已然」に適わない例がみられる。しかし『御伽草子』の係り結び全体からみると、〈表2〉に示したごとく、極めて係り結びの文法に適っていることが知られる。そして特に、已然形止めをとる「こそ」と連体形止めをとる「ゾ」との間には、係り結びの法則に適うもの(正格)と適わないもの(破格)という点から大きな違いのあることが認められる。すなわち、「こそ」についてみると、正格と破格との差が約二対一で、その破格は終止形と連体形になって、ほぼ均等にあらわれるのに対し、「ゾ」については、その係り結びの文法は比較的適っており、約一〇対一で極めて高い正格率を示している。そしてその破格は、ほとんど終止形になっており、已然形の結びとなっているものは、先に示した「ゾ、メデタケレ」の一例のほか、

あさましや自が、それをば夢にも知(ら)ずして恨申(す)ぞ悲しけれ、かくとだにも知りたれば、(横笛草紙、二五三頁)

の二例にすぎない。「こそ」と「ゾ」におけるかかる正格率の差は、口語の影響を早く受けて、文章語における古風な強調表現として定着した「ゾ連体止め」という係り結びの文法に対する意識の強さと、室町時代になって、口語の影響を受けて漸く崩れ始めた「こそ已然形止め」という係り結びの文法に対する意識の薄れ、あるいは混乱とによって生じたものと思われる。それは、係りなし活用形終止を数的に最も多くとっている「ケリ」「ケル」が混用されるようになった事情と考え合わせることができであろう。なお、和歌における係り結びについては、用例数が少ないのではっきりとした判断はくだせないが、他の文と同様、比較的法則に適っているとみられる。

ところで、〈表2〉をみると、「ゾ」と同じく文末に連体形をとる「ナン」「ヤ」「カ」のうち、「ナン」の係りを受けて連体形で結んだ例が一例もないが、『御伽草子』に係助詞「ナン」がまったく用いられないというのではなく、そこにみられる二七例すべてが、次のように「かくなん」と副詞「カク」に接して、和歌の直前におかれ、結びの活用語を省略した表現の中で用いられているのである。

御装束をぬき置かせ給ひて、御直衣の袖にかくなん、

東路のかたみとてこそぬき置くにかはるまでとは思ふなよ君

かやうにあそばして、いつ召しなれたる事もなき、藁沓直垂をめして、御身をやつし給ふ。(文正さうし、四二頁)

「ナン」の係り用法に対して、特定の意識があつたことを示すものとして注意したい。

『御伽草子』の文章について、文末活用形に注目して、係りなし文末活用形と係り結びとから考察した。『御伽草子』では、係りなし文末活用形は全般的に終止形が優勢で、連体形止めが顕著に見られるのは「ケリ」であつて、

終止形止めとほぼ伯仲している。しかし、他の語は終止形止め中心で、連体形止めが少ないのは、連体形終止の機能と、個々の語の有する特性との関わり具合によるものと思われる。係り結びについては、全般的に法則に適合しており、破格は、「ゾ」を受ける活用形と「コソ」を受ける活用形との間に相違が見られ、「ゾー連体形」は伝統的な係り結びの文法として踏襲され、「コソー已然形」は口語の影響を受けて、「コソー連体形」とに揺れていたのである。

結局、お伽草子の文章は、係りなし文末活用形や係り結びなどに対する伝統的な規範意識を強くもつ一方、連体形終止および係り結びといった絶対的な法則からはみだすことによって、より自由な表現を目ざして書かれたといえよう。それは、お伽草子のもつ物語性と説話性との内容によるものと把握されるのである。そして更に、お伽草子は、絵巻物、奈良絵本の形式をとり、読んで聞かせる性格をもった書物でもあった。そのことから、耳に聞いて快いリズムを感じさせる語句や表現を用いることが必要であった。そうした時に、係り結びがリズムを整える節目としての役割をも果たしていたと考えられるのである。

〔注〕

- (1) 平凡社『日本語の歴史4』二七二頁。
- (2) この数字は一文一文の文末に立つ活用語を調査したものであるが、万寿うけ給はり、「国をも名のり候はねば、存する人も候まじ」と、涙を流し語る。(唐糸さうし)の「まじ」のように、一文の中で、「ト(テ)・ナド」によって導かれる会話文および心中思惟文の文末活用形をも計算したものである。また、テキストでは、底本の句読点を尊重しつつ、句読点が付されているが、なお読点を句点とみた方がよいと私に判断されるところについてはそのように処置した。従って、調査者によって数字の異同が考えられるが、大勢には影響しない。
- (3) 日本古典文学大系『御伽草子』解説(市古貞次)九頁。

- (4) 注(3)文献一七頁に拠る。
- (5) たとえば、加藤聡子氏は「中世における連体形終止」(『成蹊国文』第三号)において、歌論書(無名抄・毎月抄・風姿華伝・正徹物語)、説話(宇治拾遺物語)、軍記物語(平家物語・曾我物語・義経記)、キリシタン資料(天草版伊曾保物語・ロザリオの経)の資料別調査結果を詳細な表で示しておられる。

第九章 国語史上における『長恨歌・琵琶行抄』

『長恨歌・琵琶行抄』は、中世後期（室町時代）の、いわゆる抄物とよばれるものの一つで、中国唐の詩人、白楽天によって書かれた漢詩「長恨歌」ならびに「琵琶行」について講釈したものの筆記録である。

国語史上における中世は、古代語から近代語への過渡期であり、とくに後期（室町時代）の国語には近代語としての性格を多く備えたものが認められるようになる。この時代は依然として言文が二途に別れており、文語と口語との間には大きな隔りがある。この時代には、文語にも当然変化が見られるが、それは極めて緩やかなもので、大方は古代語的要素におおわれている。一方、口語は文法面で近代語としての性格を持ち、音韻・語彙面においても、さまざまな変化を見せはじめている。

一 中世後期（室町時代）の口語資料

この時代の代表的な口語資料として、外国資料、狂言詞章、抄物の三つがあげられる。このうち、外国資料には『伊路波』や『捷解新語』などの朝鮮資料、『鶴林玉露』や『日本館訳語』などの中国資料があるが、何と云ってもキリシタン資料である。キリシタン資料にはローマ字によって書かれたものが多く、それ自体音韻資料として有用であるが、とりわけ、口語の教科書として出版された天草版『平家物語』『エソポ物語』『金句集』などは、ロドリ

ゲスの手に成る『日本大文典』あるいは『日葡辞書』とともに、当時の日本語のさまざまな分野の資料として、価値が高い。

ここに、一例を天草版『平家物語』から示す。(原本はローマ字表記であるが、便宜翻字した本文で示す)

手塚の別当は自害しつ、手塚の太郎は討死にする。今は兼平と主従二騎になられた。木曾殿言はれたは、「いかに兼平、日ごろは何ともおぼえぬ薄金^{うすがね}がけふは重うおぼゆるぞ」兼平申したは、「別のやうやござる? 君の無勢^{ぶぜい}にならせられたによって、臆^{おそ}させられたゆゑでござる。おん馬は疲れず、おん身も弱らせられず、日ごろ召されたお鎧^{よろい}が何によってただ今重うはなりませうぞ? 兼平一人なりとも余の者千騎とおぼしめされ、箆^{えびら}にいま矢七つ八つを射残^やいてござれば、この矢のあらうかぎりは、防ぎ矢つかまつらうず。あれに見えたは栗津の松原と申す、三町^{ちやう}にはすぎまらするまい。あれで御自害^ごなされい」と、言うて、二騎うち並うでゆくほどに、また瀬田^{かた}の方から新手^{あらた}の武者が百騎ばかり来るによって、兼平が申したは、「さござらば、君はあの松原で静かに御自害なされい。兼平はこの敵を防ぎませう」と申せば、木曾殿「幼少^{いっしょう}から一所^{いっしょ}でにと契^{ちぎ}つたは、ここぢや、死なば同じ枕^{まくら}にこそ」とあつて、馬の鼻を並べ、駆けうとせられたれば、兼平馬からとんでおり、馬の鼻にむずと取りついて、「いかなるおことでござるぞ? 弓取は日ごろ高名^{かうみやう}をつかまつれども、最後に不覚をつかまつれば、長いきずでござるものを。言ひかひない冠者^{かんしや}ばらに組み落され討たれさせれば、日本国^{にっぽんこく}へきこえさせられた木曾殿をばそれがしが家の子、なにがしと申す郎党^{らうたう}こそ討ちとり奉つたなどと申さうこと、あまりに口惜しう存ずる。ただ松の中へ入らせられて、御自害なされい」と申せば、木曾殿力及ばいで松原へお入りあれば、兼平ただ一騎大勢に駆け向かひ大音をあげて、「日ごろは音にも聞け、今は目にも見よ、木曾殿の乳母^{めのと}に兼平三十三にまかりなる。鎌倉殿までもさる者のあるとしろしめされつらう、討ちとつて勳賞^{くわんじやう}かうむれ」と言うて、残つた八筋^{やすぢ}の矢をさしつめ引きつめさんさんに射る。生死^{しやうじ}は知らず、矢庭^{やぢ}に八騎射落^{はちき}いて矢種^{やしゅ}がつくれば、弓をかしこに投げ捨て、打物の鞘^{さや}をはづし、切つてまはるに、面^{おもて}を合はする者はなうて、ただ射とれ射とれと言うて、中にとりこめ、遠だちながら雨の降るやうに、射たれども、鎧^{よろい}がよければ、裏もかかず、あきまを射ねば、手も負はず。

種がつくれば、弓をかしこに投げ捨て、打物の鞘^{さや}をはづし、切つてまはるに、面^{おもて}を合はする者はなうて、ただ射とれ射とれと言うて、中にとりこめ、遠だちながら雨の降るやうに、射たれども、鎧^{よろい}がよければ、裏もかかず、あきまを射ねば、手も負はず。

木曾殿は松の中へお入りあるに、ころは正月二十日の暮れ方なれば、余寒なほはげしうて、薄氷^{うすこほり}のはつたに、深田^{ふかだ}があるとお知りあらいでうち入れられたれば、きこゆる木曾の鬼草毛も一日駆け合ひの合戦に疲れたか、あふれどもあふれども、打てども打てども動かず、今はかうと思はれたか、うしろへふりあふのかるところを相模の国の住人^{まつのくにのすまひ}が久追ひかけてよびいて射るに、内甲^{うちかぶと}をあなたへつと射通されて痛手なれば、甲の真向^{まっこう}を馬の首にあててうつ伏さるるを、為久が郎等二人おちやうてつひに木曾殿の首をとつて、太刀の先に貫いて、高うさし上げて、兼平が言うたにたがはず、「日本国にきこえさせられた木曾殿を為久かうこそ射ち奉れ」と言うて、高らかに名のつたれば、兼平これを見て、「今はたれをかこまうとて軍をせうぞ? これを見よ、剛の者の自害^{やう}する様、手本にせい、東国の殿ばら」と言うて、太刀を抜き、口にふくんで馬からさかさまに落ちかかつて貫かれて失せた。兼平が討たれて、そののちこそ栗津の軍は止^やうでござれ。(ハビヤン抄・キリシタン版『平家物語』亀井高孝・阪田雪子翻字、第四より引用。句読点、「」は筆者が付した)

これは木曾義仲が勢田の方に落ちる途中、今井兼平と行き会つて、敵勢と戦つたあげく、ついに木曾も兼平も討ち死にする場面である。ここには、室町時代の口語あるいは口語的表現として、次のものを指摘することができる。(なお、この場面と対応する文語的表現としての用例を、日本古典文学大系本(覚一本系統)から引用し、括弧に示す)

○兼平申したは(今井四郎申しけるは)

○君の無勢^{ぶぜい}にならせられたによつて、臆^{おそ}させられたゆゑでござる(それは御方に御せいが候はねば、おく病でこそさ

はおほしめし候へ。

○日ごろ召されたお鎧が何によつてただ今重うはなりませうぞ（日来はなにもおほえぬ鎧が、けふはおもうなツたるぞや）

○防ぎ矢つかまつらうぞ（ふせき矢仕らん）

○三町にはすぎまらするまい（対応部分ナシ）

○君はあの松原で静かに御自害なされい（あの松の中で御自害候へ）

○兼平はこの敵を防ぎませう（兼平は此敵ふせき候はん）

○兼平馬からとんでおり（今井四郎馬よりとびおり）

○…などと申さうこと、あまり口惜しう存ずる（…など申さん事こそ口惜う候へ）

○鎌倉殿までもさる者あるとはしろしめされつらう（さるものありとは鎌倉殿までもしろしめされたるらんぞ）

○薄氷のはつたに、深田があるとお知りあらいで（うす氷はッたりけり、ふか田ありともしらずして）

○為久が郎等二人おちやうて（石田が郎等二人落ちあふて）

○今はたれをかこまうとて軍をせうぞ（いまはたれをかばはんとてかいくさをばすべき）

○太刀を抜き、口にふくんで馬からさかさまに落ちかかつて貫かれて失せた（太刀のさきを口に含み、馬よりさかさまにとび落ち、つらぬかつてぞうせにける）

○そののちこそ粟津の軍は止うでござれ（さてこそ粟津のいくさはなかりけれ）

両者を対比することによって、文語的表現と口語的表現との違いがどのようなところに現れるか理解されるであろう。

狂言詞章には、天正本、天理本、虎清本、虎明本などがある。諸本間には詞章に大きな変化が見られ複雑な様相

を示しているけれども、この期の口語資料たり得るものを十分に持っている。

一例を虎明本『狂言』「おか太夫」から示す。ここには、多くの俗語も使われており、室町時代の口語の姿を知らううえできわめて興味深いものがある。

（舅）へ是は此のあたりにすまぬする者でござる、今日むこ殿のござらふずるとの御事じや、あるかやひ（太郎冠者）へお前に（舅）へ今日むこ殿のござらふと有ほどに、聾殿のござつたらばこなたへ申せ（太郎冠者）へ畏て候（聾）へ罷出たる者は、年ににあはぬ申事なれ共、人のいとしがる花むこでござる。今日はさいじやう吉日でござる程に、いそひでむこ入いたさう（聾）へしうとじやもの、かたより、とうから参るやうにと申されたれ共、彼是隙もなふておそなはつた、いや参る程に是じや、物申（太郎冠者）へたそ（誰）へ今日まいれと仰られたほどに、むこがまいつたとおしやれ（太郎冠者）へむこ殿でござるか（聾）へおんでもなひ（太郎冠者）へ其通申さう（太郎冠者）へいかに申、むこ殿のお出ござる（舅）へこなたへとをらせられひといへ（太郎冠者）へかしこまつてござる（太郎冠者）へこなたへとをらせられひと申されます（聾）へしうとじやものはうちに（太郎冠者）へ中々うちにいられます（聾）へそちはこれの人か（太郎冠者）へ中々（聾）へほねおりじや、ちとあちへわたししめ（聾）へ早々まいり、御礼を申が本意なれ共、かれ是いたひておそなはつて御ざる（舅）へ内々待ちまらする処に、只今の御出かたじけなふござる、それへとをらせられひ（聾）へ畏た（舅）へ太郎くわじや、いまの物をだせ（へ又さかづきをだしてからも云）（太郎冠者）へかしこまつた（へつゞみおけのふたに、くろきづきなりとも、ふつくりとして出す、さらはそれをまいれと云時、むこふしんして、ためすがめ見て、とりてくふ、一口くひて、むまひ物じやとおもふかはする、一口づゝくふて、かのづきんをにぎり、ちいさくなるやうにするくでん（コヲツケテ）へさてくひすましてから、ふところへいる）

(聒) へあふそれ／＼そのらうゑいをくはふ(妻) へそれはくふ物でござらぬ(聒) へそのうへにあるものくはふ(妻) それならば、いつもと、さまの、朗詠をだんじさせらる、をきいひて、それらにてあとさき少覚てござる程に、いふてきかせませう、そのうちにあらはあると仰られひ(聒) へいふてきかせひきかう程に(妻) へいけの氷のとう／＼は、かせわたつてとく、まどのむめの北面は、雪ほうじてさむし、まどの梅にておもひ出し候、若梅干やまいつたか(へなふすや、きくさへ、口にすがたまるよ) ……中略(妻) へこしゆかいとはよき酒の事、納豆をさかなにて、よきさけやくらふたか、(聒) へくらふたか、いや言語道断の事じや、男といふものは、箸に目鼻つけた物でもそのやうにはいぬ、人にはつかふことばが有、くらふたか(妻) へやらそなたはきこえぬ、わがくふた物のなさへわすれて、何事をいします(聒) へ惣別此中あまやかひておくに依て、かつにつてそのつれな事をいふ、くちをきかぬやうにいたさう(へかたぬく)(妻) へ又いつものつえとりばひがづるよ(聒) へいつものつえとりばひとは、おのれがくちかこはさよ、まだいひおるか(妻) へなふいたやなふ、そのやうにめさらふならば、いんどと、さまか、さまにいふぞよ(聒) へやれ／＼おかしひ事を云、いふたらはこはひか(へ扇ひろげ、刀にてをかくる)(聒) へおそらくはいふてみよ(妻) へおんなにむひて、それはなんとした事ぞ、(聒) へなんとした事ぞ(へあふぎとりた、く、つゞけさまた、ひて、てをうけるをた、く)(聒) へなみよ、さうもおりやるまひ(妻) へあまりのたへがたさに、手をうけたれば、此やうになるほどた、かれて、なんといたさうぞ、誠にしぢんのものうき、わらび人手をにぎるとはかやうの事にてや候らん(へきいておもひ出し、よろこびて、今のは何がなんと、はらたつる、いや今のをいふてきかせひ)(妻) へしぢんのものうき、わらび人手をにぎるよ(聒) へあふいとしの人や、そのわらびの事候よ、はやこしらへさしめくはふよ○こちへわたしめ(へ女をおふている)(大蔵虎明本『狂言集の研究本文篇上』池田広司・北原保雄著より引用)

動詞・助動詞には、敬語に係わる時代語が顕著に現れる。「ござる(御座)」(…すまゐる者でござる)、「ます」(中々うちにいられます)といった丁寧語、「仰せある」の転じた「おしやる」(むこがまいったとおしやれ)、尊敬の助動詞「しむ」が軽い敬意を含んだ命令形として固定化した「しめ」(ちとあちらへわたしめ)、同じく「さしむ」の命令形「さしめ」(はやこしらへさしめ)、尊敬の複合助動詞「せます」の転じた「します」(何事をいします)、動詞「する」の尊敬を表す「めす(召)」(そのやうにめさらふならば)、「おりやる」(さうもおりやるまひ)などといった尊敬語、「まゐらす」の転じた「まらす」(内々待まらする処に)という謙讓語などがそれである。また、一般の助動詞として、推量の「う」「うずる」(今日むこ殿のござらふずるとの御事じや)、断定の「ぢや」(しうとじやもの、かたより)などがある。

狂言は、対話による芸能であることから、その詞章には多くの感動詞が使われる。右の例文の中には、呼び掛けに用いる「やい」(あるかやひ)、応答を表す「なかなか」(「そちはこれのか」「中々」)、驚嘆・歓喜・恐怖のときに発する声「なう」(なふす「酢」や、きくさへ、くちにすがたまるよ)などがある。

形式名詞的に、「種類・程度・たぐい」の意味の語として使われる「つれ(連)」(かつにつてそのつれな事をいふ)、「惣じて」と同じ意味を持つ漢語副詞「惣別」(惣別此中あまやかひておくに依て)などもこの時代語として指摘できる。

さらには、「おん(恩)でもない」(もちろんだ・いうまでもないの意)、「矯めつ眇つ」(いろいろな角度からよく見ようとする様の意)の「つ」の脱落した語形「矯め眇め」(むこふしんして、ためすがめ見て、とりてくふ)、「箸に目鼻つけたもの」(痩せ衰えて貧弱なもの・とるにたらないものの意) (男といふものは、箸に目鼻つけた物でもそのやうにはいぬ)。「勝つに乗る」(いい氣に成る・つけ上がるの意) (かつにつてそのつれな事をいふ) など、中世後期に広く行われたと思われる連語や慣用句は、文化的、社会的背景から生まれたものとして注目されなければならない。

音韻に係わるものとして、「いづ（出）」（下二段活用）の語頭の狭母音「い」の脱落した「づる」（連体形）（又いつものつえとりばひがづるよ）が見られるが、「でる（出）」と一段化していない点に過渡期の様相がうかがえる。

なお、ト書きの部分に「受く」（下二段活用）が一段化した例（あふぎとりた、く、つゞけさまた、ひて、てをうけるをた、く）が使われているが、これなども古代語から近代語への語法面の変化がかなり進んでいることの現れとみることができよう。

抄物は、主として漢籍や仏典を平易なことばで講釈した筆記録である。抄物には、いわゆる文語的な性格を強く持ったものから口語的な性格を強く持ったものまであって、その文体の性格は決して一様ではないが、ここにも先の二資料と同様、当時の口語や俗語をいろいろと含んでいるものが多い。代表的な抄物としては、『史記抄』『論語抄』『四河入海』『玉塵抄』『中華若木詩抄』など、五山の禅僧や博士家の人々などによってつくられたもののほかに、方言の資料として有用である東国系の抄物『人天眼目抄』などがある。

一例を『中華若木詩抄』卷之上「曹公」から示す。

二一袁劉一表笑一談無^{ナミス} 眼一底英一雄不^{ラレニ}足^レ図^ニ

赤一壁^{ヨリ}歸^リ一^ニ来^ニ応^ニ嘆^ニ息^ス 人一問更^ニ有^ニ一^ニ周^ニ瑜^ニ

曹公ハ三ノ国之時ノ一方ノ主也。三ノ国トハ魏呉蜀也。魏ノ曹一操、呉ノ孫一権、蜀ノ劉一備也。其ノ中ニモ劉備ハ蜀ノ漢ト云テ、漢ノ中山靖王ノ子孫ナルソ。漢ノ正統ト思フタ也。又正統デハナイト云セツモアリ。天下三ニワレテ、鼎ノ三足ノヤウニシテトリヤウタ也。カラハ曹操ガツヨイ也。曹操劉表ヲ伐ツ。劉表ガ子荊州ヲ持ナガラ曹操ニ降参スルソ。ソコデ、曹操ガツヨル処デ、蜀ノ劉備ハ恐テ江陵ヘニグルソ。曹操ガツカケタソ。劉備ハ諸葛孔明ヲ南陽ノ草廬ヘ三度行テ、屈請シテ大將軍トスル。然ル間諸葛孔明ガ劉備ニ云コトハ合戦ニヲクレヲトリタルコトナレバ、ツメテ大事也。呉ノ孫権ヘ合力ノ兵ヲ乞ベシト云ソ。劉備尤モ可然ト同

心スルホドニ、サラハ合力ノコトヲ孫権ニ云ベシトテ、諸葛行テ孫権ニ其ノ由ヲ云也。孫権モ名ヲ好ム者ナレハ、悦デヤガテ同心ス。孫権ガ劉備ニ同心スルト云コトヲ聞テ、曹操イカリテ、孫権ガ処ヘ案内ヲ云コトハ、水軍八十万ヲ以テ、船ニテ参シテ一合戦仕ルベシ。呉ノ国ニテ参会申スベシト云ソ。其ノヲモムキヲ孫権ガ臣一^レ下ドモニ披露スルゾ。臣下ドモ皆失^レ色^ヲ驚ク也。サウ云テモカナワヌコトナレバ、軍サ評定アルベシトテ各存分ヲ云ニ、張照ト云者ハ迎ヘテ伐ツヘキト云ソ。入レタテ、合戦ヲセント云ソ。魚肅ト云者ハ其^レ儀太タ不^レ可^レ然ト云也。周瑜ト云者ヲメシ出サレテ談合セラレヨト云ソ。孫権ヤガテ周瑜ヲメシ出ス。周瑜至ルガ云コトハ、我々ニ数万ノ精兵ヲソヘラレヨ。曹操ニヲシコメラレテハナルマイ。此方ヨリ夏一口ト云処ヘ進ンテ打テ出デ、一合戦シテ勝負ヲ決セント云ソ。入レタテ、ハ中々ナルマイト云也。ソコデ孫権腰ノ刀ヲ拔テ、前ニアルツクエヲキツテ云コトハ、無思案ナル諸將ドモノ曹操ヲ迎ウタント云者ハ此ノ案ノ如シト云ソ。周瑜ガ策ニ同心スルソ。於^レ此^ニ三万人ノ兵ヲ以テ劉備ト一手ニ成テ伐テ出テ、曹操ヲ待カケテ赤壁ト云処ニテ、ハタト曹操ニ相逢フ也。周瑜ガ副將軍ニ黃蓋ト云者アリ。ソレガ云コトハ、曹操ガ兵八十萬騎アリト云ヘトモ、船一^レ首ト船一^レ尾ト相連テ大船ガアキ処モナク相連タ也。アマリ大勢ナルニヨリテ如此也。計策ナラズンハアノ大軍ニ勝コトヲ得ガタシ。アノ大船ドモ二火ヲカクルナラバ、曹操ガ大軍破ルベシト云ソ。船十一艘コシラヘテ人ヲバノセズシテ、イカニモホシスマシタル柴^{カハケル}・燥^{カハケル}荻ナンドヲ其船ニ積テ、其中ヘ油ヲソ、イテ、其船ニ幕ヲウチテ中ノ見エヌヤウニシテ、敵ノカタヘ見ユルヤウニ旌旗ヲアゲテコギ出タシテ、先ツ早一船ヲ以テ書ヲ曹操ニヲクツテ、イツワリテ降参セント云ソ。曹操ハ味方ノ軍兵ノ者八十万人也。敵ハ小勢也。降参セント云モ、ウタガワシカラズト思フテ油断スルソ。折一節東一南ヨリ風ガマクリカケテ吹ク也。十艘ノ柴舟ヲサキニ立テ、中流ニ帆ヲアゲテ、其ノ余ノ兵一船共ハ次第ニス、ム也。曹一操ガ軍中ニハ此ノ舟ドモヲ指テ降参スル船ヲ見ヨ。目出度シト云ソ。進ムコト二里余ニシテ、彼ノ柴舟二同一時二火ヲ発ス。南一風ハ急ナリ。船ハ

柴ヲ積ダレハ、足ガ輕キコトヲ箭射ルガ如クニ、味方ノ船ヨリ敵ノ曹操が兵船ヘ吹付タレバ、百千ノ船ドモニ火ガツイテ焼クルホドニ、烟ヤラ浪ヤラ天ニ漲ルソ。人一馬水ニ溺レテ死セネハ焼死ス。焼死セジトテ水ニ入レハ、水ニ溺死ス。然ル処ヘ周瑜等イカニモスルトキ武者ヲ遺シテ、鼓ヲウツテ雷動シテ進ム也。北一軍大ニ壞テ曹操ニゲテ歸ル也。其後孫權ガ処ヘ度々兵ヲツカワセドモ、ナニトモナラズ毎一度敗軍スルソ。ソコデ曹操ガ退一屈シテ嘆息シテ云コトハ、人ノ子ヲ生ムベキナラバ、孫權ガ如クナ子デ無テハ也。サキニ降参スル劉表ガ子は豚ヤ犬ノヤウナ物ドモト云ソ。弱キ者也。孫權ヲ事ノ外ホメタ也。曹操は曹子建ガ兄ナリ。惣シテハ風流ナル者ソ。軍中ニテハ槩ヲ横タヘテモ賦詩ソ。太一平ノ姦一賊、乱一世ノ英一雄ト云ソ。太平ノ世ニハ、曹操ヲハ姦一賊ト云ベキ也。乱一世ナレバコソ英雄ト云也。二一袁ハ綱目集覽ニ建一安二年秋九月曹操擊一袁術一走一破之ト云ソ。六年ニ曹操擊一袁一紹一倉亭破シソ。二袁ハ袁一術ト袁一紹トニテアルベキ也。何レモ曹操ニヤス／＼ト亡サレテ、一手モトラヌ也。○一二ノ句ハ、袁一紹袁一術ハ何ノテマモ入ラズ撃テコレヲ破ル。劉一表ガ子ドモハ降参スルホドニ、曹操ガ上カラハ二一袁劉一表ハ笑一談ホドノコトマデモナイソ。何ノ造作モナイソ。サアルホドニ、天下ニハ我ニ肩ヲ双ブル者ナイホトニ、眼底ニ英雄トヲボシキ者モ、中々ハカルニタラヌコト也。寸ニモ尺ニモ足ラヌト云心也。○三四ノ句ハ、カウ思テ居タレハ、赤壁ニテ周瑜ニ焼タテラレテ、二三万人ノ勢衆ヲ以テ、八十萬騎ヲヤブリテ、曹操ハヤウ／＼命バカリヲノガレテ歸ルソ。然ル間、赤壁ヨリ歸リテ後、歎息シテ孫權ヲホメテ、舌ヲ卷タ也。イカニ曹操ガ眼界ニ英雄ナシト思ヘトモ、世界ハヒロイコトナレハ、周瑜ト云コハキ者有リト作クルナリ。(寛永十年版『中華若木詩抄』より引用)

この文章は、錢惟岳という者が『三国志』で知られる「赤壁之戰」の内容を踏まえて作った七言絶句の漢詩「曹公」を講釈したものである。文体は「ゾ体」「ナリ体」の混体で、口語的表現と文語的表現との入り交じった、たとえば、「漢ノ正統ト思フタ也」のように、抄物独特な記述をとっている。引用文中の時代語的なものとして、次

のような例を指摘することができる。

「又正統デハナイト云セツモアリ」(断定の助動詞「ダ」の連用形)

「天下三ニワレテ、鼎ノ三一足ノヤウニシテ、トリヤウ也」(動詞「取り合フ」の連声「トリヤウ」)

「ソコデ、曹操ガツアル処デ、蜀ノ劉備ハ恐レテ、江陵ヘニグルソ」(動詞「強ル」の「ヨ」が「ヲ」に変化した「ツアル」、順接の接続助詞的用法の「トコロデ」)

「合戦ニヲクレヲトリタルコトナレバ、ツメテ大事也。呉ノ孫權ヘ合力ノ兵ヲ乞ベシト云ソ」(「きわめて」という意味を表す程度副詞化した「ツメテ」)

「軍サ評定アルベシトテ、各存分ヲ云ニ、張照ト云者ハ迎ヘテ伐ツベキト云ソ」(「意見・見解」の意味の「存分」)

「入レタテ、ハ中々ナルマイト云也。ソコデ、孫權腰ノ刀ヲ抜テ、前ニアルツクエヲキツテ云コトハ(接続詞「ソコデ」)

「赤壁ト云処ニテ、ハタト曹操ニ相逢フ也」(「思いがけなく出くわすさま」の意味を表わす情態副詞「ハタト」)

「百千ノ船ドモニ火ガツイテ焼クルホドニ、烟ヤラ浪ヤラ天ニ漲ルソ」(二つ以上の事物を例として取り上げて言う副助詞「ヤラ」)

「曹操ノ上カラハ、二一袁劉一表ハ笑談ホドノコトマデモナイソ。何ノ造作モナイソ」(「面倒なことが無い」の意味「造作モナイ」)

「天下ニハ我ニ肩ヲ双ブル者ナイホドニ、眼底ニ英雄トヲボシキ者モ中々ハカルニタラヌコト也。寸ニモ尺ニモ足ラヌト云心也」(「眼底」「寸ニモ尺ニモ足ラヌ」)

これらの他に、前期(鎌倉時代)の軍記物語や説話集などに使われた「降参」「屈請」「合戦」「参会」「披露」「評定」「談合」「無思案」「計策」「油断」「退屈」「敗軍」などの漢語もたくさんあり、これらが日常語の中に浸透し、口語の世界でも広く使われるようになっていたものと思われる。

以上、中世後期（室町時代）の代表的な口語資料について、具体例をあげて紹介した。特に口語資料という点にしまつた場合には、これら三資料に限定されるということである。従つて、広く室町時代の国語資料ということになれば、その領域はずっと広がってくる。たとえば、『閑吟集』などの歌謡類、『犬筑波集』などの俳諧、『太平記』『曾我物語』『義経記』や『甲陽軍鑑』『信長記』『太閤記』などの軍記物や戦記物、また、『幸若舞』の詞章、蓮如の「おふみ（御文）」などの法語類、『徒然草』『御伽草子』、さらには、この期に多く作られた『下学集』や各種の節用集などの辞書類、あるいは『庭訓往来』などといった往来物などである。これらは程度の差こそあれ、中世後期の音韻・語彙・語法・文体などの国語資料として有用である。

二 国語資料としての『長恨歌・琵琶行抄』

『長恨歌・琵琶行抄』の古い写本として、室町時代書写の次の四本が知られている。

京都大学付属図書館清家文庫蔵本（清原宣賢自筆、天文十二年書写）

天理図書館本（僧中恩書写、書写年代不詳）

内閣文庫蔵本（玄鈎斎時通書写、天正五年）

成簀堂本（文禄二年書写）

ここでは、成簀堂を除いた他の三本を対象として、特に、口語性を強く持っている内閣文庫本を中心に、国語史の上から考察する。⁽¹⁾

なお、資料は影印本『長恨歌・琵琶行抄』（国田百合子解説・校異、武蔵野書院刊）を用いた。

まず、『長恨歌・琵琶行抄』の文章がどのようなものであるかを知るために、成簀堂本を除いた三本の『長恨歌』の漢詩の冒頭部分をそれぞれ示す。（原文の書写の形式は三本ともまちまちであるが、分かりやすく一つに統一した。また、

句読点、濁点は私に付けた）

漢一皇重^{オモシシ}色^ヲ思^フ傾一^ニ国^ヲを

唐ノ玄宗ノ事ヲ云トテ、何ゾ漢皇トハ云ヤ。白楽天ハ唐ノ代ノ者ナルホドニ、唐皇トハ不^レ云シテ、漢ヲ借テ唐皇ノ事ヲ隠シテ漢皇ト云。伊勢物語ニ業平ヲ隠シテ昔男ト云ガ如シ。重色トハ、女色ヲ愛スルヲ云、傾国トハ、一国傾テ美人ト云モノ也。カヤウノ美人ヲ得タク思ヘリ。^{アメカシクシロシメス}御宇こと多年求^{エテ}不^レ得^ハ。玄宗ノ天下ヲ治コト多年ノ間也。此間ニ美人ヲ求レドモ不^レ求得^ハ也。（京都大学付属図書館本）（漢詩中の平仮名は原文がヨコト点であることを示す）

漢皇重^シ色^ヲ思^フ傾一^ニ国^ヲ御一^{ドモ}宇多年求^レ不^レ得

唐ノ玄宗ノコトヲ申サウトテ、世ニ漢皇トハ云ゾナレバ、白楽天ハ唐ノ代ノ者ヂヤ程ニ、唐皇トハ難^シ云。故ニ漢ヲ借テ漢皇トハ云也。喩ヘバ伊勢物語ニ業平ヲ隠シテ昔シ男ト云心也。傾国トハ、々（国）ヲモ傾ル程ノ美人ヲ得タウ思召也。傾一^ニ城ト云ハウコトナレドモ傾国ヨリヲトツタゾ。惣国ノ貴賤上下ガ傾テ美人ヂヤト云心也。注云、明一^ニ皇思^ル得^{コトヲ}傾一^ニ国美一^ニ貌之婦一^ヲ、不^レ敢^テ斥^ハ言^ハ唐君一^ト、借^テ漢為^レ喩^ト。御宇一^ニ玄宗ノ天一^ニ下ヲ治コト多年、此一^ニ間ニ色々美人ヲ求レドモ不^レ得也。（天理図書館本）

漢一^ニ皇重^シ色^ヲ思^フ傾一^ニ国^ヲ御一^{ドモ}宇多年求^レ不^レ得

唐ノ玄宗ノコトヲ申サウトテ、ナゼニ漢皇トハ云ゾナレバ、白楽天ハ唐ノ代ノ者ヂヤホドニ唐皇トハ難^シ云、故ニ漢ヲ借テ漢皇ト云ゾ。喩ヘバ伊勢物語ニ業平ヲ隠シテ昔男ト云心也。傾国トハ国ヲモ傾ル程ノ美人ヲ得タウ思召也。傾城ト云ハウコトナレドモ、傾国ヨリハヲトツタゾ。国ノ貴賤上下ガ傾テ美人ヂヤト云心也。御宇一^ニ玄宗ノ天下ヲ治ルコト多年、此間ニ色々美人ヲ求レ共不得也。（内閣文庫本）

この三本を比べてみると、抄文（注釈内容）は三本ともほぼ同一であるが、注の一文の有無を除いて、天理図書

館本（以下、「天理本」と言う）と内閣文庫本（以下、「内閣本」と言う）とは、その文体までもがほとんど同じである。それに対して、京都大学本（以下、「京都本」と言う）は他の二本とは文体を異にしていることが分かる。京都本は「何ゾ漢皇ト云ヤ」「不云（イハズ）シテ」「ト云ガ如シ」「得タク思ヘリ」など文語的であるのに対し、他の二本は「ナゼニ漢皇トハ云ゾナレバ」「唐ノ代ノ者ヂヤホドニ」「得タウ思召也（オボシメスナリ）」「ト云ハウコトナレドモ」など口語的であると言えるのである。

抄物の文体は、その文末指定辞が「ナリ」「ゾ」「候」によって区別され、「ナリ」体は文語的、「ゾ」「候」体は口語的という傾向があるとされている。しかし、次の「ゾ」体文における「デモ」（口語）と「ニテモ」（文語）との共存例によっても言えることであるが、それが絶対的な決め手とはならない。しかし、区別の目安となることは確かなのである。

○天上―君御一生ノ後ハ、天上デモアレ人間ニテモアレ、イヅクイカナル処ヘナリ共生合テ、夫婦ト成マイラセント云心ゾ（内閣文庫本一六頁）

ところで、一つの抄物文体が「ナリ」体で統一されているものは多く存するが、「ゾ」体や「候」体だけで統一されているものはほとんど存在しない。一般的には、一つの抄物の中で「ナリ」「ゾ」の混体をとっているものが多いのである。従って、その抄物が文語的な性格を強く持ったものか、あるいは、口語的な性格を強く持ったものかは、文末指定辞「ナリ」「ゾ」の優劣によって、形式的に判断することができる。このような点から、内閣本の『長恨歌抄』と『琵琶行抄』の文末指定辞「ナリ」「ゾ」の使用状況を見てみると（ただし、漢文による引用注の文末辞「也」は除く）、

	長恨歌抄	ゾ	ナリ
琵琶行抄	127	250	40

のようであって、いずれも「ナリ」よりも「ゾ」が優勢で、内閣本が口語的要素を色濃く有していることを示唆しているといえる。⁽²⁾

そこで、以下、国語史上における内閣本『長恨歌・琵琶行抄』（以下、「本抄」と言う）について、主に室町時代の口語資料としての観点から、音韻、語彙、語法について検討する。

三 音韻について

まず、音韻交替については、「盡日」に対するヨミがあげられる。本抄では、

○盡^{ヒネモス}日君王看^{レトモ}不^{アカ}足^ラ（長恨歌抄九一頁）

のように「ヒネモス」と訓じているが、天理本「ヒメモス」、京都本「ヒネモス」とある。この「ヒネモス」と「ヒメモス」は、「ネ」と「メ」の[n]音と[m]音との子音交替形であって、「ヒネモス」は古い語形を引き継いだもので、「ヒメモス」は鎌倉時代以前では仏書に見えるが、室町時代では漢籍に見えるものであると言われている。⁽³⁾また、

○塔ハ御塔トテ御殿ヘノボルキダハシナリ（長恨歌抄一〇四頁）

の「キダハシ」も、天理本「キザハシ」、京都本「キダハシ」とあって、「キダハシ」と「キザハシ」は、[d]と[z]の子音交替形である。さらに、

○曲ヲ引果イテ抽撥絃ヲ当心テ、一シラメシラムルゾ（琵琶行抄一二八頁）

の「シラメ（調）」「シラムル」は、天理本も同じであるが、京都本は「シラベ」「シラブ」とあって、[m]と[b]の交替形である。ただし、本抄と天理本には右掲本のすぐ後の所に、「比巴（琵琶）ハ四絃也。四ノ緒ヲ一声シラベタルハ、スッシノ絹ヲ引サク如ナソ」と「シラベ（タル）」の語形がみえ、「メ」「ベ」の両形が使われている。

母音の交替形としては、室町時代には、特に[u]と[o]の交替形が顕著と言われるが、本抄でも、

○阿姨ハアネゾ。アネハ死ヌル、我ヲハゴクム者モナウテアルニ（琵琶行抄一三三頁）

のように、「ハグクム」を「ハゴクム」（天理本、京都本も同じ）と交替して使われている。また、「相（ヒ）カマ（構）ヘテ」の「ヘ」を「ヒ」に交替した[e]と[i]の交替形「相（ヒ）カマヒテ」が次のように見える。（天理本「相カマイテ」、京都本「相構テ」）

○仏神三宝モ相カマイテ、男子ヲ御生アラバ御情ナカラウズ（長恨歌抄九一頁）

室町時代には、「クワンオン（観音）」が「カワンノン」、「オンヤウ（陰陽）」が「オンミヤウ」のように音変化する、いわゆる連声が多く起るようになるが、本抄には、「御寝アル」の変化形かと思われる「御寝ナル」の語形が四例見える。すなわち、

○貴妃ニ御別レアツテ後ハタレ御トギヲ申者モナシ。只孤灯ヲ挑^{（かかげ）}尽シテ少モ御シンナルコトモナキゾ（長恨歌抄一〇六頁）

の他に、「只独リスマシキツテ御寝ナラヌホドニ」（同）、「日高マデ御寝ナリテ」（同）、「御寝ナルトキ上ニキタル衣ヲカイトリ」（同一二頁）がある。ただし、この「御寝ナル」を「御寝アル」の連声と断定するには少し疑問が残る。それは、「御寝アル」という語形が存在したか否か明らかでないということ、漢語「御寝」と「ナル」との間に助詞を介して、「長き夜すがら御寝もならず」（平家物語卷三・法皇被流）のように、「ナル」が単純語「成る」（貴

人の行為を表す「…あそばす」の意）として使われていること、などの理由が考えられるからである。

四 語法について

文法史上、古代語と近代語とを分つ顕著な出来ごととして、係り結びの崩壊をあげることができる。その係り結びが消滅するのは、中世後期の口語からである。この時代の口語では、活用語の終止形と連体形とが同形となり、連体形終止の一般化によって、係助詞「ぞ」「なむ」「や」「か」を受けて連体形で結ぶという用法が文法的に意味をなさなくなった。そして、「こそ」にあつては、その結びが已然形であることから、「こそ…已然形」の呼応関係を保つてはいたが、やがて「ぞ」「なむ」「や」「か」の係り結びの消滅に連関して、室町時代の末期には口語から消える。かかることから、本抄においても係り結びはほとんど見られない。しかし、わずかに次のような例を拾い出すことができる。

○霓裳^{（羽衣）}ノ舞モ此ヤウニゾア^{（ツ）}ツラウ^{（長恨歌抄一一三頁）}

○一ツヲ留ル心ハ此一方ヲ玄宗ノ御覧ジゾスル^{（ウ）}ト思出サバ^{（同一一五頁）}

○我心ニ行タイト思フ処ヘコソ足モ進^{（メ）}メ、跡ニノミ御執心残テ更ニ前ヘハ進マレヌヲ押テヤリ進ラスルホドニ^{（同一〇二頁）}

○始テ逢タコソ知音ナレ^{（同二三四頁）}

抄物にはこのような係り結びの例が見られる。このことは文語的表現と口語的表現の混在している抄物にあっては当然のことと言ってよい。しかし、それも「こそ…已然形」がほとんどであり、しかも、先の三つ目の用例のように、係助詞「コソ」を受けて文を終止するはずの已然形「進メ」がそこで文を終止せず、逆接の接続助詞「ど」「ども」の意味を含んでさらに下へ続く働きを示している例（それは、一見係り結びの流れと判断されそうであるが、そ

うではなく、已然形の独立性が強かった古代語の名残りと見るべきものである。すらあるのである。なお、「ぞ」「なむ」「や」「か」を受けて連体形で終止する例は、口語では「や」「なむ」は全く使われず、「ぞ」「か」がわずかに使われ、それも推量の助動詞「う」（「む」の変化形）「うず」（「むとす」の転じた「むず」の変化形）「らう」（「らむ」の変化形）など特定の語と呼応する例に限られていて、「や」「なむ」は全く使われなくなっている。

次に、音便について考察する。

古代語における音便の現れ方は極めて任意的で、音便が起り得る条件が揃っていても必ず音便化するということはなかった。そのため、現代語のように音便形が一つの活用形としての位置を占めるということはなかったのである。中世以降、一定の条件のもとにあつては次第に音便化する傾向が見られ、特に中世末期の口語では、助動詞「て」、助動詞「た」に続く場合、音便形をとり得る動詞はすべて音便形をとるようになったのである。

本抄における動詞の音便の状況は、当時の口語資料に見られる一般的な状況と何ら変わるものではない。すなわち、ラ行四段動詞では、

○仙人ハ暁ノ露ヲウケテ生ル。ソレヲ浦山シガリテ仙人ノ形ヲ作り（長恨歌抄七九頁）（天理本「浦山シガッテ」、京都本「浦山シガリテ」）

○サテ天子モ日ノ出ル時分出御ナツテ、百官百僚ニ合セラル、ゾ（同八九頁）（天理本「出御ナツテ」、京都本「出テ」）
○雲ハ翠ノ色カ本ヂヤゾ。其如ク鬢髪ガウツクシウマガリタ。体ヲ雲鬢ト云ゾ（同八八頁）（天理本「マガリタ」、京都本「髪ノ鉢」）

○此弟子共ハ皆若者ニテアリシガ、玄宗ノ御牢竜ヲ歎テ白髪ニナツタゾ（同二〇五頁）（天理本「ナツタゾ」、京都本「成也」）

のように、「て」「た」に続く場合でも音便を起こしたり、起こさずに原形であつたりしてまちまちである。ただし、

下接語	音便	原形	音便化率
—テ	23	16	59%
—タ	9	6	60%

語によっては「アリ（有）」のように、音便形をとり得る条件（長恨歌抄で一五例、そのうち「テ」に続くもの九例、「タ」に続くもの六例である。ただし、琵琶行抄には「アリ」の例なし）ですべて「アツテ」「アツタ」と促音便形をとっていることから、個々の語による音便化の遅速があつたことも考える必要があるであろう。因に、本抄におけるラ行四段動詞の音便化率は表に示すように、約六〇％である。

次に、カ（ガ）行・サ行の四段動詞では、音便形をとり得る場合、イ音便になるが、本抄におけるカ（ガ）行・サ行四段動詞が「テ」「タ」に続く際、音便を起こしたり、原形であつたりするのは「ラ」行四段動詞と同じである。すなわち、

○所詮貴妃ヲ不殺ハ又何タル禍ガ出来ランコトヲ不知ゾ。然レバ急イデ貴妃ヲ殺サント申也（長恨歌抄九五頁）（天理本ナシ、京都本「イソイデ」）

○安祿山ガフレヲマハシテ楊国忠ヲ伐ベキ由披露ス（同九二頁）（天理本「フレヲマワシ」、京都本「フレヲマハシテ」）

○謫居ノコトナレバ万ヅノ物思イノアル故力已ニ歡樂ヲシ出シタゾ（琵琶行抄一三四頁）（天理本「出タゾ」、京都本「シ出シタリ」）

のようである。ただし、ここで注目しなければならないのは、次の表に示した本抄でのカ（ガ）行とサ行四段動詞の音便化率の相違である。

〈カ(ガ)行四段動詞〉

下接語	音便	原形	音便化率
タ	4	2	67%
テ	12	0	100%

〈サ行四段動詞〉

下接語	音便	原形	音便化率
タ	0	2	0%
テ	4	20	17%

カ(ガ)行四段動詞では音便化率が大変高く、特に「テ」に続く場合には、偶然であろうか、一二例すべてが音便化している。これに対して、サ行四段動詞では、音便形をとり得るにもかかわらず音便化することが大変少ないのである。このことは、カ(ガ)行四段動詞の音便化がかなり進んでいて、現代語のように音便形が形態的に定着しつつあることを表していると言える。また、現代語ではサ行四(五)段動詞が「テ」「タ」に続く場合、絶対に音便化しないのであるが、本抄に見られるサ行四段動詞の音便形をとらない傾向も現代語のように原形をとる方向にあることを表しているものと理解されるのである。

次に、本抄におけるハ行四段動詞の音便形に関して、「テ」「タ」に続いた「アフ(遇)」「ウツ(移)」「ロフ」「オモフ(思)」「カイツクロフ(繕)」「ケハフ(化粧)」「シタガフ(随)」「ソフ(添)」「タチヤスラフ(立休)」「タマフ(給)」「ヌフ(縫)」の一〇語一二例のうち、「オモフ」「タマフ」が「テ」「タ」につづき音便形をとらない次の三例を除

いて、他はすべてウ音便化している。

○今ハ不思議ノ遠国ノ住居ヲセラル、程ニ慰メント思イテ尋行也(琵琶行抄一一九頁)(天理本「思イテ」、京都本「思ヒテ」)

○貴妃ニソイ玉イタ。時ハ夜ノ短キコトヲ恨ミ思召テ(長恨歌抄一〇六頁)(天理本「ソイ玉ヒタ」、京都本「ソイ玉フ時」)

○玄宗大ニ悦ビ玉イテ、サラバ行テ尋テクレヨト仰ラル、ゾ(同一〇九頁)(天理本「悦ビ玉ヒテ」、京都本「悦テ」)

ハ行四段動詞が早く撥音便形をとる例が見えるのは、中世前期(院政・鎌倉時代)の東国資料からであるとされるが、中世後期では主に文語文(訓読文)や東国資料に現れる。従って、抄物においても、東国系の抄物はもちろん、関西系の抄物にあっても訓読文では促音便形が現れ、抄文ではウ音便形をとったものが多く現れる⁽⁴⁾。本抄のハ行四段動詞が撥音便形をとらず全てウ音便形をとっているのも、こうした事情を反映しているものと思われる。

バ行・マ行四段動詞が「テ」「タ」に続く場合、本抄では、

○七月七日ノ夜半ニ貴妃ト玄宗ト只二人長生殿ニ御座アテ、今夜ノ牛女ノ契ハ昔ヨリ少モ替ルコトナイ、此ヲ羨ミテ、サラバ我モ世々ニ夫婦ト成ベシ、天上人間ノコトハ云ニ不及、或ハ鳥類トナリ、又ハ非情ノ草木トナル共契ハ替ルマイト私語シ玉フゾ(長恨歌抄一一七頁)(天理本「浦ヤミテ」、京都本「ウラヤミテ」)

のように、音便化しない例が「眉ノユガミタル」(同九七頁)「冠モ少シユガミタヲ」(同一一二頁)と併せて二語三例見られるが、音便化した例も見られる。バ行四段動詞の音便形は、『琵琶行抄』に、

○泉ノトコヲリテ、ムセンデ流ル、如ナ声モアリ(内閣本一二六頁)(天理本「咽センデ」、京都本「ムセンダル」)のように、「ムセブ(咽)」(むせび呟くような音をたてる意)の撥音便形が一例あるだけで、他はマ行四段動詞の音便形である。

中世後期におけるバ・マ行四段動詞が音便化する場合には、撥音便化するものと、ウ音便化するものとの二つが

ある。本抄において撥音便化したものは、先の「ムセブ」の他、「フクム(含)」(長恨歌抄一〇一頁)「小涙グム」(同一二二頁)の三語三例、ウ音便化したものは「カナシム(悲)」(一一四頁)「シラム(白)」(同一〇七頁)「シム(染)」(琵琶行抄一二二頁)「イサム(勇)」(同一二七頁)の四語四例である。いかなる場合に撥音便形をとり、いかなる場合にウ音便形をとり得るかということについては当時一定の法則があったようである。すなわち、バ・マ行四段動詞の連用形語尾「ビ」「ミ」の直前の母音が a・i・e・o である場合には長音便(ウ音便)、u である場合には撥音便になる。ただし、語幹が一音節からなる語の場合には、活用語尾の直前の母音に関係なく、撥音便になることが多い⁽⁵⁾という。本抄に見られるバ・マ行四段動詞の音便化は当時のこうした法則にほとんど符合しているが、語幹が一音節からなる「シム」については次のようにウ音便形をとって使われており、法則に反するものとなっている。

○紅葉ノ時雨ニアフテ色ノ深ク染タル時分、荻花モマツ白ニサキ散タルガ身ニシウデスサマジキヲ瑟々ト云ゾ
(琵琶行抄一二二頁)(天理本「シウデ」、京都本「シミニシウデ」)

なお、音便以外にも、本抄には中世後期の語法上注意されるものが見えるので列挙する。

動詞の敬語法としての「オ(御)：：アル」や形容詞に「御」を冠した例

○短夜ヲ御ナゲキアリシガ、貴妃ニ御別アツテヨリ初テ春ノ夜ノ短ヲモ事ノ外長イト思召也(長恨歌抄一〇六頁)

○玄宗ノ貴妃ガコトヲ忘ル、隙モナウ恋カナシマル、ヲ見テ、御イタハシイ事哉ト感ズルソ(同一〇九頁)

助詞「の」「が」の尊卑による使い分けの例

○「玄宗ノ弟」(同八〇頁)

○「楊玄琰カ女」(同八五頁)

助詞「ニ」が担う意味の領域への「へ」の侵入例

○我住所ガ湓江ヘ近イゾ(同一三四頁)

打消の過去を表す助動詞「ナンド」(なかったの意)の例

○カヤウニ結構ナル衣装ニ酒ヲコボシテ汚セドモ、何トモ思ハナンドゾ(琵琶行抄一二二頁)

五 語彙について

国語史上の中世後期は、日常語の中に前代よりさらに漢語の使用が増大すると共に俗語が台頭する時代である。本抄には、当時の日常語や俗語であったと思われる語の使用が目につく。特に接辞(接頭辞・接尾辞)には、それまでには見られなかった新しい語形のものが見れ、それらが既存語と結びついて派生語を造り出している点が注意される。

接辞のうち、接頭辞では、「ちよつとした」という意味を冠する「コ(小)——」が

○酔ホド酒ヲバノメドモ名残惜サニ小涙グデ打クツロイダ体モナイゾ(琵琶行抄一二二頁)

○低眉トハ、コカタムキニ傾タル体也(同一二五頁)

のように見え、「その度合いがなんとなく中途半端である」という意を添える「ナマ(生)——」が

○此程ノ山歌、村笛ニ耳モホウ／＼トシテナマキコヘニアツタガ、明ラカニ耳カ聞ユルゾ(同一三六頁)

のように見える。また、「完全に(まさに)——である」という意を表す「マ(真)」の促音化した「マツ——」と撥音化した「マン——」も、それぞれ次のように見える。

○ドコモカシコモ曇リナク、江ノ水ノマツ白ニ打開ニ漫々トシタルニ(同一二三頁)

○又、此在所ニ黄蘗、苦竹ナドガ家ノマンマハリマデ生シゲリタル也(同一三五頁)

一方、接尾辞では、体言や活用語の連用形や語幹などに「サウ」(情況から判断して、もうじきある様子が見られる意)、「ダラケ」(その物が一面に満ちている様子の意)、「ビル」(：らしく見えるの意)、「ラシイ」(いかにも：の様子であるの意)

などがついて、それぞれの意味を添えた、次のような語が見える。

○天河ガ牛寅ニナル時、東ガアカウ成テ夜ガアクルゾ。而モ星河モ牛寅ニナリ、東モシラウデアケサウニ成ホドニ、ウレシウ思召セバ、未ダ明ザル也（長恨歌抄一〇七頁）

○光陰ハ一飛鳥ノ如ニシテイツノ間二年ヨルトモシラズ。ハヤ白髪ダラケニナリシワモヨリタゾ（琵琶行抄一二頁）

○何タル風流ナ人ゾト耳ヲ欽テキケバ、都ニ聞ヤウナル声ニテ田舎ビレタル声ハナイズ（同二二〇頁）

○貴妃ガ顔ヲフリムイテ見カヘリテ、ソレハサウアツテ候ナド、返事ヲシテニコリト一笑スレバ、エクボガ出来テ何共云レヌ塩ガコボレテ、アイソラシイコトガ百シナ計デクルゾ（長恨歌抄八六頁）

このように、いろいろな既存語や新生語に接辞を付けることによって派生語を造り、語を増やしたのである。次に、動詞について見ると、ここにも古代語の世界には姿を現すことのなかった新しい語形が認められる。

○貴妃ガ久ク湯ニ入レバ、クタビレテソバニ仕ハル、女房達ニヨリカ、ツテタヨ／＼トシタ体、誠ニ心モ詞モ不及ウツクシキヲ、嬌——（無力）ト云也（長恨歌抄八七頁）

この「クタビレ」は「クタビル」（下二段活用）の連用形で「疲れ果てる」の意味を表す。

○玄宗大ニ悦ビ玉イテ、サラバ行テ尋テクレヨト仰ラル、ゾ（同二〇九頁）

この「クレヨ」は「クル（呉）」の命令形で、動詞の連用形に助詞「テ」を介して補助動詞的に用い、「……てくださる」の意味を表す。

○去程ニ三千人ノ宮女ガ御宿直ニ参ルヤウニトテ、朝夕ノ隙モナウ粉黛ヲケワウテ居ルゾ。其中ハ貴妃ノ更ニケツラハイデ出レバ、忿ノカザリ立タ女房顔色ヲ被テ奪影ガナイゾ（同八七頁）

この「ケツラフ（擬）」は「よそおう、めかす、化粧する」という意味を表す四段動詞である。この語について、

『日本国語大辞典』の「けつら・う」の項の補注に、「古い形に『けすらう』があり、それが変化した形と考えられるが、はっきりしない」としている。それは、この語の表記に「ケツラフ」「ケスラフ」という二通りがあつて、しかもこの語の用例が現れるのは中世以降ということで、必ずしも先後の関係を明らかにし得ないからである。しかし、『日本国語大辞典』の見出しの後に「『けづらう』とも」と補記し、「ケツラフ」の濁音形も存したことを示していることからすれば、当然、一方の「ケスラフ」にもその濁音形「ケズラフ」があつたと考えられるはずである。また、音韻の観点から、「ジ」と「ヂ」、「ズ」と「ヅ」のいわゆる四つ仮名に関しては、発音に区別を失ったことによる混同表記がかなり見られるものの、「ス」が「ツ」に変化する形は一般的ではないと言える。因みに、『岩波古語辞典〈補訂版〉』では、「けすら・ひ」の見出しの後に「『ケズラヒ』とも」としている。このようなことから、本抄では「ケツラフ」は、「ケズラフ」の「ズ」を「ヅ」と混同した「ケヅラフ」（抄物にあつては、片仮名表記による清濁の区別はまだ極めて不徹底であつた）と考えてよいのではなからうか。

なお、この用例に見える波線の「ケワウ」は、「ケハヒ（化粧）」の動詞形（四段活用）で、「（顔を）化粧する」の意味を表す語である。

○唐ノ法ニ、軍破ルレバ大將ヲ必生涯サスル程ニ、是ヲヨキ次ニシテ皆訴ヘ申セドモ、失ニアラズ、士卒ノ過也、ト云テ、玄宗ノ遂ニ生涯セラレヌゾ（同八一頁）

○モシ貴妃ガ面カゲニ少シナリトモ似タ人アラバ、御宿直ヲモサセラレウズレ共、少モ似タ人ハナケレバ（同二〇七頁）

この二つの用例に見える「サスル」「サセ」の語形は、使役の意味を表す「サス」（下二段活用）の連体形と未然形である。この「サス」は現代語の「仕事をさせる」の「させる」と同じで、本来「セ」（サ変の未然形）に「サス」（使役の助動詞）が付いた「セサス」が融合して、一語化したものである。

○明皇ノ、然ラバヲサナキ間女官ニシテ御使イアラウズ、年長タラバ婦スベシ、ト云テ、タライテ取テ、寿王ノ方へハ韋昭君ガ女ヲ玄宗ノ中媒シテヤリテ、貴妃ヲバソバヲ不放ヲカレタゾ（同八六頁）
「タライ」はサ行四段活用「タラス（誑）」の連用形「タラシ」のイ音便形で、「あざむく、だます、たぶらかす」の意味を表す。

○コ、ノ心ハ、都へ大勢ヲシヨセ天地モ響ク計リニドシメイテ来ルトキ、サシモ面白カリツル寛——（裳）羽——（衣）ノ曲ノ舞ヲモ打破テノクル也（同九三頁）

「ドシメイ」はカ行四段活用「ドシメク」の連用形「ドシメキ」のイ音便形で、「騒ぎ立てる」の意味を表す。また、この語を下位構成要素とした複合語「ワラ（笑）ヒドシメク」（同八一頁）もある。

なお、波線の「ノクル」は動詞の連用形に助詞「テ」を介して補助動詞的に用い、「 \therefore してしまう」の意味を表す「ノク（退）」の連体形である。

本抄には、形容詞にも当時の俗語として口語の世界で行われていたと思われるいろいろな語が見える。すなわち、

○一段愛ラシイケツコウナ処ゾ（長恨歌抄一一〇頁）（小さくて可愛いノ意）

○舞ヲモアラケナイ舞ヲバ不舞、イカニモシツカニ舞テ（同九一頁）（荒々しいノ意）

○此寒シイ衾ヲバ誰ト与ニカセン（同一〇七頁）

この「寒シイ」は、本来ク活用である「寒シ」をシク活用化し、心情語的な意味を添えたものと解される。

○音ノ軽テシツコカラズ、カル／＼ト手ノシタ、ルウナイヤウニ引ゾ（琵琶行抄一二六頁）

「シツコシ」は、煩わしいの意。「シタタルシ」は「舌タルシ」で、物言いが甘えているという意味を表す語を、動作の表現の意味に用いたものである。

○我ハソラ知ラズシテ等閑ナイ顔ヲシテ居テ、時節ヲ待タゾ（長恨歌抄八二頁）（うちとけて心安いノ意）

○地ガヒキイホド水ガタマツテ湿テ、行歩モ不自在ナゾ（琵琶行抄一三四頁）

一般に、形容詞の語幹の末尾の母音が i の場合はシク活用、それ以外の a・u・e・o の場合はク活用であるとされているが、本抄に見える「ヒキイ（低）」は平安時代において形容動詞「ヒキナリ」（漢文訓読語）であったものが形容詞化したもので、右の法則に反するものである。したがって、この「ヒキイ」は、やがて語幹の末尾母音を u に替え、「ヒクイ」にすることによってク活用を保持していくことになる直前の姿を示すものとして、極めて注目すべきものである。

○イカニミメノヨイ者ナレドモ無タシナミナ者モアル物ヂヤガ、此人ハ我身ラムサウ持テハサテ思テ清——
厳 飾ニスルゾ（同八六頁）（不潔であるノ意）
厳 飾ニスルゾ（同八六頁）（不潔であるノ意）

以上、国語史上の『長恨歌・琵琶行抄』について、内閣文庫本を中心に、中世後期の口語資料として、音韻・語法・語彙の各観点から、特に注目されるべきものにしほって取り上げ検討してきた。本抄には、副詞や接続詞などにもまだまだ興味ある語がたくさんあるが、これらを取り扱った拙稿があるので、ここでは触れないこととした。また、「夢中ニ泣ク涙ガ紅ニシテ、欄干ト縦横ニコボル、ゾ」（琵琶行抄一三三頁）といった文選読みがあったり、「何レモワケモ聞ヘヌヲカシイ田舎ブシヲウタウホドニ、聞クモカシラガ打ゾ」（同一三五頁）のような慣用句があったりするが、それらについての検討は別の機会に譲ることとする。

〔注〕

（1）内閣文庫本『長恨歌・琵琶行抄』の国語学的考察については、すでに拙稿『長恨歌抄』について一付、自立語索引「『文学論藻』第五十一号、昭和五年十二月」があり、本章で取り扱った内容と重複するところがあることをお断わりしておく。

（2）同一抄物において、「ゾ」体と「ナリ」体の混体が具現することの意味については、拙稿「清原宣賢講『論語抄』にお

ける文末表現について「指定辞「ゾ」「ナリ」を中心として」(『国語学研究』〈東北大学〉第十一集、昭和四十七年九月)において考察したことがある。

- (3) 一般散文には、平安時代末期からの説話、歌論書等に見えるという。前田富祺「ヒネモスの語形変化」(『国語学研究』第三集、昭和三十八年六月)

なお、長恨歌の訓法について考察したものに、小林芳規「漢文訓読史研究上の一応用面―伝菅原道真訓点の検討」(『国文学攷』第四十号、昭和四一年六月)がある。また、高等学校の古典(漢文)教材五種に採られた長恨歌の訓法について検討した拙稿「長恨歌の訓法について」(『国語展望』〈尚学図書〉第四十六号、昭和五二年五月)がある。

- (4) 大塚光信「抄物文」(『岩波講座日本語10 文体』、昭和五二年九月)

なお、室町時代の諸種の資料に現れるハ行四段動詞の音便については、たとえば、蜂谷清人「室町末ハ行四段動詞連用形の音便―狂言・説教・幸若舞を中心に―」(『国語学研究』第十八集、昭和五三年十二月)、外山映次「ハ行四段活用動詞音便形について―洞門抄物の場合―」(『近代語研究』第二集、昭和四三年一月)などがある。

- (5) 大塚光信「バ四・マ四の音便形」(『国語国文』第二四卷第三号、昭和三〇年三月)

- (6) 注(1) 文献に同じ。

なお、抄物の接続詞について考察した拙稿に「抄物の接続詞について」(『国語学研究』第十四集、昭和五〇年三月)がある。

第十章 『琵琶行抄』の語彙

本章は、『琵琶行抄』における語彙論的考察を中心にまとめたものである。周知のごとく、「琵琶行」は白楽天によつて作られた八十八句から成る七言古詩で、「長恨歌」と併称され、古来、源氏物語をはじめとするわが国の文学作品と深く関わりをもち、多くの人々に受容されている。

なお、資料としては内閣文庫現蔵『琵琶行抄』⁽¹⁾を用いた。

- (1) 異なり自立語数と延べ自立語数

『琵琶行抄』(以下、「本抄」という)におけるすべての自立語⁽²⁾について、品詞別一覧を最後に掲げたが、それによると、本抄は総異なり自立語数七五六、総延べ自立語数一、四八五からなる。この延べ語数の増加に対する異なり語数の増加は、

延べ語数一〇〇〇の点で、異なり語数五五一

延べ語数二〇〇〇の点で、異なり語数一〇二二

である。

- (2) 品詞別比率

右の異なり語数と延べ語数を品詞別に整理すると〈表1〉のごとくである。

「ツレ（連）」（種類・程度・たぐいノ意）
 「名詞」

右の四十一語は、大部分が通時的共時的に素材内容に関わりなく共通して出現する、叙述に必要な基本的な語である。ただし、一方においては、「ヒク（引・弾）」「ビハ（琵琶）」「コエ（声）」「フネ（船）」など、『琵琶行抄』の内容を形づくる基礎的な語も入っており、これらが本抄の特徴を表し得る語である。

(4) 注意される語

- ① イフ〈云〉(34) ② ヒク〈引・弾〉(34) ③ アリ〈有〉(32) ④ コエ〈声〉(27) ⑤ コト〈事〉(23)
 ⑥ キク〈聞〉(21) ⑦ ス〈為〉(20) ⑧ ナシ〈無〉(20) ⑨ コノ〈此〉(17) ⑩ ビハ〈琵琶〉(15)
 ⑪ オモフ〈思〉(14) ⑫ フネ〈船〉(14) ⑬ ヤウ〈様〉(14) ⑭ ワレ〈我〉(14) ⑮ ココロ〈心・情〉(13)
 ⑯ ヒト〈人〉(13) ⑰ ミヤコ〈都〉(13) ⑱ ラクテン〈楽天〉(13) ⑲ モノ〈者〉(11) ⑳ トキ
 〈時〉(10) ㉑ キヨク〈曲〉(9) ㉒ テイ〈体〉(9) ㉓ キル〈居〉(9) ㉔ イマ〈今〉(8) ㉕ シヨ
 ウジヨ〈娼女〉(7) ㉖ トコロ〈処・所〉(7) ㉗ ミヅ〈水〉(7) ㉘ モノ〈物〉(7) ㉙ マタ〈又〉
 (7) ㉚ コレ〈是・此〉(6) ㉛ サケ〈酒〉(6) ㉜ シル〈知〉(6) ㉝ イト〈糸〉(5) ㉞ オモシロ
 シ〈面白〉(5) ㉟ ガク〈楽〉(5) ㊱ シヨウズ〈上手〉(5) ㊲ ナカ〈中〉(5) ㊳ ムカシ〈昔〉(5)
 ㊴ ハヤ〈早〉(5) ㊵ ソノ〈其〉(5) ㊶ マウス〈申〉(5)

容動詞とも解せるものであるが、一応副詞として扱った。

(3) 使用度数の大きい語

本抄の総異なり語の中、使用度数の大きい語（五回以上）を上位から順に四十一語を示すと次のごとくである。これら四十一語の異なり語によって延べ語数の三分の一が占められている。（括弧内の数字は使用度数を示す）

〈表2〉

品 詞	延べ語数 による比 率 %	異なり語 数による 比率 %
名 詞	63.6	75.2
動 詞	27.4	17.5
形 容 詞	2.8	2.1
形 容 動 詞	1.0	1.4
副 詞	3.4	3.1
連 体 詞	1.4	0.2
接 続 詞	0.4	0.2
感 動 詞	0.0	0.0

〈表1〉

品 詞	異なり語数に 対する比率		延べ語数に 対する比率	
	語 数	比 率	語 数	比 率
		%		%
名 詞	409	54.1	792	53.4
動 詞	229	30.3	477	32.2
副 詞	64	8.5	97	6.6
形 容 詞	34	4.5	65	4.4
形 容 動 詞	10	1.3	17	1.0
接 続 詞	5	0.7	6	0.4
連 体 詞	4	0.5	30	2.0
感 動 詞	1	0.0	1	0.0
計	756	99.9	1,485	100.0

本抄において、異なり語数、延べ語数の多い品詞は、名詞、動詞の二品詞であって、全体の八〇パーセントを超えている。本抄におけるかかる数値は、ほぼ抄物一般に現出せるもののものであつて、たとえば、本抄とまったく抄の内容を異にする仏書の特異な内容をもった『六物図抄』⁽³⁾と対比してみても、異なり語数および延べ語数に対する各品詞の比率とその順序は〈表2〉のごとくほぼ同じ様相を呈し、抄物という一つの註釈文体によって表す表現形式の画一性をみることができるのである。

抄物に名詞の使用が多いことは、抄物が一般に漢文の原点（テキスト）を講義するという条件を考えれば首肯し得るところであるが、更に顕著なのは漢語の使用が極めて多いということである。本抄にあらわれた漢語は異なり語の三〇パーセントを占め、その中、大部分が名詞であつて、その他動詞、副詞に若干漢語が認められる。ただし、動詞の漢語はすべて漢語サ変動詞であるから（後掲、品詞別自立語一覽参照）、やはり名詞に含まれるものである。また、副詞については「サウサウト（嘈々）」「セツセツト（切々）」「マンマント（漫々）」の三語であるが、これはいずれも形

○娼女トハモト都ニテアリシ遊女ソ、酒宴ナトノ時節シヤク取テ一節ウタウツレノ者也(一二〇⑥)
 〈副詞(特に、擬声・擬態語)〉

「クワツト」

○流留ル水ノクワツト流ルルヤウナ声モアルソ(一二六⑪)
 「クワリクワリト」

○随意ニクワリ／＼ト引ク鎗ハホコ也(一二八②)

「コロリコロリト」

○水精ノ玉ナトヲ玉テシタル盤ノ上ヲコロハカセハコロリ／＼ト鳴テ音ノ輕テシツコカラス(一二六④)
 「サツサツト」

○水ノサツ／＼ト流ルルカ流留テチトシフルヤウニ引ソ(一二七②)
 「サツト」

○イカニモ静ナ曲ヲ一ツ引テ沈ミ入テ此曲ヲ吟シテサツト撥ヲ取ヲイテ(一二八⑪)
 「サラリト」

○錚々トハ輕イ声ノ金ナ音ナトノサラリトスルヤウニ涼キ声ヲ云ソ(一二〇①)
 「スリト」

○凝絶シテ其色カスリト行ヌヤウナル時暫クヒキヤムソ(一二七③)
 「チンチント」

○比巴(琵琶)ノ軸ヲ^(メグラ)轉シ絃ヲチン／＼トナラスソ(一二四⑥)
 「トロリト」「ユラリト」

○此娼女カ眉ヲ作り髪ヲユラリトサケテ十二ヒトヘノツマヲトリテ座敷ヘ出レハイカナ貴人高家モトロリト成ホトニ残リノ遊女共力^(ネタミ)是ヲ妬ソネムソ(一二〇⑤⑦)

「ハラハラト」

○嘈々トハラ／＼トシタタカニ引コエ也(一二五⑫)

○涙(紅闌干)一ハラ／＼トイクスチモ流ルヲ云也(一二三⑧)

「ハラリチント」

○此時ニ当テ曲ヲ暫ク引止テスマシキツテ居タルハハラリチント声ノアルヨリハ猶勝レテ面白ソ(一二七⑧)
 「ハラリト」

○絃ノ声ヲ輕クヲサヘ慢クヒネリテハラリト糸ヲ撥テ復挑^{カヘス}トハ其手ヲ拳ツヲロシツスルソ(一二五⑥)

「ホウホウト」

○此程ノ山歌村笛ニ耳モホウ／＼トシテナマキコヘニアツタカ明ラカニ耳カ聞ユルソ(一二五③)

〈動詞〉

「サビカヘル(寂返)」(ひっそりと静まりかえるノ意)

○今ハ門前モサヒカヘリテ車騎ヲヨスル人モナクアワレヲ問人モナイソ(一二三⑥)

〈形容詞〉

「シツコシ」(くどくどしく煩わしいノ意)「シタタルシ」(舌怠)(仕草がしつこくべたべたしているノ意)

○水精ノ玉ナトヲ玉テシタル盤ノ上ヲコロハカセハコロリ／＼ト鳴テ音ノ輕テシツコカラスカル／＼ト手ノシタ、ルウナイヤウニ引ソ(一二六⑤)

〈接頭・接尾辞〉

「コナミダ（小涙）グム」

○酔ホト酒ヲハノメトモ名残惜サニ小涙クンデ打クツロイタ体モナイソ（一二二⑩）

「コカタムキ（小傾）」

○低眉トハコタカムキニ傾タル体也（一二五②）

「コロバカス」（「転ブ」＋「カス」）

○水精ノ玉ナトヲ玉テシタル盤ノ上ヲコロハカセハコロリ／＼ト鳴テ（一二六④）

「シラガ（白髪）ダラケ」

○光陰ハ一飛鳥ノ如ニシテイツノ間二年ヨルトモシラスハヤ白髪タラケニナリシワモヨリタソ（一二三③）

「オナカ（田舎）ビル」

○何タル風流ナ人ソト耳ヲ欽テキケハ都ニテ聞ヤウナル声ニテ田舎ビレタル声ハナイソ（一二〇③）

本抄には、音韻・表記さらに語法・訓法などの方面に亘ってそれぞれ指摘すべき諸現象が見出せるが、前章で触れているので、ここでは語彙的考察のみに止めることにする。

〔注〕

（1）「于時天正丁丑文月初五書写之畢 玄鉤斎時通」の識語をもつ。和袋綴。三十丁（内、「琵琶行抄」十丁）。每半葉十二行。外題「琵琶行和解」、内題「琵琶行并序 真宝第九」。ただし、本章では影印本『長恨歌・琵琶行抄』（国田百合子解説・校異、武蔵野書院刊）を使用した。

（2）ただし、「琵琶行」の原漢文および抄者による漢文ならびに引用（注）の漢文など以外の、和文にみえる全自立語である。

（3）「永正本六物図抄附解説及索引」（寿岳章子・樺島忠夫・大塚光信共編。謄写盤）を使用。

『琵琶行抄』品詞別自立語一覧（注 語の採録は、適当と判断をくだしたヨミ方にしたがって行った。各語の下の数字は用例数を示す）

〔名詞〕

アキ（秋）3 アサマシサ（浅）1 アシ（葦）1 アタリ（辺）1 アネ（姉）2 アハレ（哀）3 アヒダ（間）
 3 アヤ（綾）1 アラソヒ（争）1 アレ（彼）3 アンオン（安穩）1 アンカン（安閑）1 アンコン（暗恨）
 1 アンリヨウ（安陵）1 イウヂヨ（遊女）2 イウヂヨドモ（遊女共）1 イキ（息）1 イクスズ（幾筋）1
 イサミ（勇）1 イシヤウ（衣裳）2 イチギ（一義）1 イチダン（一段）1 イチド（一度）1 イチネン（一年）
 1 イチヒテウ（一飛鳥）1 イツ（何時）1 イツキヨク（一曲）4 イツツ（五）1 イツパイ（一盃）2 イヅ
 ミ（泉）1 イヅレ（何）1 イト（糸）5 イハク（云）1 イヘ（家）2 イマ（今）8 イライ（以来）1 イ
 ロ（色）2 イロイロ（色々）2 ウグヒス（鶯）1 ウタ（歌）1 ウチ（中）1 ウヂ（氏）1 ウツツ（現実）
 1 ウヘ（上）2 ウマ（馬）2 ウマムシヤ（馬武者）2 ウラミ（恨）2 ウレヘ（愁）1 ウンウン（云々）1
 エイグワ（栄花）2 エイリヨ（叡慮）1 エモン（衣文）1 オソサ（遅）1 オト（音）2 オウト（夫）4
 オトウト（弟）1 オモシロサ（面白）1 オモテ（面）1 オモヒ（思）1 オリモノ（織物）1 オンガク（音楽）
 1 オンメ（御目）1 カウ（江）2 カウガイ（筭）2 カウケ（高家）2 カウコ（江湖）1 ガウシウ（江州）
 1 カウスイ（江水）1 カウテイ（高帝）1 カウホ（行歩）1 ガク（楽）5 ガククワン（楽官）1 ガクニン
 ドモ（楽人共）1 カゲ（影）1 カシコ（彼処）1 カシラ（頭）1 カタナ（刀）1 カナオト（金音）1 カ
 ホ（顔・兒）2 カミ（髪）1 カモメ（鷗）1 カヤウ（斯様）3 カリネ（仮寝）1 カン（感）1 カンザシ
 （簪）1 ガンシヨク（顔色）1 キ（黄）1 キウ（急）1 キウカウ（九江）1 キウカウゲン（九江郡）3 キ
 ウシキ（旧識）2 キゲン（機嫌）1 キジン（貴人）2 キヌ（絹）2 キミ（君）1 キヤク（客）4 キヨウ

(興) 1 キヨウチウ(胸中) 2 キヨゲツ(去月) 1 キヨク(曲) 9 キヨクテウ(曲調) 1 キヨネン(去年)
 1 ギン(銀) 1 キンゴク(近国) 1 クニ(邦) 1 クモリ(曇) 1 クラ(鞍) 1 クレナキ(紅) 4 クロガ
 ネ(鉄) 1 クワウイン(光陰) 2 クワビン(花瓶) 1 クワン(官) 1 クワンゲン(管弦) 2 クワンラク(歎
 楽) 1 ゲイシヤウウイ(霓裳羽衣) 1 ケイテイ(惠帝) 1 ケイテイ(景帝) 1 ケツコウ(結構) 1 ケフ(今
 日) 1 ゲン(絃) 4 ゲングワイ(言外) 1 ゲンゲン(絃絃) 1 ケンソウ(憲宗) 1 ゲンチウ(絃中) 1 ケ
 ンモン(権門) 1 ゴ(語) 1 ゴイ(語彙) 1 コウエフ(紅葉) 2 コウタ(小歌) 1 コウバイ(紅梅) 1 コ
 カタムキ(小傾) 1 ココ(此処) 2 ココロ(心・情) 13 ココロヅカヒ(心遣) 1 コソデ(小袖) 2 コト(事)
 23 コトシ(今年) 1 コトドモ(事共) 1 コトバ(言) 2 コナタ(此方) 1 ゴリヨウ(五陵) 1 コレ(是・
 此) 6 コレホド(是程・此程) 4 コレラ(此等) 1 コロホヒ(比) 1 コロモ(衣) 2 コエ(声) 27 コエゴ
 エ(声声) 1 ゴンゴダウダン(言語道断) 1 コンシノイタリ(懇志至) 1 コンボン(根本) 1 コンヤ(今夜)
 1 サイクワイ(再会) 1 ザイシヨ(在所) 1 サウテウ(早朝) 1 サウネン(壮年) 1 サカヅキ(盃) 1 サ
 カモリ(酒盛) 1 サクザツ(錯雑) 1 サケ(酒) 6 ササヤキゴト(囁言) 1 ザシキ(座敷) 1 サセン(左遷)
 1 サマ(兒) 1 サル(猿) 1 サンカ(山歌) 1 サンクワイ(参会) 1 サンゲモノガタリ(懺悔物語) 1 ジ
 (辞) 1 シウゲツ(秋月) 2 シウコン(愁恨) 1 シグレ(時雨) 1 シクワン(仕官) 1 シゲン(四絃) 1 シ
 シヤウ(師匠) 1 ジセツ(時節) 1 シバ(司馬) 2 シバドノ(司馬殿) 1 ジフサン(十三) 1 ジフニヒトヘ
 (十二単衣) 1 シブン(詩文) 1 ジブン(時分) 3 シヤウガセン(鄭が箋) 1 ジャウズ(上手) 5 シヤウヂヨ
 (娼女) 7 シヤウニン(商人) 2 シヤウフ(樵夫) 1 シヤウリヨ(商旅) 1 シヤキ(車騎) 1 シヤク(酌) 1
 ジユウワウ(縦横) 1 シュエン(酒宴) 2 シュクン(主君) 1 ジュシヤ(儒者) 1 シュンプウ(春風) 1
 ジヨ(序) 1 シヨウラン(勝覽) 1 シヨサ(所作) 1 シヨモウ(所望) 1 シルベ(標) 1 シワ(皺) 1 ジ

ンカン(人間) 1 シンギヤウ(心行) 1 シンジ(心事) 1 シンデウ(心中) 1 シンルイシュウ(親類衆) 1
 ズイイ(随意) 1 スイシヤウ(水精) 1 スイジヤウ(水上) 3 スズシ(生絹) 1 スンイン(寸陰) 1 セイカ
 (勢家) 1 セウテイ(昭帝) 1 セウネン(少年) 1 セジャウ(世上) 1 ゼンサイ(善才) 1 センシホ(千人)
 1 センニン(仙人) 1 ソナタ(其方) 3 ソンテキ(村笛) 1 ダイイチ(第一) 1 ダイジフニ(第十二) 1
 タウ(唐) 1 タウセイ(当世) 1 タキヤウ(他郷) 1 タクキヨ(謫居) 1 タグヒ(類) 1 タダイマ(只今)
 1 タチ(太刀) 1 タマ(玉) 2 タメ(為) 1 タレ(誰) 4 チ(地) 1 チ(血) 1 チイン(知音) 4 チ
 インタチ(知音達) 1 デウキヨ(住居) 2 チカラ(力) 2 ギク(軸) 1 ギサガリ(地下) 1 チジン(知人)
 3 チヤ(茶) 1 チヤウアン(長安) 1 チヤウリヤウ(長陵) 1 ギウシヨ(住所) 1 ツキ(月) 1 ツキカゲ
 (月影) 1 ツマ(妻) 1 ツマ(棲) 1 ツレ(連) (「種類」の意) テ(手) 4 テイ(体) 9 テウジウ(鳥獸)
 1 テウボ(朝暮) 1 テキクワ(荻花) 1 テンカ(天下) 1 テンガイ(天涯) 1 テンジャウ(天上) 1 トウ
 カン(等閑) 1 トキ(時) 10 ドコ(何処) 2 トコロ(所・処) 7 トシ(年・歳) 4 トリ(鳥) 2 ナ(名) 1
 ナイケウバウ(内教坊) 1 ナカ(中) 5 ナゴリヲシサ(名残惜) 1 ナゴリヲシミ(名残惜) 1 ナニ(何) 3
 ナマキコエ(生聞) 1 ナミダ(涙) 3 ナンニヨ(男女) 1 ナンビヤクニン(何百人) 1 ニガタケ(苦竹) 1
 ニシ(西) 1 ニチャ(日夜) 1 ニツポン(日本) 1 ニネン(二年) 1 ニヒヤククワン(二百貫) 1 ニヨウ
 シウ(饒州) 1 ヌヒ(縫) 2 ネンガウ(年号) 1 ノコリ(残) 1 ノチ(後) 1 ハウ(方) 1 ハカマ(袴)
 2 ハクキヨイ(白居易) 5 ハタウ(波濤) 1 バチ(撥) 2 ハヅカシガリ(恥) 1 ハテ(果) 3 ハナ(花)
 2 バン(盤) 1 ヒ(灯) 1 ヒガシ(東) 1 ヒキデモノ(引出物) 1 ヒキヤウ(引様) 1 ヒト(人) 12 ヒ
 トコエ(人声) 1 ヒトシラメ(一調) 1 ヒトタチ(人達) 1 ヒトツ(一) 1 ヒトトコロ(一所) 1 ヒトフシ
 (二節) 1 ヒトリ(独・一人) 3 ビハ(琵琶) 15 ビハカウ(琵琶行) 2 ヒヤウシ(拍子) 1 ヒヤククワン(百

貫 1 ヒヤクシホ(百人) 1 ヒル(昼) 1 フ(婦) 1 フウガ(風雅) 2 フウフ(夫婦) 2 フウリウ(風流)
 1 フェ(笛) 1 ブジ(無事) 1 フシギ(不思議) 1 フジザイ(不自在) 1 フタツ(二) 2 フタリ(二人)
 2 ブテイ(武帝) 1 フネ(舟・船) 14 フヘイ(不平) 1 フベン(不弁) 1 フリヤウケン(浮梁県) 1 フリ
 ヨ(不慮) 1 フリヨノホカ(不慮外) 1 ブン(分) 1 ブンイン(分陰) 1 ヘイケ(平家) 1 ヘイリヨウ(平
 陵) 1 ベツ(別) 3 ヘンジ(返事) 1 ヘンポウ(返報) 1 ホウイウ(朋友) 1 ボウリヨウ(茂陵) 1 ホカ
 (外) 1 ボクドウ(牧童) 1 ホコ(銚) 2 ホトトギス(杜鵑) 1 ホトリ(口) 2 ボンカウ(盆江) 1 ボンホ
 (盆浦) 1 マ(間) 1 マヒマヒ(舞舞) 1 マヘ(前) 2 ママ(儘) 1 マユ(眉) 1 マンザ(満座) 1 マン
 マハリ(真周) 1 ミ(身) 3 ミカド(帝) 1 ミチ(道) 1 ミツ(三) 2 ミヅ(水) 7 ミヅカラ(自) 1
 ミナ(惣) 1 ミミ(耳) 3 ミヤウネン(明年) 2 ミヤコ(都) 13 ムカシ(昔) 5 ムカシイマ(昔今) 1 ム
 カシモノガタリ(昔物語) 2 ムサウ(無双) 1 ムツツ(六) 1 メ(目) 1 メイゲツ(明月) 1 モウガデン
 (毛が伝) 1 モト(本) 1 モノ(物) 7 モノ(者) 11 モノオモヒ(物思) 1 モノシリ(物知) 1 モノドモ
 (者共) 1 モン(門) 1 モンゼン(門前) 1 ヤウ(様) 15 ヤウリヨウ(陽陵) 1 ユフグレ(夕暮) 1 ユメ
 (夢) ユエ(故) 2 ヨ(余) 2 ヨ(予) 1 ヨウギ(容儀) 1 ヨシアシ(好悪) 1 ヨソ(他処) 1 ヨツ(四)
 1 ヨル(夜) 4 ヨロヅ(万) 2 ラク(楽) 1 ラクテン(楽天) 13 ランカン(欄干) 1 リジユン(利潤) 1
 レイ(礼) 1 レウジ(聊爾) 1 ロクグ(六具) 1 ワガミ(我身) 2 ワキ(脇) 1 ワレ(我) 14 牛ナカ
 (田舎) 6 牛ナカブシ(田舎節) 1 エンアウノフスマ(鴛鴦衾) 1 ヲ(緒) 1 ヲリフシ(折節) 1 ヲンゴク
 (遠国) 4 ヲンナ(女) 1

〔副詞〕

アルイハ(或) 2 イカニモ(如何) 2 イハムヤ(況) 1 イマ(今) 3 イマサラ(今更) 1 イマダ(未) 1

エ(能) 1 オホイニ(大) 1 カク(斯) 1 カタガタ(旁々) 1 カマヒテ(構) 1 カルガルト(軽々) 1 ク
 ワット 1 クワラリクワラリト 1 コロリコロリト 1 サウサウト(剽々) 1 サスガ(流石) 1 サゾ(嘸) 1
 サダメテ(定) 1 サツサツト 1 サツト 3 サテモ 2 サラニ(更) 2 サラリト 2 シヅシヅト(静々) 1 シ
 バラク(暫) 2 シブシブニ 1 スデニ(已) 1 スルリト 1 セツセツト(切々) 2 セメテ 1 ソコバク(若干)
 1 ソソト 2 ソト 1 タガヒニ(互) 2 タダ(只) 3 チト 2 チンチント 2 トモニ(共) 1 トロリト 1
 ナホ(猶) 2 ナントモ(何) 3 ハジメテ(始) 2 ハヤ(早) 5 ハラハラト 2 ハラリチント 1 ハラリト 1
 ヒトシホ(一入) 2 ホウホウト 1 マイテ 1 マコトニ(誠) 1 マタ(又) 8 マヅ(先) 1 マンマント
 (漫漫) 1 ミヅカラ(自) 1 ムサムサト 1 モト(旧) 2 ヤヤ(稍) 1 ユメニモ(夢) 1 ユラリト 1 ユル
 ユルト 1 ヨク(能) 1

〔連体詞〕

コノ(此) 17 ソノ(其) 6 ナンタル(何) 3 ワガ(我) 4

〔接続詞〕

オナジク(同) 1 サルホドニ(去程) 2 サレドモ 1 デヤホドニ 1 マタハ(又) 1

〔感動詞〕

アラ 1

〔動詞〕

〔四段〕アザケル(嘲) 1 アタル(当) 1 アヒアフ(相逢) 1 アヒチカヅク(相近) 1 アフ(逢) 3 アラ
 ソフ(争) 1 イサム(勇) 1 イフ(言) 34 ウク(浮) 1 ウタフ(歌・唱) 3 ウチクダク(打碎) 1 ウチク
 ツログ(打寛) 1 ウチスゴス(打過) 1 ウチタツ(打立) 1 ウチヒラク(打開) 1 ウツ(打) ウツス(遷)

1 ウツリメグル(徒巡) 1 ウツル(移) 1 ウツロフ(移) ウルホス(湿) 1 オク(置) 4 オクル(送) 4
 オクル(贈) オヒシゲル(生茂) 1 オモヒキル(思切) 1 オモヒシル(思知) 1 オモヒダス(思出) 2 オ
 モフ(思) 14 オロス(降) 1 カイツクロフ(搔繕) 1 カカル(掛) 1 カクス(隠) 1 カタムク(傾) 1 カ
 タル(語) 3 カナフ(叶) 1 カフ(買) 1 カヘル(帰・返) 4 キク(聞) 21 クダル(下) 1 クラス(暮)
 1 コギイダス(漕出) 1 コヅタフ(木伝) 1 コナミダグム(小涙) 1 コボス(零) 2 コロバカス(転) 1
 サフ(候) 3 サク(咲) 1 サス(差) 2 サス(挿) サビカヘル(寂返) 1 サル(去) 1 シイダス(為出)
 1 シタガフ(随) 1 シヅミイル(沈入) 1 シブル(渋) 1 シム(染) 2 シメル(湿) 1 シル(知) 6 ス
 マシキル(澄切) 1 スマス(澄) 1 スム(住) 1 ソムク(背) 1 ダス(出) 1 タダス(正) 1 タチカヘル
 (立帰) 1 タツ(立) タヅネユク(尋行) 2 タマル(溜) 1 タヤス(絶) 1 チル(散) 1 ツカサドル(掌)
 1 ツクル(作) 4 トドコホル(滞) 2 トドマル(留) 1 トフ(問) 3 トリオク(取置) 1 トル(取) 4
 ナガス(流) 1 ナガレトドマル(流留) 3 ナキダス(泣出) 1 ナク(泣) 2 ナク(鳴・啼) 2 ナグサム(慰)
 2 ナス(為・成) 3 ナラス(鳴) 4 ナラフ(習) 1 ナル(成) 3 ナル(鳴) 1 ネタミソネム(妬嫉) 1
 ノゾム(臨) 1 ノム(飲) 4 ノリウツル(乗移) 3 ノル(乗) 2 ハゴクム(育) 1 ハナツ(撥) 1 ハバカ
 ル(憚) 2 ヒキサク(引裂) 1 ヒキハタス(引果) 1 ヒキヤム(引止) 2 ヒク(引・弾) 34 ヒネル(捻) 1
 フカマル(深) 1 フク(吹) 1 マウス(申) 5 マツ(待) 2 マハス(回) 1 マモル(守) 2 マキリアフ
 (参考) 1 ミシル(見知) 1 ムセブ(咽) 1 メグラス(転) 1 メグリユク(遠行) 1 モテアソブ(翫) 1
 モヨホス(催) 1 ヤル(行) 4 ヤル(遣) 5 ユク(行) 3 ヨゴス(汚) 1 ヨム(読) 2 ヨル(依) 1 ヨ
 ル(寄) 3 ヨロコブ(悦) 2

〈上二段〉

オク(起) 1 オル(下) 1 ハヅ(恥) 1

〈下二段〉

アカム(赤) 1 アク(明) 1 アグ(挙) 1 アツ(当) 1 アヒマジフ(相交) 1 アヒムカフ(相邀) 1 アラ
 ハル(顯) 1 イヅ(出) 1 ウ(得) 1 ウツタフ(訴) 1 ウレフ(愁) 1 オサフ(押・抽) 4 オチブル(落)
 1 オトロフ(衰) 3 オボユ(覺) 1 カケヅ(懸出) 1 カサヌ(重) 2 キコユ(聞) 3 キハム(極) 1 コ
 タフ(答) 1 コボル(零) 1 サキミダル(咲乱) 1 サグ(下) 1 サシカタム(差堅) 1 サシヨス(差寄) 1
 サダム(定) 1 サム(醒) 1 シハジム(為初) 1 シボミハツ(菱果) 1 シラブ(調) 1 シラム(調) 1
 スグル(勝) 1 ススム(勸) 1 ソバタツ(欵) 1 ソフ(副) 2 ソム(染) 1 タヅヌ(尋) 1 タハムル(戲)
 1 タヘカヌ(堪兼) 1 タユ(絶) 1 ナガル(流) 4 ナグサム(慰) 1 ヌ(寝) 1 ノク(除) 1 ハツ(果)
 1 ヒキツム(引詰) 1 ヒキハナル(引離) 1 ヒキヤム(弾止) 2 ホトバシリヅ(进出) 1 ホム(美) 1 マ
 カス(任) 1 マナビウ(学得) 1 ミユ(見) 1 ヨス(寄) 1 ワカル(別) 2 ワスル(忘) 1 ワル(破) 1
 中ナカビル(田舎) 1

〈上一段〉

ナガメキル(眺居) 1 ミル(見) 4 キル(居) 9

〈カ変〉

ク(来) 1 デク(出来) 1 ムレク(群来) 1

〈サ変〉

ス(為) 20 アイメイス(哀鳴) 1 アヒタイス(相对) 1 ウチアンズ(打案) 1 カンズ(感) 1 キヨウズ(興)
 1 ギヨウゼツス(凝絶) 1 ギンズ(吟) 1 クワンゲンス(管弦) 1 サセンス(左遷) 2 ジタイス(辞退) 1